

503

258

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

始



503-258



ハヴロツク、エリス博士著

奥平利成譯

の 研 究

東京竹内書店藏版

大正
12. 6. 20
内交

序

叢にすだく虫の音、妻よぶ鹿の聲、何れか彼等生物の性的表現の一要素たる求愛的表示でないものはない。求愛はひとり人類のみならず、殆ど凡ゆる下等動物に至る迄見られる性的表示であつて、その領域は想像以上に廣汎であり、その有する意義は普通理解されてゐる以上に深遠であつて、生物界の性の神秘的秘鑰を顯示してゐる。

この種の事實的研究に於て世界的權威者なるハヴロック・エリス博士の該研究は、なめくじ、蜘蛛、蛙、諸鳥獸類より野蠻未開人、文明人に至る求愛方法の奇しき性的表示を闡明し微に入り細を極め、以て生物界全般に涉つて隱約の間に行はれてゐる奇異にして意味深い求愛表示の本質と役割とを生物學的根據よりして検討せんとしたものである。

求愛の果たしてゐる役割は、一言にすればチューメツセンスの誘發にあるが、チューメツセンスは、性的行爲の主要な素であり、必須の準備的過程でありながら、殆どすべての人々から看過せられ、爲めに吾々の大多數は完全なる性的表現を果たし得ないで生活してゐる所である

が、博士の本研究は、性的衝動の本質を釋ね、このチューメツセンスが性的表現に對して有する役割と効果とを専らに究明したものである。

エリス博士が性愛問題に於ける世界的權威であり、唯一人者である事は、更めて言ふを要しない程著明な事實であるが、しかし、茲に一言附言して置きたい事は、博士が世の所謂性愛學者と全然その撰を異にし、至醇なる情操と高邁なる志向と深遠なる學殖とを以て、性愛問題の方面より人間生活の解放に努力してゐる眞の人類解放的使徒であるといふ事これである。

本書は、博士の著書中に於ても特に博引旁證その極を究めたものであつて、一々その出所典據を明かにせんが爲めに、本書中に引用せる参考書目無慮二百種を超へ、而かもそれ等は何れも一八二〇年以後最近百年に渉る間に刊行せられた世界各國の著書・記録・雜誌を涉獵蒐集したものである。實にその博引精探驚くに堪えたものがある。

本書により讀者は眞實の性的表現の過程の如何にして果たさるべきかを教へらると共に、吾が日常不用意の間に看過してゐる生物の表現行爲にも、性の深い表示がある事に氣つき、讀者は自らの眼前にこれ迄思ひも到らなかつた生物界の新たなる未知の世界が照し出されたのを

感じないではゐられないであらう。

本書の引用文及び引用参考書目中、露、獨、佛、西班牙、ギリシヤ、ラテン、サンスクリット語の譯は、ドクトル・イーストレーキに師事せられし中山金之助氏を煩はした。序末ながら感謝の意を表す。

大正十二年五月

求愛の研究目次

第一章	性衝動の源泉……………	二
第二章	求愛の根本的意義……………	四
第三章	下等動物に於ける求愛……………	六
第四章	人類に於ける求愛……………	一〇一
	——性の藝術的表現——	
第五章	結 論……………	一四



研究

英國ハヴロツク、エリス著
奧平利成譯

第一章 性衝動の源泉

「本能」とは何ぞ——スペンサーの定義——ベックハム博士の定義——ロイド・モルガンの定義——Instinct (本能)の語は非學術的なり——本能の構成的要素——内的刺戟(衝動)——性的衝動——排泄衝動即性的衝動説——この學說の起因と根據——モンテーヌの言、ルーテルの皮肉——フェーレーの性的要求即排泄要求説——性的衝動の源泉を發見せんとして試みられたる下等動物に對する諸實驗——スバランザニー氏の蛙に就ての實驗——ゴルツ氏の實驗——タルカノフ教授の雨蛙に就ての實驗——若返り法發見の動機となれるスタイナーハ氏の白鼠に就ての實驗——スタイナーハ氏のエスカレンタ(食用蛙)に就ての新發見——去勢後の性的衝動の活動——精囊を剔去せる白鼠に就てのスタイナーハ氏の實驗——性的衝動と生殖諸腺との交渉——内分泌と二次性的特徴——スタイナーハ氏の卵精移植と性的衝動の實驗——スタイナーハ氏の結論——去勢後性的衝動の持續する理由——去勢後の四種別——カストラーチ、スバツドニス、スリビエー、スラシエー——宦官閹人の性慾は無力か——

マティヌニオン氏の報告——埃及の宦官に就てマリー氏の觀察——去勢と性慾との交渉——女子に對する去勢——(卵巢剔去手術)に就て——女子に對する去勢と性的衝動の影響——ジエール氏、グレーフェーク氏、アドレル氏の研究——ブルーム氏の女子の年齢と去勢との關係に對する研究——卵巢、輸卵管、子宮摘出手術と性的衝動——ローソン・テイト氏の報告——性的衝動と春機發動期との關係——更年期後に於ける性的衝動——先天的に生殖腺を缺如せる婦人の性的衝動——コツテリル氏、ムンデエ氏の報告——フェーレー氏の解釋——性的衝動の中樞に關する現今の假説——これに關する諸學者の説——この研究に關する始祖ガル氏の小腦中樞説——エリスの結論

本能とは何ぞ

「性的本能」といふ言葉は、人類はじめ他の下等動物に至るまでが等しなみに分有してゐる所の生殖に關する精神的現象の全野を網羅した言葉であると言ひ得る。性的本能といふ在來の定義を仔細に檢べて見ると、第一に「本能」といふ言葉の妥當な意味に就ても、古來種々の議論があり、また或る定義に至つては、「性的本能的行爲」といふ定義に、生

殖作用といふ純機械的過程を取除いてゐるものがあるのも事實である。けれども、斯うした定義は決して正しいとは言はれない。否正しくないばかりでなく、斯うした定義は、確かに無きに勝るものである。

スペンサーの定義

ハアバート・スペンサー (Herbert Spencer

譯者註——英の總合哲學者として有名な哲學者一八

九〇二)は、本能といふ言葉を定義して、「複雑な反射運動」"Compound Reflex action," であらうと言つてゐるが、此の定義は、普通に用ひられてゐる本能といふ言葉に對する定義としては、簡明であり且つ頗る妥當である。

ベックハム博士の定義

本能といふ言葉に關する可なり妥當な定義は、ベックハム博士

夫妻 (Dr. and Mrs. Peckham) の發表した『^{ハチ}胡蜂の本能と習慣とに就て』"On The Instinct and Habits of Solitary wasps," といふ研究の中に述べてゐる定義である。この定義に據れば、「本能と

は、その活らきに自覺作用の伴ふと否とは姑く措き、兎も角先驗的即ち經驗に先だつて存在し、同性間乃至同種族中の凡てのものが、ほど同じ方法を以て營む有ゆる複雑な行爲 (acta) であるといふ事が出来る」と言つてゐる。

ロイド・モルガンの定義

此の定義は、ロイツ・モルガン氏 (Lloyd morgan) も推賞して

ゐる所であるが、氏は此の定義を更に訂正、敷衍して恚う言つてゐる。「本能作用といふ事と、反射運動といふ事とは違ふ。それは主として作用の複雑さの程度によつて區別せられる。即ち、本能的作用とは經驗に先だつて起り、個人の幸福及び種族の保存の爲めに、内的刺戟と外的刺戟との協力によつて、起る。復雜な作用全體を總括した名稱である。此の作用は、先驗的作用であるとは言ふものゝ、經驗を積むに従つて、多少變更せられるにはせられるが、兎に角單り人類に限らず、他の動物に於ても同種の動物ならば、略ほ共通した方法を以て行なつてゐる作用を言ふ」と(モルガン氏著「動物の動作」"Animal Behavior," 1900, P. 21)。此の定義は、其儘移して、「性的本能」といふ言葉の定義に適用する事が出来る。性的本能の定義に關する種の問題は、モル (Molle) 著「兩性の性慾に關する研究」"Untersuchungen über die Libido Sexualis" の冒頭の一章に詳しく論ぜられてゐる。

Instinct(本能)の語は非學術的なり

最近に於ては、本能 "Instinct" といふ言葉は、

成るべく學術上には使用しない傾となつてゐる。恚うした傾向を招致するに至つたのには、レ

ーブ氏 (Loeb) の影響が與つて大なる力を添へてゐるのを見る。尤も最近の學者中に於ても、ビエーロン氏 (Tiron) の如きは、此の問題を論議して、矢張り「本能」といふ言葉を使用した方が便宜だと主張してゐるが、(ビエーロン氏「本能の實際問題」『Les Problemes Actuels de l'Instinct』——「哲學評論」Revue Philosophique, Oct., 1908 所載) ジョーシ・ボーン氏 (George Bohn) の如きは、その著「智能の起源」『La Naissance de l'Intelligence』(一九〇九年出版) の中に、本能に關する一章を設けて、此の言葉が學術上曖昧である事を指摘し、これを嚴密な學術上の言葉として使用しない方がいと主張して、次の様な意味の事を言つてゐる。本能といふ言葉は、中世紀の神學者乃至哲學者の使用した言葉の遺物であつて、今日ではだゞ吾々が、精神現象の分析に就て正確な智識を缺いてゐる事を隠蔽する場合都合の言葉として役立つ位のものであると。

上述の種々の研究は、普通に性的本能と呼び做されてゐる言葉の内容を解剖し、吟味しようと試み企てたあるが、尙一層適確に此の言葉の内容を把握しようとするには、第一に性的本能の作用を分析して、それが如何なる要素から成立してゐるかを檢査して見る必要がある。

本能の構成的四要素

ロイツ・モルガン氏 (Lois Moran) は、本能なるものゝ内容が四つの要素から成立してゐる事を説いて、次の様に説明してゐる。

- 第一 精神内部の命令が衝動 (Impulse) を喚起する。——(内的刺戟)
- 第二 外部よりの刺戟が衝動と協力して神経中樞を動かす。——(外的刺戟)
- 第三 神経中樞は、その刺戟に反應して作用を起し、外部に向つて洩れようとする活動的作用を惹起する。
- 第四 斯くして惹起された活動作用は、神経中樞組織と關係ある諸機關に働らき懸け、それが一行爲として現はれる。——而して此の行爲の爲めに、神経中樞が更に多少の影響を受ける。

(ロイド・モルガン氏「動物の本能と智慧」『Instinct and Intelligence in Animals』——雜誌「自然」(Nature) February 3, 1898 所載)

内的刺戟(衝動)

茲に、性的本能の研究を盡すためには、以上の四要素中の第一及び第二の要素に就て、特に十分なる論議を試みなければならぬ。其中、第二の要素中に述べた

「外的刺戟」に就ての研究は、拙著『性的心理の研究』“Studies in the Psychology of sex” 第四卷中の「性的淘汰」の題下に縷説してゐるからして、本書に於ては、主として第一の要素即ち内的刺戟とは如何なるものであるかといふ事、換言すれば、性的衝動なるものゝ、解剖を試みたいと思ふのである。

性的衝動即排泄衝動説

性的衝動の定義として昔からよく言はれてゐる事は、手短かに言へば「排泄衝動」といふ事である。此の言葉は、性的衝動の心理的要素を最小限度に縮めた言葉である。性的衝動は排泄衝動であるといふ定義は、如何にも事實に當つて居り、特に幼年時代の事實としては妥當である。排泄を催してゐるのを強ひて耐え忍んでゐる事から惹き起される苦痛の感情は、非常に激烈であり、従つてそれを排泄し、その苦しみから解放された場合の悦びは、それだけにまた非常に深く且つ大きい。併しさうは言ふものゝ、十分に成人した人の場合に於ては、此の欲求は大部分意識の奥に消え失せてゐる。それは、一つには在來の訓練から、また一つには不随意筋の運動が、爾かく放縱でないといふ事から來てゐる。それ故、幼年時代の事實を普通の場合にまで及ぼして、排泄衝動が性的衝動の要素であるとするのは、

餘りに根據薄弱である。さりながら、性的衝動即排泄衝動の議論は、在來幾多の學者の間に非常に勢力のあつた學説であつて、その爲め諷刺家は種々無作法な言葉を以て、此の事實をば諷刺の材料として用ひ來つた程である。

この學説の起因と根據

獄中に在る囚人達の間には、特に此の事實が強く感じられると見え、佛蘭西の囚人間の俗語には、女郎屋 “Brothel” をば “le cloaque” (汚物場・泥溝) と同じ意味に用ひてゐる。又中世紀の禁慾主義者達は、女をば「下水の上に建てた殿堂」: “A temple built over a sewer” といふ巧妙な言葉を以て呼んでゐた。

モンテーヌの言、ルーテルの皮肉

此の説と多少立場を異にしてはゐるが、モンテーヌ (Montaigne 一五三三—一五九二) もまた、『ヴァーナスは、要するに吾々が汚穢意に排泄する快樂以上の何物にも値しない。それは、單に自然が吾々の普通の排泄作用とは違つた方法によつて、排泄を行はせて呉れてゐるに過ぎぬ』と言ひ、結局上述の説を賛する様な口吻を洩らしてゐる。『モンテーヌ論文集』: “Essais” (Ivrell, ch.v)

ルーテル (Luther 一四八三—一五四六) もまた、性的衝動と排泄衝動とを比較して、結婚

は大小用の排泄と同様必要だと言つてゐる。トーマス・ムーア (Sir Thomas More) 譯者註——「夢想卿」の著者として
 有名な英の小説家(一)も『夢想卿』"Utopia"の第二巻に、「吾々が大小便をたす時、乃至は性的
 四七八—一五五三)作用を行ふ時」に感ずる悦びを描寫し、排泄の快感に説き及んでゐる。

フェーレー氏の性的要求即排泄衝動説

勿論、是れ等の見解は、眞面目に考察する
 價値の無い問題である。けれども、茲に注意すべきは、性的方面の研究其他に於ての權威とし
 て認められてゐるフェーレー氏(Féré)が、此の見解に賛し、性的衝動の定義中最も正確な定義
 だと主張してゐる事である。(フェーレー『性的顛倒の病理的原因』"La Predisposition dans l'éti-
 logie des perversions sexuelles"——「醫學評論」"Revue de médecine" (所載)氏の説に従へば、性
 的交渉の要求は畢竟排泄の要求である。その差はたゞ、性的行爲の要求にあつては、如何にせ
 ば最も快適に排泄を行ふ事が出来るかといふ事に就き種の方法を講ずるだけであつて、結局そ
 の根本は、排泄の要求から來てゐるといふのである。

性的衝動の源泉を發見せんとして試みられたる下等動物に對する

下等動物に就
 て觀察した事實よりすれば、フェーレー氏の見解は如何にも妥當である様に見える。それ故、

先づ第一に此の問題に就て今日迄觀察せられ來つた種々の重要な結果を述べる必要がある。

スバランザニー氏の蛙に就ての實驗

スバランザニー氏 Spallanzani は、性行爲中の牡
 蛙の四肢を截断しても、否時としては頭部を截切してさへも、四日乃至十日に涉つて性行爲を
 敢然として繼續し、牝蛙の脊上に坐り、前肢を以て堅く牝に獅子噛み付いてゐるといふ事實を
 例證してゐる。

ゴルツ氏の實驗

ゴルツ氏 (Goliz) は、スバランザニー氏の實驗を、一層確實にし、蛙
 の性的衝動の作用及び性的行爲に對して新しい光を投じてゐる。氏は、牝蛙の軀の種々の部分
 を剔取して實驗を行ひ、交尾期に於ける牝には軀の有らゆる部分に牡を牽引する力をもつてゐ
 る事を發見した。氏は更に、牡蛙から剔取した軀の一部を牝蛙の軀の相當部位に植付け、その
 部分に牡蛙を近づけて實驗を行つたが、牡蛙は決してさうした事に欺かれない事を確めた。是
 に於て乎、氏は更に牡蛙の種々の感覺器官を次ぎつぎと切取して、その行動を觀察したが、そ
 れ等の何れの器官とても、特に取り立て、言ふ程際立つて鋭敏な性的識別機能を有してゐる器
 官はなく、たゞ牡蛙の感覺器官の凡てが一全體として有機的に活らき、上述の様な鋭敏な性的

辨別をなすものであるといふ事實を明かにした。性的行爲中にある牡蛙の四肢の皮膚乃至胸部の皮膚を剥ぎ取つて了ふと、抱擁を解いて牝の脊上から下り、これを再び敢てしようとはしないが、睪丸を剔抉し去つても、依然として性的行爲を持續してゐる事も氏の實驗によつて確かめられた。(ゴルツ氏著『蛙の機能に關する實驗に就て』Beitrag zur Lehre von den Funktionen des Frosches, 1869, P. 20)。これによつて見れば、性的感覺は四肢及び胸部の皮膚の活らきによつて興奮を起さしめられる様に思はれる。

タルカノ教授の兩蛙に就ての實驗

所が、聖ペトログラードのタルカノ教授 (Tarcanoff) は、更に進んで一層嚴密な實驗をなした結果、此の問題に對し殆ど裁斷的な決定を與へたと思はれる様な報告を發表した。氏は、交尾期に近づいてゐる數百の山蛤 *Rana temporaria* を試験に供し、最初にゴルツ氏と同じ實驗を試みた。教授はまづ、性行爲の状態にある牡の心臟を剔抉して見た。しかしこれが直接にも間接にも、山蛤の交尾に影響を與へなかつた。次に氏は肺臓を取り去つた。然しこれにも同様何等の反響がなかつた。次に氏は、脾臓、腸、胃、腎臓を順次に取り去つて見た。しかし、その結果は依然として同様であつた。次に氏は、極め

て周到な注意を拂つて睪丸を去節して見たが尙依然何等の結果も現はれなかつた。然し、氏は次に精囊を抉去した。すると、彼は即座にこれを中絶して牝脊から下り再びそれを試みようとはしなかつた。是に於て乎、タルカノ教授は斯う言ふ結論に到達した。即ち、山蛤の場合にあつては——恐らく他の哺乳動物に於てもさうであらうが——精囊が神經中樞に向つて性衝動を與へる刺戟の源泉であつて、此の衝動が更に複雑な性的諸器官に反射するものである。(タルカノ教授『蛙の生殖器に關する生理』Zur Physiologie des Geschlechtsapparatus des Frosches, 雜誌「汎生理學報告」Archive für die Gesamte physiologie, 1887, vol. XI, P. 330 所載)

若返り法發見の動機となれるスタイナー氏の白蟻に就ての實驗

數年後此の問題は、更にブラーグ (Pisano (譯者註「ガ」)の首部) のスタイナー氏 (Steinach) によつて取り上げられた。スタイナー氏は言つてゐる。勿論タルカノ教授の山蛤の實驗は、十分に信憑するに足るものであるが、しかし、蛙の場合がさうであるからと言つたとて、直ちに哺乳動物迄も矢張りさうであり、精囊が性的刺戟及びその維持に離るべからざる關係があると斷ずる事は出來ない。且又蛙の精囊か哺乳動物の精囊と同一のものであると即斷する事も出來ないとそこで

スタイナーハ氏は此の問題を確める爲めに、白鼠を選んだ。何故氏が此の問題を解決する爲めに白鼠を選んだかといふと白鼠は精囊が著しく大きく、且つ性的衝動も非常に發達してゐる動物だからである。氏はタルカノフ教授の山蛤の實驗と同じ様に、交尾期に於ける白鼠の精囊を取り去つて見た、所が意外にも白鼠はこれが爲めに些かも性的衝動を減じない、矢張り以前と同様の作用を頻繁に且つ猛烈に繰り返すのを見た。然し、スタイナーハ氏は、更に實驗を進めて次の様な事實を發見した。白鼠の精囊には、實際に於て精液を含んでゐない。精液に似た液は見られるけれどもそれは精囊そのもの分泌する特殊の分泌液である。白鼠の精囊中に見られる液は、解剖學上蛙の精囊に見られる精液とは全然異つた性質のものであると。それ故、此處までの觀察だけでは、タルカノフ教授の議論に對する駁論とはならない譯である。

スタイナーハ氏のエスカレンタ(食用)蛙に就ての新發見

けれども、スタイナー

ハ氏は更に山蛤と極めてよく似た性的生活を營んでゐる食用蛙 *Escalenta* に就て驚くべき事實を發見した。それは食用蛙には全然精囊が見當らないといふ事であつた。そこで、氏はタルカノフ教授の實驗と同じ實驗を繰返して、次の様な事實を確めた。食用蛙にも實は精囊がないの

では無いが、交尾前にあつては全然空虚であつてそれが見えないだけである。精囊の内容物は性行爲中に漸次満たされて行くと。これによつて見れば、性的衝動が精液の作用によるものであるといふタルカノフ教授の議論は成立しない事となる。スタイナーハ氏は、食用蛙の精囊をば出来るだけ出血しない様に取り去つて見た。すると剔扶された牡蛙の多數は、依然として五日乃至七日間性的行爲を持續した。また、その中の少數は、今少し永い期間繼續したもののさへあつた。因つて、スタイナーハ氏は、ゴルツ氏と同見解に立ち、性的衝動は……た舉丸の擴充から發するものであつて、決して精液からの刺戟によつて起るものではないといふ結論に到達した。

去勢後の性的衝動の活動

ゴルツ氏も、これと同じ見解に立つて次の様に言つてゐる。

舉丸を取り去つても交尾作用を中止しないといふ事實は、一見性的衝動は舉丸が源泉となつてゐるものでないといふ事の證據となると考へられるかも知れないけれども、舉丸剔出が交尾作用を中止させないといふ事實は、必ずしも性的衝動を、惹起せしめる源泉は舉丸にあらずといふ證明にはならない。何となば、一たび神經中樞が舉丸からの刺戟によつて性的衝動を惹起

したならば、その刺戟の源泉が取り去られても、依然として性衝動を繼續し得るからと。ゴルツ氏は、春情期數ヶ月前に墨丸を剔去した牡蛙は交尾を行はないが、しかし斯うして去勢した蛙にさへも、幾分の性的傾向乃至性的活動が矢張り残存してゐる。そして、さうした性的傾向は春情期が経過してつと同時に消えて行くといふ事實を、實驗によつて確めたのであつた。

精囊を剔出せる白鼠に就てのスタイナツハ氏の實驗

極く最近の學說に従へば、

哺乳動物の精囊は、精囊自からの必泌する蛋白質の分泌液を貯藏してゐる所であるが、その分泌液の機能は、今日の所不明に屬するとされてゐる。スタイナツハ氏は、精囊中には精蟲gamete、razoozは一つもないといふ事を發見した。それ故氏、は精囊of seminal vesiclesといふ言葉は當らないから、小泡腺Glandulae vesicularesといふ名稱を用ひたればよからうと主張してゐる。この小泡腺を白鼠から取り去つても、例の活潑なる交尾を行ふのを見る。併し、生殖機能はこれによつて減退する事は事實である。小泡腺に加ふるに、攝護腺Glandulae prostataeをも取り除く時は、生殖の機能は消滅する。スタイナツハ氏は、この事實からして次の様な結論を下

してゐる。是れ等諸腺の分泌液は、精蟲の活動力を助長する力を有してゐるのであり、従つて、是等生殖補助腺の發達如何は、直接生殖機能に關係すると。

性的衝動と生殖腺の關係

スタイナツハ氏はまた、次の様な事實を發見してゐる。性的

に十分成熟した白鼠を取つて、これに去勢を施す時は、最初の中は矢張り性的活動を普通に續けて行くけれども、漸次その實行的能力が衰へて行く。しかし、この場合にあつても、性的亢奮と性慾的傾向とは何處までも續いて行くのを見る。更に未だ性的經驗のない發情期前の若い白鼠を取つて去勢を施し、その結果を實驗するに、これにも矢張り幾分か性慾的傾向が現はれる。即ちこの場合に於ても、春情期に入るとともに、普通の牡と同様牝の蹤を追つ蒐け、牝を嗅いだり、舐つたりする。斯うした行動が、單に好奇心からでないといふ事は、それが矢張普通の牡と同じ様に交尾をしようとするのにも解かる。たゞ、この場合去勢しない普通の牡と異なる所は、生殖根の勃起を見ない事と、精液を射出しないといふ事とである。とは言へ、時としては不十分ながら多少の活力を見る事もないではない。斯うした状態が發情期毎に一ヶ年は持續される。そして、夫れ以後性慾は漸次衰頽を示し、且つ早老の徵候を現はす

と。(スタイナツハ氏『男性生殖器特に近接生殖腺の比較生理學に關する研究』
Zur vergleichenden Physiologie der männlichen Geschlechtsorgane insbesondere der accessoriellen Geschlechtsdrüsen——雜誌「汎生理學報告」"Archiv für die Gesamte Physiologie," vol. 171, 1894

内分泌と第二次性的特徴

斯くの如く、性慾的傾向は或る程度までは是れ等生殖腺とは交渉が無い。しかし、是れ等諸腺がその活動を助け、また生殖作用に必要な刺激を與へる事は疑ひない所であり、また第二次性的特徴の發達を促がすものであるといふ事も同様疑はれない。思ふに、是れ等生殖腺が如上の如き作用をなすのは、恐らくそれ等の分泌液が身體組織内に這入つて行く結果によるものであらうと思はれる。(シヤトック氏セリグマン氏『第二次性的特徴の獲得』Shattock and Seligmann, "The Acquisition of Secondary Sexual Characters"——"Proceeding of the Royal Society," vol. 1xxiii, 1904, P. 49參照

ハルバン氏 (Halban) は主要なる生殖腺は、第二次性的特徴を與へもしなければ、また異性の性的特徴が發生するのを防止する作用をもしない。性的差別は生れながらにして存在していると云つてゐる。(ハルバン氏『性的特徴の發生』Die Entstehung der Geschlechtscharaktere, "婦人

病學雜誌——Archiv für Gynäkologie, 1903, Pp. 205—308 所載)

ヌーズバウム氏 (Nussbaum) は、うがへる 褐蛙 ツナツカ ranatana に就て種々の實驗を試みた。此の蛙は、毎年一回つゞ夏期に於て第二次性的特徴の變化を循環的に繰り返す蛙であるが、氏の實驗によれば、斯かる第二次性的特徴の變化は去勢すると歇んでしまう。けれども、更に去勢した蛙の皮膚下に他の褐蛙の睪丸エキスを植付ける時は、それが恰も去勢されない時の如くに行動する様になる。それ故、第二次性的特徴の變化を生ぜしめるものは、**丸**の分泌液である事が知れる。若し第二次性的特徴の範圍に在る神経を切斷する時は、睪丸の分泌液を注射しても何等の變化を起さない。上述の事實は睪丸の分泌液と第二次性的特徴とが密接な相互關係をもつてゐる事を證明するものでなくてはならぬと言つてゐる。プリューゲル氏 (Prüger) は上述のヌーズバウム氏の實驗を反駁して恚う言つてゐる。睪丸の分泌液は、第二次性的特徴の範圍の神経組織の作用によつて支配されるものではない。第二次性的特徴は全然神経組織とは没交渉であると。

(雜誌「汎生理學報告」Archiv für die Gesamte Physiologie, 1907, vol. xvi, Part 6 所載)

スタイナツハ氏の卵精移植と性的衝動の實驗

スタイナツハ氏もまた、最近の實

驗によつて第二次的性的特徴はさうした部分的神経の活らきに影響はされないと云つてゐる氏は褐蛙 ^{あしがへる} *Rana fusca* ^{ラナ フスカ} 及び食用蛙 ^{エスキュレクタ} *eximius* を實驗に供して次の様な事實を發見した。これ等の蛙は、秋期に於て去勢すれば、去勢後も尙幾分か牝を掴まうとする衝動を持続するけれども、さうした衝動は間もなく消えて行く。然し、性的衝動は、翌年春情活動期が來ると共に幾分か微かながら再び現はれる。而かも慙うした現象は、毎年繼續されて行くのを見る。然し性的衝動の旺盛な他の蛙から、睪丸の分泌液を取つて、これを去勢した蛙に注射する時は、倏ちそれか性的機能に反響を來たし、時としては數時間に涉つて勃起作用を起こすと。けれども、スタイナー氏はこれを結論して、この刺戟は腦中樞のみに活らくものであると言つてゐる。性的に活潑でない蛙の睪丸分泌液は、何等の刺戟作用を惹き起さないが、これに反し性的に活潑な蛙にあつては、その神経中樞の物質を取り、これを去勢した蛙に注射しても矢張り睪丸の分泌液を注射した場合と同様の効果が現はれる。以上の何れの場合に於ても、注射された蛙は、性的鎮靜期に於てさへ性の鎮靜抑壓を缺く虞れがあると。(スタイナー氏「生殖腺の内分泌の作用の結果としての第二次的性的特徴」*“Geschlechtsrief und echt Sekundäre Geschlechtsmerkmale als Folge*

der innersekretorischen Funktion der Keimdrüsen,” — *Zentralblatt Für Physiologie*, Bd. xlv, Nr. 131 1910 所載)

スタイナー氏の結論

總括的に言へば、スタイナー氏は慙ういふ風に考へてゐるのである。睪丸の内分泌液の作用が、神経中樞に色慾的 (Eroticising) の亢奮を促し、而かもその亢奮は當初の刺戟が取り去られた後までも持續するものであると。

去勢後性的衝動の持續する理由

獸醫の經驗は、また次の様な事實を證據立てゝゐる。性的衝動は、動物にあつては去勢した後にも矢張り持續する例へば、牡牛にあつては、去勢した後にも矢張り牝と交尾しようとする。また馬の場合を見ても、性的精力は矢張り去勢後に於ても残つてゐる。否そればかりでなく、時としては去勢後却つてそれが驚く程に猛烈になる場合さへもある。けれども如何なる場合たるを問はず、その結果としての受胎作用を起さしめる事はない。(此の點に關しては、ギーナル「生理學辭典」去勢の部 Guinard, art. "Castration," — リシエー「生理學辭典」Riches "Dictionnaire de Physiologie" を一般の去勢に就ては、ローベル・ミュイエー「性的生理學」Robert Müller's Sexualbiologie — ヴァーシヤル「生殖生理學」

F. H. Marshall, The Physiology of Reproduction, ch. ix — エー・ビタール『宦官』E. Liard, Les Ekoplyz, 「人類學雜誌」L'Anthropologie, 1903, p. 463 (に委し)

下等動物に關する學術上の實驗乃至獸醫の經驗から得た結論は、移して人類の場合にも當儀める事が出来る。去勢された男子が、矢張り性的衝動を有してゐるといふ事は、閹人乃至宦官の制度を設けてゐた幾多の國々に於て夙に研究せられ、觀察せられた所であつて、最早や一點の疑ひを容れる餘地のない問題である。(シエーリツヒ氏『精蟲學』Sauri, Sp. rmatologia, 1720, cap. ix)

去勢の四種別

今日では、去勢をばその程度によつて區別してはゐないが、去勢にも種々の程度上の差異のあることを注意しなければならぬ。往昔のローマ人は、去勢を四種類に分類してゐる。

第一は、カストラーチ "Castrati" と稱せられたものであつて、これは睪丸と陰莖との兩方を別扱したものである。

第二は、スバドーニス "Spadones" と稱せられたもので、これは去勢としては最も普通に行

はれた方法、即ち睪丸だけを去節したものと稱である。

第三は、スリビエー "Thibial" と呼ばれたもので、これは睪丸を潰したものである。

第四は、スラシエー "Plasio" と稱せられたもので輸精管を切斷したものである。

宦官、閹人の性慾は無力か

以上の區別は、ミラン氏 (Milant) が巴里で出版した「色

情狂的犯罪者の去勢」"Castration Crimille et Marnique," 1902 に據つたものであるが、その書には、上述の四種類の第二の方法、即ちスバドーニスといふのは、思情期後の施術であつた場合には、施術後に於ても交接が可能であるが故に、當時のローマ婦人間には、これが "ad securus Ibidinationes" (安全に放蕩する事) として汎く知られてゐたといふ事を書いてゐる。この事は、聖・ゼローム氏 (St. Jerome) も、言つてゐる所であるが更にマーシャル氏 (Martial) もローマの貴婦人は好んで閹人を求めたといふ事實を指摘して Vult futuri Gallia, non Parere (心配顔して夫婦同棲してゐるガリア人は一人も見常りない) と言つてゐる。(ミラン氏「生涯を通じての宦官」"Les Eunuchs à Travers les Ages," 1909)

マテイニヨンの報告

會て北京に駐在してゐた佛國公使館附醫官マテイニヨン氏 (Mat-

penon は恚う言つてゐる。宦官は決して情慾を失つてはゐない矢張り彼等も婦人を求めてゐる生殖器を全く取除がれてゐるこれ等宦官も、適當の方法を以て情慾を満足させてゐる。私の信ずる所によれば、去勢施術の時期が早ければ早い程、手術後の性的慾望は稀薄である。十歳以前に去勢を施された男子にあつては、格段に女性的となり、純然たる婦女子に類するといふ事は、況く支那人間に於て認められてゐる事實である。(マティニヨン氏著「北京宮殿内の宦官」——支那の迷信、犯罪及び不幸——'Superstition, Crime et Misère en Chine, "Les Eunuques du Palais Imperial de Peking," 1901)

コンスタンチノープルでは、宦官はみな黒奴^{ニグロ}である。これ等宦官は春期發動期前に完全に去勢せられてゐる。恚うすれば、性的機能に於て全然無能力者とする事が出来、且つ情慾をも出来且情慾をも消滅せしめる事が出来るからであるけれども如何に幼少時に去勢しても、性慾は必ずしも絶滅せしめ得るとは言へない。

埃及の宦官に就てのマリー氏の觀察

マリー氏 (Maria) は、精神錯亂に陥つた埃及の宦官に就ての記録中に恚う言つてゐる。この宦官は陰莖も睪丸も幼年時代に去節せられたも

のであるが、それでも彼は屢々猛烈な性的衝動を起す。そして、彼は自身でも見る事は出来な
いが、一人の美しい姫が自分の軀に觸れて、淫情を咬るのだと信じてゐる。彼の肉體は、全然
婦女子の様ではあるが、しかし、攝護腺や小泡腺は些かも萎縮してゐないと。(マリー氏「去勢
と色情」'Eunuchisme et Erotisme'——『老年・不具者救濟院報告』Nouvelle Iconographie de la
Salpêtrière, 1906, No. 5, 及び雜誌「醫學の進歩」Progress medical, Jan. 26, 1907)

ランカスター氏 (Lancaster) は、永らくヌビア^(譯者註——埃及とアビシニアとの間中に位する亞弗利加の地方)に滞在し、閹
人の事情に就て委しい人の直話として、次の様な話を引用してゐる『私の判斷する限りでは、
性的感情は生殖器をなくしても少しも異常なく存在してゐると信ずる。閹人が普通人と異なる
點は、性慾衝動の有無といふ事には存しない。普通人と異なる點は、閹人にあつては、これを
十分に満足せしめる事が出来ないだけである。それ故、彼等にして何等かの方法を以て、これ
を出来るだけ満足させようとしてゐる』と。此の事實は、既にモル氏 (Moll) も指摘してゐる所
である。氏は往昔のローマ乃至東方諸國に於ては、婦人によつては寧ろ去勢男子を好む。それ
は、妊娠の危険を免れ得るからであり、また……亢奮状態にある事を好むからであると言つて

る。

去勢と性慾との交渉

陽根を取り去る事をせず、去勢を施した場合には、少なくとも其後十ヶ年間は勃起能力が保持されると謂はれてゐる。デッセルホルスト氏 (Dissehorst) も、その著『有脊椎動物の補助的生殖腺』"Die accessorischen Geschlechtsdrüsen der Wirbelthiere" 中に於て、これと同じ見解を主張して恚う言つてゐる。『ロシアの宦官ペリカン (Plikan) といふ人の言ふ所に據れば、春情發動期中に去勢された人は、去勢後も、永く性的行爲に堪える事が出来る。若しそれが外科的手術によつて施された場合には、陽具の活力乃至性的衝動の變化に對する手術の影響は更に弱い様であると言つてゐる』と。

ギーナル氏 (Guinard) も亦恚ういふ結論を下してゐる。去勢後の性的衝動の繼續期間は、人間にあつては他の下等動物よりも適かに永いのみならず、時としては、去勢前よりも却つて性衝動の亢奮が一層猛烈である場合さへもある。それは恐らく種々の外的刺戟に基因するものであらうと思はれる。(ギーナル「生理學辭典」去勢 "Castration" の項參照——"Dictionnaire de Physiologie,")

女子に對する去勢 (卵巢剥出手術) に就て

東方諸國を除く他の國々に於ては、去勢は普通男子に對してよりも女子に對して盛んに行はれた。女子に對する去勢、即ち卵巢除節が性慾に及ぼす影響は、種々の形をとつて現はれる。去勢後に於ける性衝動及び性的快感は、ある婦人にあつては術前と變化の認められないものもあるし、或は減退するものもあり、或は全然消滅するものもあり、中には去勢前よりも却つて熾烈になるものもある。去後勢性的衝動及び性的快感が減退したといふ婦人の中には、自分は去勢せられたからして、最早普通の婦人ではないと深く自ら信じ切つて了ふ爲めに、無意識の中に自己暗示に懸り、さうした現象を呈する婦人がある。これに反し、去勢後に於て性に對する慾望や快感が一層熾烈になつたといふ婦人の中には、懷妊の虞懼がなくなつたことを信する安心から、さうした現象を呈したのだと思はれる婦人がある。勿論これ等の現象に關する考察には、その婦人の個人的特質、生活状態及び健康状態を考慮して結論しなければならぬのは言ふ迄もない。

女子に對する去勢と性的衝動の影響

佛蘭西に於ては、ジエール氏 (Tajer) が次の様な實驗を報告してゐる。卵巢剥出手術を施した三十三人の婦人中十八人は性慾が手術前と何等

の變化を來たさず三人は性慾の減退を見、八人は全然その消滅を見、三人は性慾の亢進を見た次に性的行爲の快感を見るに、十七人は去勢前と何等の變化を見ず、一人は減退を見、四人は全くその消滅を見、五人は強度に高まつたのを見、六人は甚しき疼痛を感じた。今一つ別の例を擧ぐれば、或る一人の婦人は卵巢と子宮とを剔出し、今一人の婦人は子宮を剔出したが、その手術に及ぼした影響は、何れも施術前と大異なきを見た、(ジエール氏「婦人の去勢に關する生理的影響」『Effets physiologiques de la Castration chez la Femme』——『婦人病學雜誌』Revue de Gynecologie, 1897 Pp. 403—57)

グレイフェーケ氏、ビステル氏、アドレル氏の研究

獨逸に於てはグレイフェー

ケ氏(Glav. Ke)が次の様な結果を報告してゐる。去勢婦人二十七人中、性的衝動に變化を見なかつたもの六人、その衝動の減退を見たもの十人、全然その衝動を感じなくなつたもの十一人の比率をなし、

Archiv für Gynäkologie Bd.

XXXV, 1889 参照)

ビステル氏(Pistat)は、去勢婦人九十九人を試験し性衝動と性的快感とは普通相聯關する關係をもつてゐるといふ事を擧げて恧言つてゐる。性的衝動に就ては、去勢前と變化のなかつたもの十九人、その衰退を見たもの二十四人、絶滅に近きもの三十五人、全然その慾望を感じなくなつたもの二十一人の比率を示し、性的行爲の快感に對する比率は、去勢前と變りのなかつたもの十八人、減退を見たもの乃至全然その快感を感じなくなつたもの六十人であると。

〔婦人病學雜誌』Archiv für Gynäkologie, Bd Ivi, 1898)

ケツプレル氏(Keppler)は、一八九〇年の巴里に開催せられた萬國醫學大會に於て、去勢婦人四十六人に就て試験した結果を發表し、これ等婦人中凡ての場合に於て全然性的感情を見なくなつた婦人は一人も無かつたといふてゐる。(一八九〇年巴里萬國醫學大會報告)

アドレル氏(Adler)はこの問題を研究して、前掲のグレイフェーケ氏(Glav. Ke)の説を批評し、婦人の性的器官と性的感情との間には密接な連絡關係は存在しないと結論してゐる。(アドレル氏『婦人の性的感覺の欠陥』『Die Mangelhafte Geschlechtsempfindung des Weibes,』1904 P. 75 et seq)

キツシュ (Kisch) は、その著『婦人の性的生活』"The Sexual Life of Women" に於て、卵巣除節は性慾に影響を及ぼすものであるといふ事を認めてゐる。幾多の學者の説を列擧したのち、氏自身の経験による例として、性慾が卵巣除節手術前と變らなかつた婦人の數例を擧げてゐる。

ブルーム氏の女子の年齢と去勢との關係に對する觀察

亞米利加に於てはブルー

ム氏 (Bloom) が次の如き事實を發見してゐる。氏の研究した多數の婦人の場合に於ては、十三才以前に卵巣の剔出手術を受けた婦人にして全然性衝動の消滅した例は一つも無かつた。事實上手術前に比して性慾の減退を見なかつたものが多數であつたばかりでなく、中には却つて手術前よりも性慾の旺盛となつた場合さへもあつたと。(雜誌「醫學規範」"Medical Standard" 1896, p. 121 參照)

然し、今日の學說として一般に一致してゐる見解によると、性的行爲中に於ける膈内の分泌物は、去勢後著しく減ずる。また三十三才以後に於て卵巣及び子宮を切取す場合には、性的感情や性的慾望が漸次減退して行くのが普通である。

卵巣、輸卵管、子宮摘出手術と性的衝動

イサベル・ダベンポート博士 (Dr. Isabel

Davenport) は、性慾的傾向が異常に強烈であつた三十才と三十五才との二婦人に於ける去勢手術後の實驗を擧げてゐる。前者の婦人は、病氣の爲めに卵巣と輸卵管とを截取し、後者の婦人は、病氣の故ではなく、性慾を絶滅せしめる考で同様の手術を受けたのであつたが、何れの婦人の場合に於ても、手術後と手術前にさしたる變化あるを認めなかつた。(雜誌「醫學規範」"Medical Standard" 1895 p. 346)

ラブソーン・スミス氏 (Laphorn Smith) は、二十四才の未婚婦人の去勢に就て報告してゐる。

この婦人は、既に七年前卵巣肥大と疼痛及び六ヶ年間の月經閉止との爲めに、卵巣と輸卵管との摘出手術を受けた婦人であつたが、彼女自らの告白によると、未婚ではあるが手術以前性的經驗はあつた。しかし、手術後の如く爾かく極度の性慾亢進と快感とを経験したことは「まだ會てなかつたと」(雜誌「醫學記録」"Medical Record" vol. xixiii)

英國に於ては、ローソン・テイト氏 (Lawson Tait) 及びバントック氏 (Bankock) が此の問題を論じ、卵巣や輸卵管や子宮を摘出した後でも、婦人の性慾は却つて摘出前よりも熾烈になる場合が少なくないと言つてゐる。

ローソン・テイト氏の報告

ローソン・テイト氏は、此の問題を組織的に且つ廣く研究した結果、是れ等の器官を取り去る前既に性慾感情の自覺されてゐる婦人に於ては、手術によつて性慾が無くなつた例は一として見出されなかつたといふ事を報告してゐる。ローソン・テイト氏の報告以前、リバプール醫學研究所で任命された醫學調査委員は、被手術者の多数が性的感情の非常な減退を感じたと報告してゐるが、テイト氏は、此の調査委員の報告には、無智な施療患者の言を其儘報告した傾があつて、十分信憑すべからざる點が澤山あると言つてゐる。
 (雜誌「英國婦人科醫月報」British Gynaecological Journal, Feb. 1887, P. 534)

茲に私は、濠洲に在住してゐる或る經驗ある醫師から、嘗て著者の手許に送つて來た報告の一節を引用しよう。『卵巢を全部摘出した結果はどうなるかといふ事に就て一定の法則を與へる事は出來ない。或る婦人の如きは、手術前には性慾が可なり激烈であつたに拘はらず、手術後には非常に性的に冷淡になつてゐるし、またそれと反對の現象を現はした婦人の例もある。然し私は、手術前に性的經驗を有する婦人の大多數は、手術前と同様の程度に於て性的慾望と快感とを感ずるといふ説を信じてゐる。私は次の様な一例を知つてゐる。それは、十九才になる

かならぬ女子で、十二ヶ月間性的行爲に慣れてゐたのであつたが、病氣の爲めに卵巢と輸卵管とを切開摘出しなければならぬ必要に迫られ、手術を受けた。所が、この婦人は手術後も性的慾望や快感が減退しないばかりでなく、却つて以前よりも一層激烈になつた。月經は全然閉止したけれども、女らしい性質と外貌には少しの變化も及ぼさなかつた』

性衝動は、生殖諸腺の潑刺たる緊張と關係なく獨立してゐるものである事は次の事實によつて明かである。即ち、子供の時に於ても、性的感情が微かに乃至時としては強烈にさへも現はれるばかりでなく、嬰兒に於てさへ現はれるし、また、これと反對に年老いて生殖腺かその機能を失つた後にも、尙婦人を要求するといふ事によつて證明される。

性的衝動と春機發動期との關係

拙著『性的心理』第二卷中の「自己色情」の章下に於て述べた如く、極めて年少の子供に於てさへも、色情的亢奮を伴つた生殖器の自發的亢奮を見るものが屢である。男女の性的特徴上の差異は、極く年少の頃から既に全神經組織に漲つてゐる。この問題に就て、ブラックストン・ヒックス (Braxton Hicks) といふ經驗ある婦人科醫の言を引用せんに、彼は次の様に言つてゐる。『度び／＼子供を取扱つた人は、誰しもよく知つて

るることであるが、男女の性的特徴は、既に嬰兒の時からその精神上的の習慣に於ても、病中の状態に於ても異つてゐるからして、その取扱ひにも自ら別異の方法を以てしなければならぬ。勿論男女の性的特徴上の差異は、矢張り春機發動期に於て最も顯著に發達する。しかし、素々普通一般の人々に認められる程に、嬰兒の時代から性的特徴上の區別が明かに存在して居り、それが春機發動期になるに従つて、顯著に現はれて來るだけの事であつて、春機發動期に於て性的特徴上の區別が生まれるのではない。また性的感情が、既に己に嬰兒の時代から存在してゐるといふ事——否存在してゐる、ら、いと言つた方が、一層妥當であるかも知れぬ——は、汎く一般に知られてゐる事實である。それ故、色情は春機發動期に強められるとは言ひ得るが、全然春機發動期にのみ懸つてゐるとは言ひ得ない。

此の點から見ても、世人が一般に想像してゐるが如く、色情が春機發動期に於てのみ爾かく強烈に發達すると結論することは出來ない。春機發動期に於ける變化と言つても、その變化がこの時代に俄然として新生するのではなく、素から存在してゐる力が漸次發達し來たり、先天的並びに後天的の性的組織、性的形式が充分に完成されるといふだけに過ぎぬ。

更年期後に於ける性的衝動

此處にまた、月經閉止期後に達した年齢の婦人にも、性的衝動が残存してゐるといふ事を調査した報告がある。この現象は、キツシュ(Kitzsch)及びレーヴエンフェルト氏(Löwenfeld)も屢々實驗し所たであると言つてゐるが、(レーヴエンフェルト氏『性的生活と神経病』²³ Knullen und Nervenleiden, P. 299 参照)亞米利加に於ては、ブルーム氏(Bloom)が、四百人の婦人に就て調査した研究を發表してゐる。該調査報告によると、その中の數人には、『可なり年取つた後も性衝動が残存してゐる例があつた。その中の一人は、永年寡婦生活を送り、月經閉止後二十年を経た七十歳の老婦人であつたが、それが最近結婚した。此の老婦人の言ふ所によれば、性慾と感覺は、月經閉止前よりも一層大であるとは言へないにしても、少なくとも閉止前と同程度以下に下らないのを覺えると言つてゐる』と。(雜誌「醫學規範」Medical Standard, 1896)

先天的に生殖腺を缺如せる婦人の性的衝動

最後に、内分泌に關する此の問題に就き、今一つ生殖腺が全然皆無であるが、乃至は十中八九無いだらうと推測される場合にも拘はらず、性的衝動の發達してゐるといふ現象に言及しなければならぬ。斯かる人々に於ては、性

的慾求及び性的満足は、屢々普通よりも強烈な場合がある。コルマン氏(Colman)は、その一例として卵巢も子宮もその痕跡さへ認められず、膣も餘りに狭小であるが、然し愉快な行爲が直腸に於て行はれ、性慾も非常に旺盛であつて、時としては色情狂とも見られる婦人の例を擧げてゐる。(雜誌 'Medical Standard August' 1895)

クララ・バルラス氏 (Clara Barrus) もまた、これに酷似した一婦人の例を擧げてゐる。この婦人の死後、解剖の結果この婦人には卵巢も子宮も先天的に缺如してゐるといふ事が明らかになつたのであるが、然しこの婦人の生存中には、非常に性慾が旺盛であつて、多數の情夫があり、而かもこれ等の男子と普通人に於ては残んど不可能と思はれる程の不規則な生活を送つた。

かし、正氣の時には穩かな女らしさを有してゐたと。(雜誌「亞米利加精神病學雜誌」 American Journal of Insanity April' 1895)

アックノートン・ジョンス氏 (Macnoughton-Jones) は、三十二歳婦人の一例を擧げてゐるが此の婦人は乳房も陰唇も十分の發育を遂げてゐるに拘はらず、膣及び其他の内部的器官が缺如して

ゐた。然るに性的感情は普通人と何等の變りはなく常態的であつたと。(雜誌「英國婦人科醫報」 British Gynaecological Journal August 1902)

コッテリル氏モンデエ氏の報告 コッテリル氏 (Cottell) の實驗せる婦人の例によれば、卵巢も子宮も萎縮し、その機も全く無力であり、且つ膣も缺如してゐた。それにも拘はらず、性慾感情は普通人と變りはなかつた。(雜誌「英國醫學月報」 British Medical Journal April 7' 1900 及び著者への私通に據る)

モンテエ氏 Paul F. Monte は、上述のコッテリル氏の場合と同じ場合の二つの例を寫眞に撮つて、これ等の場合に於ても性衝動が完全に行はれてゐるのみならず、それ等の婦人は、その性質に於ても女らしく、萬事に於て女性としての資格を具備してゐることを述べ、斯かる婦人は、その十中八九迄は、概ね外部的生殖器官が完全に發達してゐるといふ事を説いてゐる。(雜誌「亞米利加産科學雜誌」 American Journal of Obstetrics March' 1899)

フェーレー氏の解釋 フェーレー氏 (Fere) は、是れ等の現象を解釋しようと試み、恚ういふ結論を與へてゐる。是れ等の現象を研究した見地からすれば、生殖腺の内分泌及び排泄液

が性衝動の唯一の源泉であるといふ學說の反對を證明すると。然し氏の意見によれば、性慾感情が去勢後に於ても繼續するのは、恰も手なり足なりを截斷した人が截斷後にも、矢張り其處に手足が残つてゐるが如き幻覺を感ずると同様、去勢部位の痕跡に去勢まへの神經的感覚が残存してゐるが爲めであると解釋してゐる。(フェーレー著『性的本能』"J. I. und sexual", P. 241) モル(Moll)も、これと同じ説明を與へてゐるが、氏は更にこれと同じ方法を以て、月經閉止期後に於ける性慾の殘存を説明し、月經閉止期後に於ても、尙性慾が残存してゐるのは、生殖腺が萎縮する時、それが病的變質を來たし、依然として閉止期前と同じ刺戟を感ずるからであると説明してゐる。氏はまた、これに關聯して、子供に於ける性的衝動の早熟を説明し、性的早熟は性的諸器官の異常的發達に因るものであると説いてゐる。(雜誌『醫學臨床實驗』"Medizinische Klinik" 1905, Nos. 12 and 13)

フェーレー氏(Fee)は、先天的に生殖腺を缺如せる場合にも性的衝動があるといふ事を主張してはゐない。然し、ムンデエ氏(Munde)は、此の問題に就て恁ういふ意見を發表してゐる。如何に卵巢の缺如した不具な婦人と言はれる婦人と雖も、卵巢の極く微細な痕跡僅存在してゐる

ないとも限らない。縱令、卵子や月經を見ないにしても、それあるが爲めに女としての諸要素を維持してゐるのかも知れぬと。

如上引用せる幾多の實驗報告は、その出所も確實であり、且つ相當の信憑を置くに値するものである。けれども、是れ等の學說は、純然たる假說的學說であり、而かも一理論を維持せんが爲めに、特にそれに好都合な例を蒐集したといふ嫌ひなきを得ぬ。従つて、これ等の例が直ちに、客觀的に信憑すべき或る一定の結論を構成し得るものとは言はれ得ない様に思はれる。吾々は、此の點に於て、『大自然(Nature)は、種族の永續を非常に重要視してゐる。従つて性慾を刺戟すべき方法は種々の手段を以て凡ゆる方面から用意周到に用意せられてゐる』と言つたギイナル氏(Guinand)の意見に賛せざるを得ぬ。

ヒルシュフェルト氏(Hirschfeld)もまた、今少し異つた立場からではあるが、此の問題に關して恁う言つてゐる。『大自然は烈火の中に鐵を入れ、人力によつてする想像力の及ばない方法を以て創造を試みてゐる』と。(雜誌『性的問題』"Sexual Problem", Feb. 1912)

性的衝動の中樞に關する現今の假說

現在の所、吾々が間接的に到達してゐる結論は、

性慾は、性的器官に作用する力が脊髄組織の中軸に存するといふ假定説であるが、しかし、これのみでは吾々の性的衝動の凡ゆる現象を説明し盡す事は出来ない。性的神経系統には、是非共大脳の要素が関係をもつてゐなければならぬ。否時としては大脳の要素こそ、性的衝動の主動因であり得る。

性的衝動の中樞に関する諸家の説

フランツ・ジョセフ・ガール (Franz Joseph Gall) 譯者註

逸の醫師にして骨相學の始祖一七五八—一八二八) の時代以降、性的本能の中樞は何處に位するかといふ問題を解決する爲めに、種々の研究が企てられた。それ等の研究家の説は脳髓と生殖器官との間には、實際上密接の関係があるといふ事に傾いてはゐるが、しかし、これとても確定的ではなく、今日尙此の問題の解決は決して成功したとは言はれ得ない程度にある。

モウデナア (Modena) 譯者註——伊太利 Emilia の一州 Modena にある一都市

のチエーニー氏 (Ceni) は、雞の雛を實驗に供

し、生殖器の外皮部の損傷程度に應じて不妊症を來たすることを發見し、外皮部が生殖機能と関係があると主張してゐる。(カルビー・チエーニー氏「生殖現象に對する外皮部の中心的影響」『Influenza dei Centri Corticali sui Fenomeni della Generazione』——雜誌「狂癲實驗雜誌」『Rivista

perimentale di Fenis' 1907, fasc 2—3)

現在では、オビーチイ氏 (Obici) 及びマルケシニー氏 (Marchesini) が、最も穩健な説をなして恠う主張してゐる。吾々の想像し得る凡ては、大脳にも脊髄にも等しく性的神経中樞があるとする假説以外に出でない様に思はれる。しかし、嚴密に言へば、大脳に生殖中樞があるといふ事さへも、全くの假説的學說程度に止まるものであると。

この研究に関するガル氏の小脳中樞説

此の問題に對する始祖ガル氏 (Gall) は、當初

小脳中に性的本能の中樞が存するといふことを主張したが——而かも此の説は其後幾多の觀察によつて賛せられて來た所であつたが——しかし、最早今日では種々の實驗と觀察との結果、此の説はその維持力を失つて來てゐる。けれども、その當時にあつては彼の説は非常に進歩したものであつて、種々の方面から幾多の材料を蒐集してゐる。彼は當時、性的本能は生殖諸器官に存在せず、腦の活らきであると言ふ事を主張して、色慾中樞は生殖器に在りとする當時の説に反對した。氏は、これを證明する爲めに次の様に主張してゐる。性的本能は生殖腺の十分に發達しない年頃の子供にもあれば、また老齡に傾いて生殖腺萎縮した後にも殘存してゐる。

また去勢された人や、先天的に生殖腺の缺如した人にも矢張りその衝動が存在してゐるのを見る事によつても明らかである。しかのみならず、此の觀察を逆にして考察しても、十分に生殖諸器が発達し、完備してゐる人にも、性的衝動の病的な人があるのは、取りも直さず性的本能が生殖器官に基づくものでないといふ事を裏書するに十分であると。以上は、一八二五年に出版せられたガル氏の著『大脳の作用』"Sur les Fonctions du Cerveau"第三卷の殆んど全部に涉つて論ぜられた問題の總括的結論である。

エリスの結論

曩に私が幾多の有名な學者の説を集收摺摺して結論せんとした所は、要するにこの偉大なる學者によつて既に百年前に決定せんとした所の歸結と同一である。

此の問題に關するガル氏の所説を概説、批評したものとては、メービウス氏 (Marius) 「ガルの特殊器官に就て」"Ueber Galls Specielle Organologie"——「シュニート醫學年鑑」Schmidts Jahrbücher per Medicin" 1900' vol. cclxvii' 所載。

第二章 求愛の根本的意義

性と内分泌——性的衝動と精液との關係——性的行爲と授乳する母と子との類似關係——生殖本能即性的衝動説——上説の心理的矛盾——モルのチューメツセンス、デチューメツセンスの説——この理論の修正——モルの理論とダーウキンの性的淘汰説との關係——ダーウキンの性的淘汰説の矛盾點及びその修正——(一)下等動物の審美的能力——性的淘汰の目的と性的刺戟——ダーウキンの心理的方面の欠陥——腫脹衝動の根本的意義——腫脹現象の原理は動物及び人間に於ける求愛現象によつて説明される——求愛の目的はチューメツセンスの誘發にあり——接觸衝動及び遲緩衝動は求愛の第二次的補助的要素なり——ワレースの反性的淘汰説——性的淘汰説に對するエスピナーの批評——性的淘汰説に對するボーニイの見解——求愛に伴ふ鬪争現象の解釋——ハドソンの鳥類の音楽と舞踊の觀察——性的季節と鳥類の羽毛、色彩——求愛と鳥類及び人類の舞踊の原始的意義——ヘツケル教授の「鳥の歌」——踊はチューメツセンスを誘起する有力なる動因なり——性的衝動の副産物としての藝術

的衝動——性と闘争との原理——ダーウキン説の修正と解決

性と内分泌

性的衝動の本質に關する問題は、漸次その論點を移動して來た様に思はれる。即ち、今日に於ては此の問題は、最早男子に於ける精液の構成要素、女子に於ける月經の作用といふが如き問題に基礎を置かないものとせられる様になつた。此の問題の大部分は、生理化學の問題へと移動して來た。即ち生理的方面並びに心理的方面に根柢をもつた性のドラマに關する最も重要な役割は、今日では男子に於ける睪丸、女子に於ける卵巢のホルモン及び内分泌といふ二つの神秘的立役によつて演ぜられるものであると假定せられる至つた。一體に腦髓によつて演ぜられた役割さへも、化學的作用として認められ、今や一般に腦髓そのものが既に一大化學實驗室の様に考へられる様になつてゐる。加之、性的衝動の本源に就ての問題は、上述の研究に止まらず、廣くその範圍を擴張し、性的衝動に對しては、生殖腺以外の他の腺の内分泌の影響が與へてゐるといふ方面まで觀察が向けられる様になつた。即ち、胸腺・副腎・甲狀腺・粘液腺、腎臓——等の諸腺から分泌される内分泌が、性慾の活らきを完うする

上に與つて力があるといふ結論を得ようとしてゐる様に見える。けれども、この問題は非常に複雑であつて、これに關する一定の結論を得ることは困難である。

此の問題に關する参考書としては——スウェール・ビンセント氏著「内分泌と官能」[Internal Secretion and the Ductless Glands, 1912; ヴーミナル氏著「生殖作用の生理學」F. H. A. Marshall, "The Physiology of Reproduction," 1910, ch. IX; サーマン氏著「内分泌の研究」C. Selye, "The Internal Secretions," vol. I, 1911.

副腎の内分泌の研究は——「醫學週報」[Quarterly Journal of Medicine, Jan, 1912] 所載のマンティン氏の研究によつて餘蘊なく研究せられてゐる。

甲狀腺の研究には——雜誌「醫師」[Practitioner, Aug, 1912; 所載のウォーラー氏(Ewan Waller)氏の研究がある。

卵巢の内分泌の研究には——「學士院醫師協會議事録」[Proceedings Royal Society Medicine, July, 1912] 所載のマックローイ氏(A. Louise Molroy)の論文がある。

性衝動と精液との關係

性慾と射精との間に深い關係があるといふ事は、疑ふ餘地のない事實である。此の關係は、蛙の如き下等動物に於ても見られるばかりでなく、高等脊椎動

よく知りたけり

エロフ、リスを見よ

泄と異り、必ずしも常住の必要でもなければ、また何人にも必須であるとは言はれない。特にこの原理をば婦女子の場合に適用せんとする時、全然妥當でない事が解かる。何人にしても、
 によつても性的衝動に關する此の觀念は、排斥せられなければならぬ。勿論それには幾分の眞理はある。また排泄と發射との類推にも十分の根據はある。けれども、要するにそれ以上の價値はない。性的作用には排泄作用の無い幾多の性質がある。普通、排泄作用と謂はれるものゝ本來の性質は、老廢物を體外に排出することであるが、精液は決して廢物ではなく、却つてこれを洩らさずに置くものが健康に利あるものである様に思はれる。此の點が、普通の排泄なるものと發射とを同一の原理により説明し得られぬ理由となる。
 性的本能の満足が、異性に觸れることによつてはじめて遂行され得るといふ事は、頗る不思議の現象であるとは、夙にエドワード・フォン・ハルトマン氏 (Edward von Hartman) も言つてゐる所であるが、性的衝動をば、只單なる排泄作用の過程と見るだけでは、斯かる不思議な現

例として、
 打倒するもの
 それ故、たゞ以上の事實

物にまでも及んでゐる事が知れる。けれども、此の事實は性的刺戟即射精衝動といふ定義を下す根據にはならない。斯かる定義が謬つてゐるといふ事を證明せんが爲めには、性慾生活の諸事實に關する精細な研究を要する譯であるが、しかし、茲には敢てさうするまでの必要を認めない。たゞ此の定義が謬つてゐるといふ事を證明する爲めには、これを覆すべき二三の根本的考察を舉ぐれば十分であると思ふ。これに就ては、先づ第一に、生殖腺から排出される精液の分量が、性慾的活動によつて起される情熱及び精液の排出が性行爲後の有機機關に及ぼす影響と全く不釣合と言はれる程にも權衝が保たれてゐないといふ事を考察しをければならない。
 『Omne animal Post coitum tristis』——『總ての動物は……の後に悲し』(維典)といふ古の箴言は必ずしも眞理でないかも知れない。けれども性的行爲が身體に及ぼす感覺は、射精とは殆んど比較を絶した程に大なる排泄を行ふ大小用の排泄よりも、適かに深く且つ大なるものがある。
 加之、如上の定義は下等動物及び高等動物の全體に涉つての定義とするには、種々疑はしい點のあるのを免れない。下等動物はいざ知らず、高等の文明に達した人類にあつては、
 また精射といふ事は普通の排

象を説明する事は出来ぬ。吾々の性的欲求を満足せしめる事は、膀胱を空虚にする感覚と同じものと認めるならば、性的活動を有する相手の身體の一部の助けによるといふ事は、取りも直さず、その相手をば一個の導尿管と見做す以上他に何等の意味も認められない事となるが、しかし、それは餘りに心理的事實を無視した説であると言はなければならぬ。

性的行爲と授乳する母と子との類似

誰しもが性的要求の場合に於て經驗するが如く、吾々の精神は、相手に全く集中され、また相手からもそれを要求する。斯かる関係には、實際に於て乳を吮ふ嬰兒と、乳を銜ませる母親との關係に比すべきものがある。母親は自分の乳の張つてゐるのを子供に吮はせる事によつて、それから解放される快感を感じる。勿論、これ以外、一層大なる肉體的満足を與へるに足る種々の快樂と慧智とを有する文明人にとつては、母親が子供に乳を吮はせるといふ事によつて、爾かく大なる顫動的な肉體的満足を感ぜないし、またそれが比較的本質上の重大事でもないであらう。けれども、原始的人類及び他の動物にあつては、斯くすることによつて肉體的満足を得るといふ事が、母とその嬰兒との間の愛情を一層濃密ならしめる一條件となつてゐるのである。此の關係と性的行爲との類似は極めて

密接である。即ち乳首の立つといふ事は男子の腫脹作用と一致するものであり、熱心に乳房を覺める嬰兒の濕つた唇と女子の微動する器官と相通じ、蛋白質の母乳は同質の精液と共通する。(私は、この見解を書いた後、スペインの社會學者ラファエル・サリラス氏 (Rafael Salillas) が、その著『アムバ』"Hampa" (二二八頁参照) にこれと頗る類似した見解を次の様な通俗な言葉で言表してゐるのを發見した。『この關係は俗間に婦人の器官を『バーボ』"Papo" と呼んでゐるが如きに見ても知られる。元來、Papo といふ言葉は、われ／＼が "Pip" (譯者註—パイプの意味あり、一は婦人の乳首、二はパン粥—即ち幼兒に食せしめるた) の様な軟かい食物を食べることめに、パンを牛乳、湯などにて軟らかにし、或は煮たるものを言ふ)』の様な軟かい食物を食べること即ち拉丁語のバパーレ ("Papare") といふ言葉から出てゐる。クリーランド氏 (Clarend) も亦、その性慾小説 "The Memoirs of Fanny Hill" に、愛の表明としての局部 (婦人の) のニツブルの行爲を、嬰兒が乳を吮ふ行爲に比較してゐる。)

授乳により、肉體的並び精神的に母親と子供とがお互に快感を得、一層濃密なる愛情を感じるといふ事は、性的行爲に於ける男女關係なるものと、心理的に頗る密接なる類似が見られる。けれども、斯かる密接なる類似さへも、性的行爲の全事實を網羅し盡したものは言へ

ない。

生殖本能即性的衝動説

於是乎、性的本能の定義として上述の見解とは全然違つた立場から主張されだ意見が現はれてゐる。それは、性的本能は生殖衝動、即ち子女を設けんとする欲求であるといふ意見これである。ヘーガル氏 (Hegal) オイレンブルヒ氏 (Eulenbung) ネットケ (Nacke) 及びレーヴエンフェルト氏 (Lorenfeld) 等は、共に此の見解を一部の眞理として承認してゐる。(ネットケ氏は最近此の見解に疑を抱いて來た様である。氏の『犯罪者人類學に關する記録』"Archiv für Kriminal-Anthropologie"一九五〇五年發行一八六頁參照)尤も學者によつては、女子の性的衝動に關する定義として、此の定義が最も妥當であると主張する人が無いでもない。けれども、誰れしも此の定義をば、性的衝動の全般を言ひ現はした完全な定義であると主張する人はなからうと思ふ。斯かる定義を固執しやうとする人は、何れにしても甚しく精神的に混亂した人でなければならぬ。若し吾々が、本能なるものを定義して、われ／＼の意識に上らない目的に對し無意識的に適應する所の活動を指すならば、性的衝動即ち子孫繁殖本能なりとする定義も十分道理ある定義であらう。然し、斯くの如く、單に性的本能の究極目的の

みを指摘しただけでは性的衝動の完全なる定義とはならない。若し、さうした定義が、性的衝動の定義として完全に成立し得るならば、生まれて程経たない動物が、無意識的に食餌を捉へるのを『營養本能』なりと呼んで差聞ない事となる譯である。

上説の心理的矛盾

子孫繁殖といふ目的は、確かに人類を除いては、他の如何なる動物に於ても性的衝動の部分的要素とさへもなつてゐない。若し、性的衝動の性質が、人類と他の動物と全然異なると主張するならば、それは生理學上の根本原理に戻ると言はなければならぬ。生物學上の根本的且つ自然的過程が、人類に於てのみ爾かく突然に革命を起し、他の凡ての動物と異なる法則の下に働くやうになつたとは言ひ得ないからである。尤も、人類にあつては、性的衝動が時としては子供を欲する強い欲求と關聯することはある。特に女子の場合にあつては、子女を設けんとする欲求——換言すれば、女性の肉體に具備されてゐる所の繁殖機能を完全に活かさせ、成就せしめやうとする願望——が、往々性的衝動よりも熱心に且つ強烈に現はれる場合はある。しかし、假令如何にそれが性的衝動と密接な關係があらうとも、或はそれで説明が出来やうとも、性的衝動即ち子孫繁殖とは言ひ得ない。子孫繁殖本能は、

單生生殖の動物にとつては性的衝動だと言へるかも知れない。けれども、兩性の結合によつて子孫を繁殖せしめる有機體にあつては、その定義は意味をなさない。勿論、愛人は欲しく無いが子供だけは欲しいといふ婦人も無くはない。けれども、此の事實は、その女性的本能が潜伏してゐるに拘はらず、只母たらんとする母性本能が活動してゐることを意味するのであつて、子孫繁殖本能即性的本能といふ事を意味しない。子供を欲するといふ欲求が、必然的に性的衝動の形をとつて現はれるのは、性的行爲を外にしては、繁殖本能を表現することの出来る本能的機關が他に一つもないが爲めである。即ち性的本能から離れ、母たらんとする本能から離れての「繁殖本能」といふ事の實現は、事實に於て認めることが出来ないからである。その婦人が戀を知らない以前乃至は戀の終期にある時には、子供が欲しいといふ意識的要求が非常に強烈である場合もあり得よう。けれども、一般に母たらんとする本能が熾烈な婦人に於てさへも、性的情熱が昂まり、而かもそれを満たすことの出来る様な幸福な状態にある場合には、子供を生まうとする欲求は消えて行く傾がある。子供を生むといふ事は、性的本能の自然の目的ではあるが、それを直ちに性的衝動の一要素であると考へたり、或はそれをば性的衝動の定義

として用ひやうとする事は、全然謬りである。成程「生殖本能」といふ言葉は、屢々用ひられてゐる様であるが、しかし、此の言葉は、吾々が嚴密な意味に解釋する必要のない言葉である。此の言葉は、性的生活の事實を隠蔽する爲めに、故らに婉曲に漠然たる言葉を用ひやうとする人々によつて用ひられたる言葉であつて、特に性といふ事を迷信的に嫌惡する人が主として使用するに過ぎぬ。

モルのチューメツセンス、デチューメツセンスの説

扱て私は、次に性的衝動の

構成を定義せんが爲めに更に一層重要な且つ錯雜したモル氏 (Moll) の説に及ばうと思ふ。モル氏は性的衝動が二つの要素から成り立つてゐる事を説いてゐる。彼は、此の要素をば共に意志の力によつて制停することの出来ない衝動であるとしてゐる。その一つは、生殖器の充血腫張が鎮靜的に救はれることであつて、氏はこれを "Impulse of Detumescence" (腫脹を除く衝動) と呼び、性的衝動の主要素と見てゐるが、これは小用の詰まつた時これを空虚にしやうとする衝動と似てゐる。モル氏は、「射精衝動」(Impulse of Ejaculation) といふ語の代りに、「デトウメツセンスの衝動」(腫脹を除く衝動) と言ふ言葉を用ひてゐる。何となれば、婦人にあつ

ては、精液射出なるものはあり得ないし、

而して、今一つの要素は、接近・接觸乃至接吻の衝動であつて、彼はこれを『接觸衝動』 Impulse of confection と呼び、異性に對する肉體接觸のみならず、精神的接觸をもこれに包含せしめてゐる。モル氏は、上述の原始的二衝動が男女の別ちなくとも性的本能の要素を構成してゐると認めてゐる。(モル氏著『性慾に關する研究』 Untersu chun gen über die Libido Sexualis Berlin 1897)

モルの理論の修正

如何にも此の二衝動は、性的本能の本質的現象に一致する事は疑ひない様に考へられる。けれども、こゝにモル氏の分拆に對して不思議でもあり、不満足でもある點は、この二要素の相互關係である。勿論氏もこの二衝動が生殖腺の作用を背景としてゐるものであり、第一の衝動たる『腫脹除去衝動』は、それと、直接の關係を有し、第二の衝動たる『接觸衝動』は、間接に關係してゐるといふ事を認めてゐる。しかし乍ら、モル氏が此の二衝動相互間の密接なる關係を認めてゐないのは事實である。彼は、此の二衝動が相互に孤立的に分離して存在してゐる場合のある事を主張し、青年時代には此の二衝動が同期的には現はれ

ないと論じてゐる。恚うした見解から、彼は第二の要素たる接觸衝動を生殖腺の間接的結果であるとし、第二次的衝動乃至副衝動であると主張し、『此の事實は、生殖腺の發達を歴史的に觀察し、且つこれ等諸腺が接觸衝動に作用する目的を考察すれば明かに理解出来る』と言つてゐる。換言すれば、第二の要素なる接觸衝動は、種族繁殖上の要求及び男女兩性の性的行爲の欲求の發達と關聯して惹起されるに反し、第一の要素なる腫脹除去の衝動は、種族繁殖上の性的欲求が現はれない前から存在してゐる。即ち、第二の接觸衝動は、性的繁殖方法と自然淘汰とによつて發達するが故に、畢竟第二位に置かるべき衝動であるといふのが彼の主張である。彼は、この點からして「コントラクション」の衝動を、第二次的性的特徴とさへ呼んでゐる。

上述の氏の見解は、性的衝動に對する心理的定義として最も妥當なる定義を提供せんとする人に對し、重大にして且つ精細なる研究をなす價值ある凡ての現象を網羅してゐる様に見える。然し、モル氏が定義した様な形式を其儘採用する事は些か困難である様に思はれる。何となれば、今一度精細に心理的過程を檢査して見ると、是れ等二要素は普通皮相的に觀察せられ

てゐるよりも、實際上もつと密接に相關係してゐるからである。且つまた、モル氏コントラクターが接觸衝動といふ言葉に包含せしめてゐる所の現象の意味を説明するには、繁殖上の性的衝動を持つて來る必要はないと思はれるからである。

モルの理論とダーウキンの性的淘汰説との關係

人類に於て行はれるコントラクションの衝動の眞の意味を發見せんが爲めには、人間に行はれてゐる戀愛行爲の現象を檢覈する必要があるのは固よりであるが、尙進んで、コントラクションの衝動が性的衝動現象の大部分を占め、且つ此の衝動の爲に驚くべき精力を犠牲にされてゐる動物間の戀愛現象を精細に觀察せなければならぬ。獸類に於ける接觸衝動の現象に對して注意深い觀察を向けたのは、言ふ迄もなくダーウキン(Darwin)を以て嚆矢とする。

ダーウキンは、此の現象を説明せんが爲めに、かの有名なる性的淘汰の説を創設した。吾々は此處に性的淘汰説の原理に深く立ち入る必要はないが、しかし、ダーウキン氏が此の原理を打ち立てる基礎となした所の心理的意義を考察することは、此處に考察の主題目とされたるコントラクションの衝動の研究と密接の關係がある。それ故、茲にダーウキン自身が此れ

に對する心理的價値を如何に考察してゐたかといふ事を問ふ必要がある。

ダーウキンの性的淘汰説の矛盾點及びその修正

この事實は、ダーウキンが創

設した性的淘汰の原理が正しいか否かの問題を決定する上に於て可なり重大な問題である。けれども、私の知れる限りに於ては、今日までこの問題は何人によつても提出されなかつた問題である。ダーウキンの著『人類の由來』"Descent of Man"を檢覈して、私は、その原理の中には、性的淘汰に關する心理的意味に就ては、氏自らの心にも未だ十分の解決を下してゐなかつた様に見える所の全然異つた二重の原理があるのを發見した。此の二つの相扞格する説は、次の如く該書中の述説を二つのグループに拔萃分類して見ると明白となる。

(一) 下等動物の審美的能力

該書(一八八一年出版の再版より引用)の一節に彼は恧う言つてゐる。「これ

等の下等動物は美に就ての觀念及びこれを識別する力を有し、且つ雌性に對する興味を有してゐる。(二二頁 照)「雌性は、常に或は時として一層美しい雄を選択する……」(二二頁 照)「昆蟲雌は色彩や形態の美を諒解する事が出来る」(三二九頁 照)と言ひ、人類を除く他の凡ゆる動物中鳥類が最も美的趣味を有するものである事を説いて、鳥類のみが「吾々人類の有する美的興味と略は同程

度の美的興味を有してゐる』(三五九頁)と説き、又、雄鳥の形態乃至羽毛の色彩上の如何なる變化も『雌性の歡心を呼ぶに十分である』(三八五頁)『鳥類は一般に色彩及び音調の美に對して或る程度の趣味を有してゐる』鳥類の雌性は、美に對する精細な認識を有しないと云へない』(四二二頁)『凡ての新奇な事が、新奇といふ事そのために鳥類に悦ばれる』(四九五頁)『鳥類は美に對する識別力及び或る場合に於ては美的趣味を有してゐる事を示してゐる』(四九六頁)『動物の雌性の有する美的能力は、恰も吾々人類の美的趣味が經驗によつて改變される様に、經驗によつて進歩して行く』(六一六頁)と見てゐる。以上の見解が彼の第一方の見解である。

〔(二)性的淘汰の目的と性的刺戟〕

然るに又これと全然異つた見解を同著中の到る所に述べてゐる。曰く『蟬の雌性は鳥の雌性と同じ様に、雌性の蠱惑的音調によつて雌性に魅惑せられ情を唆られる』(二八二頁)『蝗蟲(Locustidae)の雄の鳴く音は、雌を誘き且つその情慾を挑發するためであるといふ事は汎く知られてゐる事實である』(二八三頁)『雌鳥は最も美しい雌性に蠱惑される』(三一六頁)『ある種の鳥類にあつては、雄性は愛の聲によつて其の相手を誘惑し、情慾を刺戟しやうとする。……雌性はある一羽の雄によつて刺戟され、斯くして

無意識にそれを選ぶ』(三六七頁)『雄の軀に於ける各種の裝飾は、凡て雌を刺戟し、誘引し、情を唆るために役立つ』(三九四頁)と。彼は本書發刊後五年、即ち一八七六年に本書の附録としての一書を書いてゐるが、氏の所説として最も新しい見解と見らるべき該附録書中にも恣う主張してゐる。『性的淘汰の理論よりすれば、元來雌性なるものが雄性の有する特種の美點を認めてこれを選択するものであるとは認められない。事實雌性は只他の雌性よりも、より美しい雌性に誘惑されるのに過ぎない。此の事實は美しい色彩を有する鳥類に於て特に明らかに見られる現象である。(同書附録)と。斯くの如く、ダーウキン氏は、一方に於ては是れ等の現象をば眞の美的要素即ち美に對する興味から惹起されるものと解釋し、他方に於ては雌性の有する色彩、音聲其他の諸特徴は何等雌性の美感に慙えるものでなく、性的亢奮を誘致し、性的接觸に對する蠱惑を與へるものであるといふ全然異つた解釋を下しながら、氏自らもその見解の差異に氣付かないでゐたのである。

第一の原理に従へば、意識的たると無意識的たるとを問はず、兎に角雌性は美を奪び、最も美しい相手を選択する。

此の見解は、只ダーウキン氏の著『人類の由來』に於てのみ主張せられた見解である。彼と親交あるウォラス氏 (Wallace) は、ダーウキン氏は『自意識的自發的性的淘汰』を承認し、『ダーウキンニズム』の中にも同様の見解を述べてゐる様であると無條件に結論してゐる。ロイド・モルガン氏も亦『習慣と本能』Habit and Instinct (一八九六年出版)の中に、ダーウキンの主張に對し、ウォラス氏と同見解を述べてゐるのを見る。

第二の見解に従へば、其處には何等美的問題は含んでゐない。雌性はたゞ無意識的に最も力強い複雑な刺戟に支配されるだけであるといふのである。吾々は、此の二種の見解の何れを正當として承認し得るかといふに、勿論言ふまでもなく第二の見解である。

ダーウキン説の心理的方面の欠陥

しかし、此處に注意すべきことは、ダーウキンは比較心理學的研究方法が未だ發達しなかつた時代に生れた人であり、従つて、心理學者として認むべき人でなかつたといふ事である。若し彼をして今二十年後れて此の原理を創設せしめたならば、彼は恐らく、上來私が引用し來つた様な曖昧な且つ不注意な表現をしなかつたであらうと思ふ、彼は、性的淘汰の原理を説くに當つて、『選擇』"Choice"とか、『選取』"Preference"

とか、『美的感情』"Aesthetic Sense"とか言ふ如き漠然たる言葉を用ひて、此の原理を曖昧にしてゐるのは、心理的事實に疎かつた、上述の理由によるものである。けれども、斯くの如き實際的事實を述べるにあつては、何も故らに在來の人間の心理學から借りて來た様な既成の言葉を借りて來る必要はない譯である。雌性が雄性の刺戟に呼應するといふ事實は樹木が和照たる春光の刺戟に應じ季節を違はず芽をふくと同じである。若し此の際これを説明するために故らに樹木は自己の若芽を出す爲めには最も好都合の季節を『選擇する』"select"と言つたならば、此の事實の眞實の叙説を曖昧にするに過ぎない。故に、雌性とそれの適當なる配偶者たるべき雌性との相呼應する相互關係の説明に於ても、美的選擇といふ様な言葉を用ふる事は不必要である。ダーウキンは、愛の闘争、追躡躑躅、跳躍及び雌性が相並んで行列をつくる事等の行爲は、雌性自らの接觸^{コレクテション}の衝動——否此の場合第一の性的衝動の要素たるチューメツセンスの衝動と言つた方が一層適切であるかも知れぬ——に刺戟する方法として有効である事を見通してゐる。とは言へ、彼が或る程度まで諸動物に於て是れ等の行爲が雌性の充血衝動に必要な活動をそゝるために演ぜられるものであるといふ事を認めてゐるのは、如何にも興味ある意味深か

い事實でなければならぬ。

腫脹衝動の根本的意義

『腫脹』(tumescere)といふ言葉、それは私が以下主張せんとす

る所であるが、此の言葉を使用する事が正しいといふ事は尿管の充血、今少し厳密に言へば時に生殖機能に關係ある個所の尿管の充血は、旺んなる性慾の前置として必然に現はれるといふ事實によつて見ても明らかである。

腫脹衝動の原理は動物及び人間に於ける求愛現象によつて説明される

此の事

實は既にヒープ氏 (Heap) が、『性的季節』"Sexual Season"といふ研究の中で哺乳類に於ける現象に就て述べてゐる所である。ヒープ氏は哺乳動物の牝に於けるこの現象を、充血準備期即ち『プロエストラム』"Pro-oestrus"と、その直後に繼續して起る性的慾望の時期、即ち『エストラス』"Oestrus"とに區別して恚う言つてゐる。『後者の時期即ち「エストラス」は、前者の『プロ・エストラム』の結果であつて、下等動物にあつては性的行爲は只後の時期なる「エストラス」中に於てのみ行はれ、「プロ・エストラム」に於ては全然行はれないのである。tumescenceは性的欲求が強烈にならない前に起らなければならない。斯くして交尾は上述の如き心理的過

程の進むにつれて現はれるのである。常態の場合に於ける充血期は、子宮の組織に於ける或る種の變化と關係を有し、且つ生殖器の充血、刺戟及び衝動に伴はれて起る。………充血は必然に伴ふ現象であり、且つ本質的必要條件である。………下等動物に於ける充血準備期の徴候としては雌性の陰部の膨脹、充血、全體として落付なき態度、亢奮等が注意せられる。また其處には、例へば兎に於ては眼が血走つて來るとか、豚にあつては兩耳が垂れるとか言ふが如き、其他これに類した種々の徴候が現はれるといふことは、これ等の動物を飼養した經驗ある人の汎く知る所である。猿にあつて顔面、乳房部に充血を印し、尻及び臀部乃至其の周圍に充血を來たす。時としてはそれが非常に著しくなる事がある。また種類によつては肛門及び局部の周圍の柔軟なる組織部に腫脹を來たし、時として深紅色を呈する。これ即ちプロ・エストラムの進行してゐる事を證據立てるものである。………プロエストラムの間は猿の子宮中の子座の組織が發達し、子座の尿管の數及びその大きさを増し、それが潤澤に血液を以て充たされて來、而かも其の表面はテカ／＼と光り且つ筋張つて見える。斯かる状態は内部の子座が緊張し、充血してゐる間繼續する。………凡ての本質的諸點に於て人類の女性に於ける月經即ちプロエ

ストラムは、猿類のそれと同じである。……………エストラスはプロエストラムに基づく子宮内の變化の後に於てのみ惹起される。最初に生殖器の外部諸器官に起つた變化の波が子宮に及び、子宮内に於てプロエストラムの種々の徴候が現はれた後、その亢奮は次第に收まつて行く。斯かる變化を経て、それが次第に鎮まつて行くといふ事が、また同時に外部諸器官が更に新らしい刺激を惹起するといふ事であり、此處に初めて充血期エストラスの状態に入るのである。……………種々の動物を研究した結果によれば、牝は局部及びその周圍組織の腫脹及び充血が愈々顯著になる迄は牝の要求を許さない。而して又それ等の諸動物中、特に多量の出血に悩む動物にあつては、これを許す前にその血液の全部とは言はれない迄も、少くもその大部分を排出する』と。(ヒープ氏『哺乳動物の性的季節』"The Sexual Season of Mammals" Quarterly Journal of Microscopical Science 一九〇〇年第五十六卷第一號所載、尙エストラスの研究に關しては、マーシヤル氏『生殖の生理』"Physiology of Reproduction" 参照)

上述の研究報告は、曩に私が オトネンカニス Amescence と名付けた過程に於ける脉管的方面の特徴を根本的に説明してゐるものである。けれども此處に一言附言して置かなければならない事は、人類の

場合に於ては、斯かる過程中に於ては神経作用が下等動物のそれに比し一層顯著となり、従つてそれが爲め多少の差こそあれ、一般に本來的の性的慾求を制限される傾きを有してゐるといふ事である。(著者著「性の心理」第一卷「性的周期律」参照)

モル氏は、彼と異にする私の性的衝動の見解を採用して彼の立場を多少訂正してはゐるが、しかし大體に於て矢張り氏の舊來の意見を固持してゐる。(モル氏「性慾の分解」"Analyse der Geschlechtsstriebes" 『醫學臨床講義』"Medicinis he Klinik" 一九〇五年發行十二號、十三號——及『性慾と社會』"Geschlecht und Gesells haft" 第二卷第九號及び第十號参照)

ヌーマ氏(Numa)は、接觸衝動コンタクティオン・充血衝動テューリフセンス・充血除去衝動デクテューリフセンスの三つは、同様の過程に於ける三階段であつて、コントラクションが最初に現はれるが、此の衝動は或る一對象を自己の性的相手として決定せしめるものであると見てゐる。(ヌーマ氏著「性慾の中間階段年鑑」"Jahrbuch für Sexuelle Zwischenstufen" 一九〇四年出版五九二頁参照) ローベルト・ミユルレル氏は、私の取つた見解と同じくモル氏の見解を排し、接觸衝動コンタクティオンと射精衝動テューリフセンスとは別にして考へる事の出來ないものであつて、同じ衝動が二つの違つた現はれ方をしたのに過ぎぬと考へてゐる。(『有

性生物學』"Sexualbiologie" 一九〇七年出版、三十七頁参照)またマックス・カッテ氏(Mar Katter)は、一九〇八年十月發行の『性慾學時報』"Zeitschrift für Sexualwissenschaft" 所載の『性慾行爲の初歩』"Die Preliminarien des Geschlechtsaktes" 116-117、聖ポール(G. Saint-Paul)も其の著『同性及び同性の特質』"L'Homme sexualité et les Types Homosexuels" 一九一〇年發行三九〇頁)に於て同様の意見を主張してゐる。

求愛の目的はチューメツセンスの誘發にあり

私は、モル氏の解釋をば、性的衝動の説明に價値ある貢獻を與へたものと認めるに吝かではないが、しかし究極的完全な解釋と見ることは出来ない。私の見を以てすれば、接觸衝動は充血衝動充血衝動(充血衝動)の發展に附隨して起る一現象であり、而かもそれは最も重要な過程であるが、しかし、それが性的衝動なるものにとつて絶對的且つ根本的・本源的要素をなすものとは考へられない。それと同時にまた、充血衝動充血衝動(充血衝動)にとつて、假令本源的に且つ根本的に必要のものでないにしても、少なくとも最も重要な附隨的現象である。接觸衝動接觸衝動(接觸衝動)は、徹頭徹尾性行動の實行に對して最上の好都合なる條件を與へる。しかし、その實行に至る過程に於て絶對必要の要素ではない。この事實は哺乳動物發達の原始

期に於ては、此の現象が全然存在しなかつたといふ事によつても明らかである。チューメツセンス及びデイチューメツセンスは、ともに性的衝動の要素として生來的に且つ根本的而かも本質的に必要である兎に角上述の如き必然的に連續せる過程の上に性的衝動が成り立つといふのが自然の大法であり、根柢であると思ふ。

接觸衝動及び遲緩衝動は求愛の第二次的補助的要素なり

尙又、此の二つの過程

中に於ては、チューメツセンスが最初に現はれ、且つ最も重大要素であつて、性的心理の殆んど全部はこれに基づいてゐると言つてもいい。若しモル氏の如く、性的過程を「コントラクテーション」と「デイチューメツセンス」のみに解剖しようとするならば、それは性的過程中の最も重大なる要素を省略してゐると言はなければならぬ。例之、大砲の發射過程を分解する場合に、手を以て觸れる事及び砲彈の發射との二つに分解して、裝填といふ過程を除外しようとするのと同じである。此の場合に於て最も必要な過程は、寧ろ裝填と發射との兩過程である。而してコントラクテーションは、裝填の一部である。大砲發射の方法を理解し且つ發射運用上の過程を知らんとするには、手を以て觸れるといふ事ばかりでなく、裝填といふ作用をも理解

しなければならぬ。これと同じく、性的衝動の分解に於ても、接觸衝動も勿論見遁し得ない要素であるが、然しそれは「チューメツセンス」を助ける點に於てのみ重要である。それ故接觸衝動は、腫脹衝動に對しては從屬的位置に置かるべきものである。性的衝動の過程に於て、眞に根本的重大要素となるものは、腫脹衝動であるからして、われ／＼はモル氏の如くこれを全然度外視する事は出来ない。

ワレースの反性的淘汰説

ワレース氏 (Wallace) は、ダーウキンの性的淘汰の原理に反對した。けれども、氏の態度は決して批評的研究の結果からの反對とは言はれない。これに就ては、前來既に論及した如く、氏は一方に於てダーウキンの性的淘汰説の一面面をのみ見、而かもその本質的でない側面をのみ見、他方に於ては、氏自身の見解の根本とする所が、ダーウキン説の本質的部分と全然一致してゐるからである。氏は、「熱烈性」といふ事を説いて、牡の「執拗と努力」とが捷利を得る事を例示し、且つ牡の「元氣と活潑」とが牡の有する強烈なる色彩上の魅惑と同じ効果を有するものである事を説いてゐる。氏はまた、その後二十年にして發表した「ダーウキニズム」(Darwinism)中に、牝は牡の外観によつて喜ばされ且つ亢奮せしめ

られる事があり得るといふ事を主張してゐる。これによつて是を見れば、ダーウキン説の主要點は、直接間接に上述の氏の學說中に承認されてゐることが解かる。

性的淘汰説に對するエスピナーの批評

エスピナー氏 (Esperanza) は、一八七八年彼の暗示的著書「動物の社會」(The Social Animals)中に、性的淘汰説を論じ、ダーウキン及びワレースよりも一層心理學的精神を以て動物の體臭、色彩、形態、音聲、遊戲、行列戯れの闘争を説明してゐる。而して、彼は動物に於ける是れ等の現象の目的を、雌雄兩性が相互に情慾の亢奮を誘發し、且つチューメツセンスを刺戟する爲めであると見てゐる。彼は、雄の蝸牛がその頭部の兀起物を、.....互に性的亢奮を誘起せしめんとしてゐるといふ例を引いてゐる。彼は、是れ等の諸現象を總括して次の様に言つてゐる。

「これは、性的結合の豫備であり、交接の第一行動と稱すべきものである。斯くする事によつて、雄性の肖像が牝性の意識中に植付けられ、其處に鮮かな雄性の印象が出来、それが有機體の深い内奥にまで影響し、受胎作用に必要な生理的變化を起こさしめる」と。

性的淘汰説に對するボーニイの見解

ボーニイ氏 (Bennett) も亦、性的感覺を解剖し

て、雄性の好んで行ふ舞踊、行列等は雌性を亢奮せしめる爲めに企てられるが、しかし、またそれが同時に雌性自身をも亢奮せしめるものであるとは考へられないと言つてゐる。(ボーニー著『性の慾望』"Besoins Sexuels" 第五章 内部感覺 "Sensations Intimes" 一八八九年發行參照、尙此の問題に關しては、ブルダツハ氏 (Burdach) が、一八二六年にその著「實驗科學としての生物學」"Physiologie als Erfahrungswissenschaft" の中に於て、雄性の活動は生殖を希求するといふ事、及び雄性の欲求と同じ欲求が、雌性に影響し、精神的にも肉體的にも雄性と同じ欲求を感ずるに至るといふ事を認てゐる)

求愛に伴ふ闘争現象の解釋

以上の見解に比し、尙一層卓れた思慮深かい議論が、チリエール氏 (Tillier) によつて主張されてゐる。ダーウキン、チリエールの指摘した所だけでは、闘争と求愛とが同時に成立するといふ事の解釋には不十分である。また彼等は、闘争と求愛との兩現象生起の順序をも十分に觀察してゐなかつた様である。チリエール氏は、闘争のない求愛は極めて稀である事を主張して、『闘争と求愛とか同時的に共存するのが常態である』と言ひ、更に進んで、雄性が雌性を占有するのは主として腕力によるが故に、雌性は性的淘汰の

僅かの機會しか有しない、事を例證し、次に恚う力調してゐる。『求愛といふ行爲は、性的行爲後にも行はれるのを見る。故に求愛行爲を以て性的淘汰の一要素とする事は無意味である。求愛の目的は、雌性が性的淘汰を行ふ事を意味しない。それはたゞ雌雄兩性の性的亢奮を誘起する爲めにすぎぬ。而して斯かる亢奮は、性行爲を容易ならしめるばかりでなく、また受胎をも容易ならしめる』と。斯くしてチリエール氏は、此の點に於てグルース氏 (Gross) に先鞭を着けてゐるが、氏はまた雌性の羞耻といふ事も、以上と同じく性的亢奮を誘發する目的の爲めになされるものであつて、羞耻の爲めに雌が雄を回避する事は、雄をして一層熱心にこれを追求せしめる原因となり、且つ斯くして交尾を遷延せしめるといふ事は、生殖腺の分泌を一層多くし、受胎の機會を一層容易ならしめるものであると説いてゐる。チリエール氏著『性的本能』"Instinct Sexuel" 一八八九年七四頁、一一八、一一九、一二四頁及び二八九頁參照)

ハドソン氏の鳥類の音楽と舞踊の觀察

ダブルユウ・エツチ・ハドソン氏 (W. H. Hudson) は、『ラ・プラータに於ける博物學者』といふ表題の著書(一八九二年出版)の中に、「自然界に於ける音楽と舞踏」といふ有名な一章を設け、鳥類に於ける種々の舞踊、音楽及び求愛

の戯れに就て研究してゐるけれども氏は、これ等凡ての現象をば、「喜びの刹那々に起る發作」とのみしが解釋してゐない。勿論われ／＼は、ハドソン氏と同じく、雌鳥の自覺的の性的満足を得ようとする爲めに、雄鳥の音楽乃至舞踊が演ぜられるのもなければ、また羽毛の色彩や裝飾が美しいのでもないと思ふものではあるが、しかし、また同時に是れ等凡ての現象が兩性の「腫脹衝動」に直接の關係を有するといふ結論を無視する事は出来ぬ。

性的季節と鳥類の羽毛、色彩

エッチ・イー・ホワード氏(H. E. Howard)氏の意見に従へ

ば鳥類の羽毛の色彩は性的季節に於て最も鮮麗を極めるが、交尾の後に於ては僅々五六時間にして其の美を著しく失ふのを見る。而かも、牝を獨占して交尾の目的を達する事に於て最も成功するのは、其れ等雄鳥中の最も美しい鳥である。ハドソン氏も亦言つてゐる通り、如上の現象は只専ら交尾期に於てのみ起る現象ではないが、しかし交尾期に於て特に顯著に現はれる現象である事は否まれない。けれども、ハドソン氏の此の問題に關する次の結論には、賛同する事が出来ない。それは氏が、是れ等の現象は雌鳥の現はれない以前に於ても起る現象であるから、これを性的衝動に關係ありと考へる事は出来ぬと言つてゐる事である。けれども斯かる諸

論は恰も小猫が翅或は糸巻を弄ぶ事と、鼠を捕へる事との間には何等の關係が存しないと主張するのと同じ論法である。ダーウキン自身も言つてゐる如く、動物にして自己の本能に従つて練習する事を喜ぶのは、如何にも自然の理である。何となれば、それは他日實際上の役に立つものであるからであり。鳥類に於ける上述の諸現象は、主として性的チューメツセンスを惹起する爲めの現象である。若しこれ等諸現象が、生殖と没交渉であつたならば、爾かく完全な發展を見られなかつたであらうと思はれるからである。尙、これ等の舞踊、音楽が、同時に喜びの感情を表白する時にも用ひられる様になつたといふ事は、決して異とするに足りない

求愛と鳥獸及び人類の舞踊の原始的意義

鳥類の觀察に於ては、イー・セラス氏(E. S. Selous)

が興味ある問題を提供してゐる。氏は、鳥類の凡ての舞踊なるものは、必ずしも性的性質を有してはゐないけれども種類によつては、——例へば大鵝の如きは、全然別種の舞踊をする。是れ等の鳥の中には、雌雄兩性が變な舞踊を行うと共に交尾を行ふからして、人をして性的舞踊と見做さしめる様な事がある。又、春になれば、人を性行爲の一部否少なく性的現象の一部であると考へさせる程に、雌雄が共に走つたり、追蒐けあつたりする。……………

また、同じ鳥であつて、性的舞踊と見做される様な舞踊と、さうでない舞踊と見られる舞踊とお道化との兩方を演ずる鳥がある。而してまた、雌雄兩性が共にこの二種の舞踊を演ずる鳥さへもある。(同氏著 "Bird Watching" 一五頁—三〇頁)

尙氏は、二羽の雄が一羽の雌を争ふ場合の状態を観察して恚う言つてゐる。此の場合、雄鳥は、非常に強烈な感情を現はすに反し、雌鳥は好奇的興味を以てこれを觀察してゐる。「斯くして雄の方の態度は漸次雌に對する誇示となり、雌はこれによつて喜びの感情を刺戟されてゐる様である。」と言つてゐる。此の見解に従へば、雌鳥の興味は當初翅毛の色彩、形態の美等には向はないで、第一に雄鳥の猛烈な舉動乃至舞踊に向ふ。種々の裝飾乃至美はしい色彩を有しない鳥類は、自然の勢として、或は翅を動かし、或は翼を敲き、或は種々の舞踊を演ずるの趣味を發達させる。けれども、斯かる舞踊は終には全く形式的のものとなり、そして求愛の性質を帯びない場合にも演じられる様になる。

ヘツケル教授の「鳥の歌」

最後にわれは、此の問題に關してヘツケル教授 (Professor Hacker) に負ふ所大なるを思ふ。何となれば、教授は此の問題に對し最後の決定的斷定を

與ふるに足るべき見解を發表してゐるからである。一九〇〇年に出版せられた氏の著「鳥類の歌」"Gesang der Vögel" 中に於て、氏は鳥の歌の發達に關し種々の研究を發表してゐる。氏の見解によれば、鳥類に於ける種々の表示の最も本質的要素をなすものは歌であつて、鳥類の歌は、舞踊其他種々のお道化た戯れを解決する健論となるものであると考へてゐる。元來その本源の意味よりすれば、鳥類の囀りは、たゞ呼び懸或は注意警告を與へる意味以上には用ひられなかつたのである。所が自然陶汰と性的陶汰との影響を受けて、これが、交尾期に於て性的亢奮の感情を表明するものとして用ひられ、遂にはまた性的亢奮を誘發せしめる手段として用ひられる迄に發達した。斯くして、雄鳥にあつては咽喉の筋肉の發達を來たし、雌鳥にあつては聽覺の發達を來たし、引いて歌そのものが一種の遊戯となるに至つた。それ故、遊戯とは言ふものゝ勿論それは實用とも兼ねたものである。換言すれば、鳥の歌は、第一には單に雌の注意を惹かんとする性的準備の意味を有し、第二には性的亢奮を惹起せしめんとする性的意味を有してゐる。雌鳥にあつては、聲帯はそれ程發達してゐないけれども、矢張り以上の目的を達する助けとなつてゐるのを見る。(同著書五十一頁参照) 而して第三には、性的意味を有しない

方面即ち單なる遊戯の爲め乃至喜びの感情を表白する場合の意味に用ひられてゐると。ヘツケル氏は、更に恚う言つてゐる。鳥類に於ても、交尾期が終つた後に於て尙幾分の性的亢奮が残存してゐるのは、生殖の際何等か不慮の故障の生じた場合乃至再び生殖を興始する必要の起つた場合、その性的亢奮を利用する事が出来る爲めに價値があるからであると主張してゐる。

舞踊はチューメツセンスを誘起する有力な動因なり

上述の理論は、既に前來屢々引用し來つた諸家の見解と非常によく一致してゐる。是れ等の見解は、實に此の方面に於ける現代の科學的思想の一般的傾向に適切に合致してゐる様に信ぜられる。何となれば、此の理論は、「チューメツセンス」の必要を認めてゐるばかりでなく、「チューメツセンス」が性的行爲に於ける最も重要な要素であるといふ事を力説するものであるからである。從來謂はれて來た所の性的淘汰に於ける美的要素なるものは、性的衝動にとつて單なる間接的要素に過ぎない。雄性の美は、畢竟するに、雄性の力の象徴である。

性的衝動の副産物としての藝術的衝動

鳥類其他の動物に於ける「チューメツセンス」の事實を重視するといふ事は、また直ちに、喜悅の表明として、舞踊等を承認する意味

を含んでゐる。動物に於ける是等の表現は、人類に於ける藝術的表現に比すべきものである。かのワイズマン氏(Weismann)が、其の著『音樂論』"Gehtanken über Musik"の中に説いた如く、實にわれ／＼の藝術的能力は、性慾衝動の一副産物である事を認めざるを得ない。例へば、音樂的才能は、恰もわれ／＼の心の手が、吾々自身の感情を奏するが如きものであつて、吾々の兩手の指は、音樂の爲めにつくられたものでなく、これと全然別の必要によつて出來たものである。』

是れ等の事實に含まれた心理的意味は、グロース氏(Gross)が、動物及び人類に存する遊戯的本能に關する著書の中に、周密な研究をしてゐる。(カー・グロース氏著『動物の遊戯』"Die Spiele der Thiere" 一八九六年出版、及び『人間の遊戯』"Die Spiele der Menschen" 参照、(共に英譯あり)グロース氏は、ワレース氏よりも一歩進んで、自覺的性的淘汰を否定し、無意識的性的淘汰説を主張してゐる。氏は、無意識的性的淘汰を説明して恚う言つてゐる。『凡て雌性は、最も強く自己の性的本能を刺戟する雄性によつて、最も容易に征服せられる』と。氏は更にチーゲル氏(Niegler)の説を引用し、恚う續けてゐる。『凡ての動物にとつて、神經組織を刺戟す

る度の高いといふ事が、生殖にとつて最も必要である。斯くして、われ／＼は生殖の前置として、精神的亢奮の必要を認める」と。(チーグレル教授よりグロース教授に與へたる私翰「動物の遊戯」二〇二頁参照)

性と闘争との原理

グロース氏が指摘したる如く、情熱的精力を激烈に發射する前には如何にもさうした過程を経る必要があると思ふ。けれども、又ある場合に於ては、これと反對にさうした激烈な準備が、最少限度に減らされる事がある。即ちそれは靜かに媚を呈し、求愛を表する場合に見られる如く、激發的感情を現はさず、その感情を最も婉曲に表明するが如きその一例である。人間乃至他の動物が、急激にその感情を洩らさないで、婉曲に愛を求めるといふ事の目的は要するに性的亢奮を徐々として發展せしめんが爲めである。

然し、グロース氏の上述の見解は決して斬新のものではない。前來既に私が指摘した如く、グロース氏は幾多の點に於てチリエール氏に先鞭を着けられてゐる。けれども、グロース氏は、其の理論を整然と組織立て、且これを敷衍して、種々の方面に涉つて説明を加へた點が勝れてゐる。ダーウキン氏が『人類の由來』を書いて以來、氏の性的淘汰説の原理の主要點を捉えたの

は、グロース氏であつた。グロース氏はまた同時に、性的淘汰を以て、その大部分を自然淘汰の特別の場合と認めた。(グロース氏著『動物の遊戯』^{ディシiplineルティ}二二四頁参照)此の見解は、ヘツケル氏も認めてゐる所であつて、氏は雌性を得んが爲めの奪ひ合ひの闘争は、適者生存の爲めの戦の特別な現はれ、乃至その變形であると主張してゐる。『生物の一般形態學』"Gen Morph" 第二卷二四四頁参照)

兩性の結合は、幾多の闘争を経て後にはじめて達し得られるものである様に思はれる。兩性間に性的興奮を惹起する事の困難及び本々内氣なる雌性の性的亢奮を誘す事の困難に打ち勝つて雌性を自己の右とするといふ事は、最も勇氣ある強力なる雄性が、彼れ等の競争場裡に勝を占める事によつて、はじめて達せられる。(これと同じ事實が人類種族間に於ても言へると思ふ。ブレイ氏 (Bray) は、此の問題に關し次の様に言つてゐる。『戀の神は、兩性結合の上に、羞耻乃至内氣といふ道德的束縛を置いて、その結合を困難ならしめ、爲めに最も強力な活氣ある男性のみが、自己の目的を達し得る結果になつてゐる様に見える』)。(『哲學雜誌』"Revue Philosophique" 一九〇一年十月號所載、"自然に於ける美" "Le Beau dans la Nature" 參照)

此の問題に關聯して、マロー氏 (Marro) は次の様に主張してゐる。野蠻人間にあつては、何故求愛が遂には腕力沙汰になるかといふに、それは、腕力なるものが男性的といふ事の根本要素だからである。即ち勇氣といふ事の肉體的體現だからである。生活場裡の争ひに於ては、暴力といふ事が第一の道德だからである。内輪といふ婦人の性質は、元來能動的たると受動的たとを問はず、肉體的力によつて男子の要求を却けて來たものであつた。それ故、男子に於ては婦人の拒絶に抵抗して、よくこれを制御する事の必要があり、これが男子としての重要な資格となつた爲めに、その自然の勢ひとして腕力が男子に著しき發達を遂げたのである。これ故に、婦人にしても、幾多の求愛的競争者中から自己に最も氣に入つた男性を選ばうとする際に於ても、男子の力といふ事にその資格を求めらるゝのである。(マロー氏著『春情期』"La Puberté" 一九〇一年出版、四六四頁) 斯くの如くして、氏は氏自らの獨自の意見により、グロース氏の結論と同じ結論に到達してゐる。

ダーウキン説の修正と解決

ダーウキンの性的淘汰説が、事實の真相に當つてゐるか否かといふ事に就ての多年の論争も、こゝに於て乎終りを告げたと言つて可い。ダーウキンの

説を賛成した人、及びこれを攻撃した反對論者の何れの議論も、その一部が正當であり、その一部が謬りであつた事が明かになつた。それ故、この性的淘汰説は是れ等兩者の議論の謬りを棄て、その正しき點を採つて一つの完なき學説に改訂せられるに至つた。而して斯くして改訂せらるる理論は、廣く現代一般の科學者間に承認せられるに十分な根據を有してゐる。例へば、ロイド・モルガン氏 (Lloyd Morgan) は、性的淘汰に關するグロース氏の意見を賛して、彼自らが在來主張して來てゐた所の『交接本能』"Pairing Instinct" の説を訂正してゐる。(ロイド・モルガン氏著『動物の動作』"Animal Behavior" 一九〇〇年出版二六四—五頁) 氏は、交接本能といふ事を結論した所で恚う言つてゐる。『性的淘汰の假説は、要するに雌性に受容られた雄性は雌の性的衝動を適當に刺戟した雄性であるといふ事を暗示してゐる………求愛は、生理的見地よりすれば、性行爲の慾望を誘起する一方法であり。またそれは、生殖器官の全組織を刺戟し、且つ性的行爲を容易にする手段であり、また切實な、爆破的の衝動状態をつくるための唯一の方法である。斯かる爆破的衝動は、自己の慾望を自力によつて制御する事の出來ない様にさせる爲めの心理的重大要素である。それ故、求愛は例へば、弓を射る時に箭をつがへ、

これを十分に引き絞ると同じ作用であつて、強健な種族を持続せしめんが爲めには、最も必要な生物學的要素である」と。

斯くの如く、廣く此の問題を見來れば、われ／＼は、人類と下等動物とを問はずチュームツセンスの作用が共通であるといふ事を認めざるを得ない。動物に於ける求愛に關しては、ビュヒネル氏(Büchner)の著『動物界に於ける戀愛及戀愛生活』"Liebe und Liebes-Liben in der Thierwelt"が總括的研究をなし、われ／＼に教へる所多く、またブレーム氏(Brehm)の『動物生活』"Thierleben"種々の事實を蒐集してゐる。其他ヘツケル氏の『鳥の歌』"Gesang der Vögel"第四章に、鳥類に於ける舞踊及び求愛の方法が委しく研究せられてゐる。人類に關する此の方面の研究には、ワラツシエツク氏(Wallasek)の著『原始的音樂』"Primitive Music"があり、其の第七章に種々の事實を總合して、性的淘汰説を否定してゐる。ヒルン氏(Hirn)の『藝術の起源』"Origins of Art"第十七章もまた一讀の價值がある。ヒンク氏(Fink)の『原始的愛及び戀愛物語』"Primitive Love and Love-stories"も、種々珍奇な事實の報告をしてゐる。私は次章に動物の求愛に關して特に興味ある事實を檢覈吟味したいと思ふ。

第三章 下等動物に於ける求愛

蛞蝓(なめくじ)の求愛——かたつじり蝸牛の求愛——なめくじ蛞蝓の細心な求愛——かまきり蜘蛛の求愛ダンス(その一)——かまきり蜘蛛の求愛ダンス(その二)——レカーヨン氏の「とたてぐも」の求愛報告——殘忍な蠅蠅かまきり)の求愛——蝶蛾類の求愛現象——亞爾然丁の燕雀類の求愛——ボリヴァアの燕雀類——赤胸駒鳥(Ieistes Superiaria)の求愛——眞鴨の媚態——演戯場をつくる蛇日雉——鴉鳥の「旋回ダンス」

大蛞蝓(おほなめくじ)の求愛——なめくじ雌雄兩性の大蛞蝓(Limax Maximus)に於てさへ、求愛

の方法は非常に複雑であり、且つその手続きが長い。次の事實は、ゼイムス・ブラツドン氏(James Bladon)が『動物學者』"Zoologist"誌上(一八五七年發行第十五卷、六二七二頁)の「蛞蝓(Limax cinereus)の愛」といふ報告から拔萃したものである。——それは夏の蒸暑い眞夜中から始められる。一方の蛞蝓は徐々として相手の蛞蝓の蹤を追ふ。そして後から追ひ付いた蛞蝓は、先立つ蛞蝓の尾とでも言はれる部分に、彼の口を載せて、相手の進むがまゝについて行

く。斯くする事が姑く續くと、遂には彼等は其處に立ち止まり、二匹が互に纏れ合ひ、そして盛んに粘液を分泌する。すると彼等は多量の粘液を糸の様にひいて、それにぶら下がり九吋乃至十五吋の長さ及びぶ。彼等はこれにぶら下つた儘再び纏れ合ひ、圓錐形をなす。この時雌雄の口邊の凹所から器官が現はれ、それが互に接觸する。姑くすると、彼等は糸の先で互に纏れ合つた儘螺旋形に蠕動する。それは時には美しい貝の形となるかと思へば捲きよれた木の葉の形となり、或は茸を倒さに釣した様な形其他種々雑多の形をなす。程經て兩性はその纏れを解き生殖器は姿を隠し、互に別れ、互に糸を傳つて上方に匍ひ上つて來る。

蝸牛の求愛

蝸牛にあつても、種類によつては、性的亢奮を誘起する爲めの或る特別な器官を備へてゐる。「Helicidae」(陸棲有肺蝸牛)といふ蝸牛の一種には、普通俗間に於て「戀槍」^{ツレーベスフェル}「Liebespfeil」乃至 ^{テールム フェネリス}telum Venenis (戀の音信武器)と呼び做してゐる所の器官がある。これは、生殖器の重要な一部分をなすものであつて、その形は種々である。或は眞直なもの、曲つたもの、管の形をなしたものの蠟燭の形をなし先端が稍尖つてゐるもの等があるが、その實質は石炭質である。而してその槍の先端には、時として二個乃至それ以上の齒が付いてゐる。この

齒は物を噛み切る目的ではなく、たゞ槍の保護の爲めである様に思はれる。常時には槍は恰も槍袋の如き肉のサックに包まれてゐる。^{ヒールツクス フルネリス}「Helix aspera」(水吹き蝸牛)といふ種類の蝸牛は、長さ約十六分の五吋に達する槍を有してゐる。此の槍のついてゐる位置及びそのサックを解剖しても、略想像せられるが、尙實驗上の結果これが性的行爲を行ふ前の準備器として用ひられてゐる事が明かになつた。即ち雄が雌の筋肉中に此の槍を挿入し、性的亢奮を咬るの用に用ひられてゐる。然し、此の附屬器は、餘程な完全な蝸牛の種類でなければ備はつてゐない。(L. H. cooke 氏「Cambridge Natural History」第三卷一四三頁『軟體動物』「Mollusca」参照)

蛸族の細心な求愛

ラコヴィツツア (Bacoviana) は、また次の様な事實を報告してゐる。或る種の蛸族にあつては、媚を求める作用が頗る細心の注意を以て行はれ、一般の人々が想像してゐるが如く、爾かく亂暴なものではない。牡は靜かに彼の第三の腕を正しく伸ばし、その腕の先を以て牝を抱く。そして次第にこれを牝の局部に持ち來り、遂にこれを挿入する。雌はこれを受け入れる際痙攣的に收縮する。けれども敢て動かうとはしない。斯くした儘、彼等は一時間乃至それ以上凝然としてゐる。この間に牡は其の腕を一つの吸管から他の吸管に移して

行く。次には、牡はその腕を引いてやゝ姑らくジツとしてゐるが、また直ぐに別の腕を以て同様の行爲を繰返す。(エー、ジェー、ラコヴィツツア氏 (E. G. Racovitz) 雑誌『自然科学』Natural Science 一八九四年十一月號轉載、『實驗動物學の記録』Archives de Zoologie Experimentale 1) 據る)

蜘蛛の求愛ダンス(その一)

動物に於ける求愛の最適例は、蜘蛛の場合に於て顯著に現はれてゐる。ベックハム氏 (Peckham) は *Saltis Paler* (蜘蛛の一種) に就て種々の研究をなし、その結果を次の様に報告してゐる。五月二十四日、吾々は十分に成育した一疋の牝を發見し、これを一つの大きな箱に入れ、翌日に至つて其の中に一疋の牡を投入した。投入された牡は、自分の近くに一尺二寸ばかり離れて、垂直に立つた儘ジツとして彼を見つめてゐる牝を見た。此の一瞥が牝を興奮させた見え、牡は直ぐに牝の方へ牽かれて行つた。そして牝から約四寸ばかり離れた所に立ち留まつてジツと牝を覗めた時、彼は牝の歎賞を博するに足る様な、如何にも敏捷な舞踊をはじめた。牝は、その舞踊を見落すまいと始終自分の位置を、適當な位置に變へながら熱心にそれを眺めてゐた。牡は、手肢を十分に伸ばしたまゝ、一側の手肢に軀

の重みを托して横に立上つた。次には軀の中心を失はない様に操縦しながらその支へた手肢を交々に伸べ屈めしつゝ、觸鬚を手肢の運動につれて種々の方向に振り動かした。斯くして牡は、約二寸ばかりの半圓形を描きながら舞踊をつゞけ、右に動きつゝあると思へば、直ちに手肢の位置を反對にして左に進み、次第に牝に近附いて行く。すると突然牝は牡の許に走り寄らうとするけれども牡は、その時前肢の一對を上や前に伸ばして、恰も牝の近寄るのを拒む様な素振りを示す。そこで已むなく牝は再びもとの位置に引き下がつてしまふ。すると牡は繰返しくゞと牝の一方から他方へと圓を描いて行く。その間牝はジツとした儘、優しい態度を以て惚れくゞとそれに見惚れてゐる。それは明かに牡の踊の巧なのに感じ入つてゐる様に見える。吾々は、斯くして此の熱心な牡が百十一回踊りながら半圓を描いたのを見た。

其の間に牡は段々と牝に近づき、恰ど牝の軀と相觸れるばかりの間隔しか置かなくなる。此の時には同時に牡の回轉は恰ど狂氣じみた程の早さとなり、牝もそれにつれて目の眩る程の速力を出して回轉する。數瞬にして、牡は再び後ろに退がつて、例の如く半圓形を描く運動をはじめめる。——自分の軀を卒直に立てなから。すると雌はすつかりこれに興奮を感じ、頭を下

け軀を高く持ち上げて恰ど倒か立の姿勢を取る。そして次には兩方から愈々接近し、牝は牡の軀の下に靜かにもぐり込む。すると牡は牝の頭の上つて、茲に性的行爲が成立する。

蜘蛛の求愛ダンスの(その二)

同じ著者はまた、デンドリフファシス エレガンス *Dendryphantus elegans* (蜘蛛の一種)

の求愛を描寫してゐる。雄は雌から三吋乃至五吋の所に留まつて、毛むじやらの第一肢を突き出し、それを風車の様に旋回せしめる。雌は熱心に雄の行爲を凝視してゐる。此の間雄は敢て牝に近づかうとはせず、常に適當の距離を保つてゐる。若し此の場合雌に近づかうとする時は、牝は雄に飛び蒐つてこれを退却せしめる。けれども、時としては大咀に牝に近づいて、牝を去る約一吋位の所に留まつて、前肢を前に伸ばした儘ジツとしてゐることがある。此の場合雄は他の種類の蜘蛛の様にそれを上下しない。また觸鬚も水平に保つて、その先を窄めたまゝ身構してゐる。すると牝は再び牡を追ひ拂ふ。斯うした行爲が幾回か繰返される。そのたびに雄は次第に亢奮して来る。そして今度は、五六吋雌から離れた所でグル／＼と軀を幾回も／＼も回轉させ、姑くのポーズを置いて雌の前まで走り寄り、肢を爪立てた儘其處に立ち上がる。其時雄の腹部はビク／＼と顫えるのが見える。次に其處で右へ左へと踊り出すのであるが、其の内

に雌は段々に大胆になつて、光澤を帯びた腹部を現はに雌の方に向けて、或は直立し、或は横に立ち上つて、敏活な踊をはじめめる。すると、雌も最中や雄に飛び蒐らうとはしなくなる。そして次第に後すざりをはじめめる。遂に牡は牝に愈々近いて来て、平蜘蛛の様にベツタリと軀を地に着け、それと共に手肢を延ばし、ピリ／＼とそれを顫はしてゐる。傍への雌はジツとした儘逃げようとしめない。すると次には、雄は靜かに前肢を延ばして雌の上に置く。雌は直ちに以前の如き抵抗の精神を惹き起し、雄を追ひ拂ふ。繰返しく／＼雄は雌の有める様にしては、雌の軀の上に自己の前肢を戴せようとする。遂には雌もこれに對し何等の抵抗をも示さなくなる。すると雌は雌の脊上に匂ひ上つて、こゝに交換が達せられる。(ジー・ダブルユー・ベックハム氏、雑誌「自然」"Nature"、一八九〇年八月號所載、「蜘蛛類の性的淘汰」Sexual Selection of Spiders」の一節より抜萃)

レーカーヨン氏の「とたてぐも」の求愛報告

今一つ別種の蜘蛛に、アゲレナ ラビリニチカ *Agelena labyrinthica*

(とたてぐも)と呼ばれる種類がある。これに就てレーカーヨン氏(Learlon)の研究が發表されてゐる。氏の報告によれば、雄は雌の張つた網の中に這入つて媚を求める。擴大鏡を用ひて詳か

にこれを観察するに、雄は雌の後を追ふて交尾を迫るが、その追求は頗る執拗であつて、雌の承認する迄數時間に涉つてその追迫をやめない。遂に雌は其處に立ち留つた儘動かなくなる。すると雄は近づいて雌を捉へ、これを横倒しにし、また時としては、これを網の中の適當な場所にまで引擦つて行き、而してそこにはじめて交尾が行はれる。その完結までには、普通二時間位を要するが、これが終ると雌は死んだ様になつてゐる雌を捉へて仰向けに寝返りをうたせる。そして第二の器官を雌の……に當て、新たな交尾がはじめられる。此の過程が完全に終ると共に、雄は雌を見捨て急に其の場を離れて適當な距離の所に至つて其處に留まる。此の間前後通じて四時間以上死んだ様に倒れてゐた雌は、急に立ち上つて雄の後を追ひ蒐ける。しかし、雌は極く僅かの距離しか追躡しない。ある一定の距離を保つた儘二疋は共に相對し、其處に何等の危険はない。(レカコーン氏(Lecailon)『科學雜誌』"Revue Scientifique" 一九〇六年九月號所載「蜘蛛の本能及心力」"Les Instincts et les Psychismes des Aranei-vees")

ロマネス氏 (Romanes) は、「動物の智慧」の中に、同蜘蛛族の雌は、交尾後雄を噛み殺して了ふと書いてゐるが、レカコーン氏はこれを否定して、根據のない説であるとしてゐる。けれ

ども、恚うした事は、昆虫類にあつてはまゝ行はれる現象である事は、フアーブル氏 (Fabre) が昆虫に就て種々の觀察を行つた次の報告の中にも、明かに見られる。

残忍な蠅螂(かまきり)の求愛

フアーブル氏は、^{マンチス} "Mantis religiosa" (蠅螂の一種) が、交

歡の際永い恍惚の状態にゐる事を叙説した中に恚う書いてゐる。はじめ雌はジツとしたまゝ頗る無關心な態度を取つてゐる。此の昆虫の雄は小さいが、雌は反對に非常に大きい。で、遂には雌は雌に近付いて行く。そして兩翅を擴げ、それをブルムと顛はす、姑くすると雄は、ジツとして動かない雌の背上に上つてジツと座はる。交接に至る迄の序幕は可なり永くかゝるが、交歡時の期間は更に長く、普通五六時間を要する。それが終ると同時に雌雄は別れ、其處を去つて行く。けれども、同日乃至その翌日には雌は雄を捉へて、それを食ひ盡して了ふ。雌は多數の雄に對し、それからそれへと交歡を許すが、何れもそれが終ると、喰ひ殺して了ふ。フアーブル氏は、雄がまだ雌の背上にある間に、それを噛み殺し、胴だけを残して頭や肢を食ひ盡したのを見たと書いてゐる。(J. H. Fabre. 『昆蟲學備忘錄』Souvenirs Entomologiques 第五卷 三〇七頁)

蝸(さそり)の求愛

フアーブル氏はまた、*Scorpio Oceanicus* (蝸の一種) に於ける性慾的状態を詳細に記述してゐるが、その序幕の段取りは、明るみで大びらに行はれるけれども、其後の交接行爲に至つては、暗い所に隠れて行はれる。此の種類にあつても、同じく交換後雌が矢張り雄を食ひ盡してしまふ。

輕氣球を誇示する蠅の求愛

Empis (蠅の一種) に屬する一種の昆蟲の雄は、大きな風船をこさへて雌を誘ふといふ事が發見せられた。此の風船は、長さ約七ミリメートル位の楕圓形——普通の蠅の長さの約二倍に相當する——であつて、大抵同じ大きさの小泡から成り、それが一枚の層をなす様に排列され、中空の風船をなしてゐる。これが陽の光に反射する時には、キラ／＼と光つて非常に奇麗である。此の泡は粘り氣を多分に含んでゐて、大抵の場合風船の先端には、一匹の小さい蠅が押しつけられたまゝ粘着してゐる。それは恐らく此の昆蟲の餌に違ひない。風船は、この昆蟲が中空を飛翔してゐる際に出來る様に思はれる。最も高く中空を飛ぶものだけ、その風船は一層小さい。風船を組成してゐる泡は、肛門の組織の變形して出來たものゝ様に思はれるが、これには、生捕りにした蠅を動機にして分泌せられるらしい。その

證據には、蠅だけは攫まへられてゐるけれども、風船がまだ出來てゐない場合があるのを見ても解る。多數の雄が道の上を、高く上下に翔び違つてゐると、傍への咲きほこつた、櫻の花の間から、一疋の雌が出て來て雄の群に近づく。すると雄の群は直ち雌の前に集つて盛んに飛び違ふ。雌は姑く躊躇した後その群の中に於て、最も大きい風船を所有する雄を擇んでその背の上に乗る。交換をはじめの前には、その一對は地上に下り、靜かな場所を選んで、水平になつた草の葉の上に前肢をもつて軽くとまる。すると雌は雄の軀を抱いたまゝ、恰好な姿勢をとつて自らの頭を下けて葉の上に乗せる。さうして交換が終る迄ジツとその姿勢を保つてゐる。その間、雄は恰も手品術が玉を廻す様に、種々の位置に風船を回轉させる。交換が終つて雄と雌とが分離する際には、その風船は地に委せられる。すると貪慾な蟻がそれを運んで行く。風船の美しさは形容の詞が見出せない程である。『アメリカ自然主義者』*American Naturalist* 一八九九年十月號所載、アルドリツク氏及びターレー氏「氣球をつくる蠅」*Aldrick and Turley A Bollon-smoking Fly*)

蝶蛾類の求愛現象

「蛾の多くの種類に於ては、雄は孵化した雌の周圍に翹集する。けれ

ども一番先登に到着した雄が必ずしも捷利を得るとは言へない。此の場合到着の遅速といふ事には、何等の關係がないからである。雌はジツと其の場所にとまつてゐる。それを集ひ來つた多数の雄が取り捲いて數分間ブンと飛びめぐる。われ／＼の眼から見れば雌から何等の合圖があつたとも思はれないのに拘はらず、その集群の中から一疋の雄が下りて來てその雌と結合する。これを合圖に他の凡ての雄は其處から飛び去つて了ふ。此の場合、雄の仲間は、如何なる形式に於ても鬭争や競争をしない。それ故、この行動は、吾々觀察者をして、どうして特別の雄が決定されたか、何故當初第一に到着した雄と結合しないで、さうした變な過程を経た後、始めて結合するのか、恰ど解釋に若しませる。けれどもこれは、最初に接近したといふ事のために決定される問題ではない。雌は集群をなして飛び交ふ時に、時々そのバダ／＼する兩翅を以て雌に觸れるのを見る。これは、角のある蛾で *Claneis graminis* と言はれる種類に見られる所であるがこれとおなじ現象は兜虫に於ても見られる。(E. B. Poulton. 『諸動物の色彩』 *The Colors of Animals* 一八九〇年出版三九一頁) 尙同著者は、或る種の蝶類にあつては、雌の方から積極的行動をとることがあるといふ事を指摘してゐる。上述の蛾の例の如きは、性的陶

汰説の理論を以て説明し難い様に見えるが、斯く陶汰説を以て説明に困難な現象も、求愛に對しチューメツセンスが大關係を有する事を理解したならば、此の方面から容易に解決せられ得る問題である。

亞爾然丁の燕雀類の求愛

ハドソン氏 (Hudson) は、亞爾然丁の燕雀類に就て、次の様に言つてゐる。『その雄鳥の歌、——特に求愛の時の歌は、恰も家鳩のそれの如く、身振り素振りの動作と共に歌はれる。彼は自分の軀を顛はせ、兩翼を以て地を撃ちながら、喉の奥から來る様な聲を發し、次には高い明瞭な叫び聲を發して歌ふ。そして、斯うして高らかな聲を出してゐる最中に、突然五十碼位の高さに飛翔し、歌ひ乍ら雌の頭上をめぐつて旋回する。相手の雌は、雄の斯かる奇麗な藝を見せられながら、全然無頓着である様に見へる。然し、その實此の鳥は非常に多情であつて、一年の内、四ヶ月位は全く無駄な卵を生む事さへもある』と。

(Hudson 『亞爾然丁の禽鳥學』 *Argonthe Ornithology* 第一卷一四八頁)

ポリヴィアの燕雀類

ハドソン氏は、またポリヴィアの燕雀類 (*Pitangus Iolivianus*) に就て恚う言つてゐる。『此の鳥は、假令雌と雄とが如何に愛し合つてゐても、ともに連れ立つて

野に食を求めし事をしない。たゞ日の中に時々會ふだけで、始終離れ／＼に暮してゐる。彼等には、互に出逢ふべき一定の場所が定められてゐる。で、例へば雌がその木の上に先に歸つて雄の歸りを待つてゐる。しかし雄の歸りが遅くなつて、それが俟ち切れなくなると、非常に長い、明瞭な呼び聲を立て、雄の歸りを促す。其時、恐らく十町も距つた池の端に、蛙の現はれて來るのを看まもつてゐるとか、或は草叢の中を跳飛び歩いてゐるであらう雄は、その呼び聲を聞きつけて、直ちにこれに應じて同じく明瞭な高い聲を張り上げてこれに答へる。半分間置き位に斯うした呼び交はしが交換され、それが約半時間ばかり續く。勿論その間雄は餌を捜さうともしない。最後に雄は雌の許に歸つて行く。そして雌は其の黄色い胸と胸とを喰ひ着ける程に接近して同じ梢の上にとまる。鳥冠を眞直ぐに立て、翼を以て無暗に止り木を撃ちながら、一緒になつて非常に高い聲を張り上げて叫ぶ。其の聲は、遠く／＼邊り一面に響く程の喜びの聲である。——恐らく、それは待ち切れぬ程に待ち侘びてゐた會合を樂しむ悦びであつて、恰も人間に於ける相愛の夫婦の暖かい抱擁に比すべきものであらう。』(ハドソン氏「亞爾然丁の禽鳥學」Argentine Ornithology 第一卷、一四八頁)

Leistes Superciliaris (赤胸駒鳥)の求愛

赤い胸毛をもつた一種の沼鳥で Leiste

Sudamericus といふ鳥がある。此の鳥についてハドソン氏はまた恠う書いてゐる。『この鳥は候鳥であつて、十月のはじめには、亞爾然丁東部の到る所の野山に見られる來るときには、雌雄各々單獨である。彼等は各自野とか、或は雜草や牧草に圍まれた空地の適當な位置を選んで棲所を定める。彼等は好んで繁つた叢中や、灌木の梢にとまる。雄の赤い胸毛が、燃える様に輝いて、遠くから見ると、草叢の中に眞紅の花が咲いてゐる様に見える。雄は、二三分置きに二十碼乃至二十五碼の高さを水平に翔んで行く。そして飛びながら歌を詠うた。その聲は、簡單ではあるが、力強い而かも音樂的諧調をもつた歌である。歌ひ終ると、如何にも見て呉れよがしに翅をバタ／＼とふるはせながら、空中を旋回する。そして一疋の雌もそれを見て呉れてゐないのを知ると、荒つほい喉音を發しながら、如何にも落膽した様に叢に下りて行く。けれども、姿こそ見せね實はその附近の叢の中に隠れて雌鳥がジツとその様子を覗めてゐるのである。然し、遂には雄の美しい胸や、快よい音樂的諧調を帯びた歌に靈感され、時々現はに軀を現はして見せる。そして次には雌自ら野の上をツツグザツグにあちらこちらと素早く飛び廻り

ながら、臆て再び叢の中に下りて行く。はじめ雌が草の中から中空に跳び上らうとする刹那から、雄は直ちにこれを追跡しはじめ。そしてともく何れへか姿を消して丁ふ。(ハドソン氏著『亞爾然丁の禽鳥學』Arctic Ornithology 第一卷・一〇〇頁)

眞鴨の癖態

眞鴨 (Mallard) の求愛も、普通は三四羽の雄が一羽の雌の歎心を得ようと争ふが、しかし、時としては雌雄が互に媚を呈し合ふ事がある。此れに就てゼイ・エッチ・ミラー氏 (J. H. Millars) は、次の様な観察を發表してゐる。(ミラー氏『英國鴨の博物學』Natural History of British Ducks 六頁)「雄は一羽の雌を取り巻いてなれば無意識的にその周りを遊ぎ廻る、彼等は時々一齋に遊ぎを止めてジツと雌を睨めて、或は頷き、或は頭を下げ、或は首を延ばし、如何にも雌の好意ある應酬を希つてゐる様な素振りをする。最も面白いのは、凡ての雄が一齋に水上に立ち止ると同時に嘴を胸の中に突込んだまゝ低い單音の變な呻り聲を發する。しかし、或る場合には雄の求愛は、積極的といふよりも寧ろ消極的である事がある。それは、雌から愛を求められた雄がそれを如何にも當然の如く受容れたまゝ、恰も自覺的に大なる矜持を感じてゐるかの如く、高く頭を擡げて揚々たる態度を示す。時としては、三四羽の雌が一

羽の雄を取り巻いてその周りを遊ぎ廻る。そして一齋に騒々しい聲を出しながら引き切りなしに嘴を右左と水中に突込む。その時雄は甚だ得意満面の如く見れる。彼は雌のそれ等の行爲の凡てが、何を意味するかをよく知つてゐるかの如く、以前よりも一層勿體振つた態度を取る。然し、雄は畢竟讓歩しなければならぬ魅力に索かれる。雌の中の一羽は、最後の懇として羞しげに水中に體を沈め、たゞ脊と頭と首とが見える位に深く潜る。それは如何にも蠱惑的であつて、雄をして最後まで容體振つた態度を持ち續ける事を不可能たらしめる程である。」

演戲場をつくる蛇目雉

非常に美しい羽毛をもつてゐる Argus Pheasant (蛇目雉或は馬來雉) の求愛に就ては、エッチ・オー・フォールベス (H. O. Forbes) が、スマトラで觀察した實驗を報告してゐる。此の鳥の求愛には、直徑十フィート乃至二十フィートの大圓を描くのが習慣となつてゐる。その圓輪の下の地上は、一葉の木も、一本の小枝も無い様に奇麗に掃除せられてゐる。而して、その縁には、必ず地上から五六呎抽出した切株乃至アーチ形に曲がつた根株がある。雌はその上にとまつて、雄がその演戲場の中で雌を楽しませる爲めに種々の藝を演ずるのを見物してゐる。(H. O. 『博物學者の逍遙』A naturalists Wanderings 一八八五年出

版・一二二頁参照)

駝鳥の「施回ダンス」

凡ての駝鳥は、雌も親鳥もともに、俗に「駝鳥のワルツ」と謂はれてゐる所の踊ダンスをやる奇習をもつてゐる。はじめ五六百碼の所までも驅け出して、其處でヒツタリと留まる。停まると共に兩の翅を立て、姑くの間迅速に廻つてくつて廻り抜く。全く。眼が眩んでしまふまで廻り抜く。時には脚が折れて了ふ様な場合さへもある。……………意地の悪い雄鳥になると、戦を挑む時とか、雌の愛を求んとする時とかには、所謂「回轉」といふ事をやる。媚を呈する時には回轉が終ると急に擴けた兩の翅を以て膝を搏ち次には拍子を取りながら翅を前後に互ひ違ひに動かす。……………旋回運動をやつてゐる時には、兩翼は大きく開かれて扇の様になり、全身の羽毛が一本宛總立ちになる。此の時ばかりは、彼は他の何事にも全く気がつかない程に夢中になつて、人がその脇に近寄つたのも知らないでゐる。回轉ダンスをやる前には、まゝ爪先立ちにしづくと歩き出す事がある。その時には首を眞直ぐに立て、尾を半ば垂れ、兩の翼が天蓋の様カネに首を蔽ふ程に前に擴け、總身の羽毛を綿ワタの様ワタにボヤムと逆立て、張つた恰好をする。』(S. C. Crowright Scheiner, zoologist 一八九七年三月號所載「駝

鳥」The Ostrich)

第四章 人類に於ける求愛

—性と藝術的表現—

濠州原始の種族の舞踊と求愛——月夜の平和祭と舞踊——濠州土人の性的舞踊——濠州土人のお伽噺——舞踊的熟練と求愛——戦捷の舞踊——ワニンゲラ種族の「ウガウガ・ガウナ」——馬來土人の結婚の夜の舞踊——スマトラ土人の貞操觀念と結婚風習——モラツカ土人のマクウ踊——ニュー・ヘブライデー土人の原始的舞踊——中央印度高原種族の樹踊と樹靈との交通——南太平洋火山列島住民の結婚風習——ポリネシア土人のフラック踊——舞踊の起原と性的衝動——原始的土人の舞踊と歌詞——ニューメキシコ土人の求愛風習——結婚儀式と求愛——ミンネタリ種族の求愛象徴——カツファ種族の性的舞踊——カツファ種族の割禮式——ズール種族の性的風習と女子成年式の舞踊——セネガル土人の性的摸倣ダンス——ビエール・ロチの「アルゼリアの一騎士の話」——ギューラス種族の葬式に伴ふ舞踊——タベタ土人の奇異なる結婚儀式の舞踊——フェーロー島土人の擬似的舞踊——シン

リー島人の慣習と成年式の試練——性的誇示と求愛——性的行爲の豫備としての求愛——チユーメツセンスと舞踊との關係——舞踊の麻酔的效果——舞踊の刺戟的效果——舞踊と宗教——舞踊と求婚との關係——舞踊と戀愛の満足——戀愛生活の縮圖としての舞踊——性的無言劇——運動の傍觀もチエメツセン惹起の効果を有す——フェレー氏の實驗——グロース氏の説

上來述べて來た幾多の例によつて見ても明かな通り、求愛の現象は動物界に於て治く發達しており、またその研究も十分行き届いてゐる。勿論鳥類と人類との間には大なる徑庭がある譯であるが、それにしても前にも説いた如く原始人類間に行はれる求愛と、鳥類の間に行はれる現象との間には、可なり著しい類似點が見出される。不幸にも人類的方面の研究は未だ十分に報告されてゐない。

濠州原始の種族の舞踊と求愛

濠州に於ては舞踊が非常に丹念な方法を以て行はれてゐる。舞踊と性的衝動とが非常に密接の關係をもつてゐるものである事は紛れもない事實である。サミュエル・ゲーゾン氏 (Samuel Gaosn) は濠州に於ける黒人の生活を知り、その風俗習慣

に通じてゐる點に於て及ぶものがないと言はれる程に有名な人であるが、氏は、濠州のダイイーリー種族 (Diyurie tribe) の舞踊に就て次の様に述べてゐる。

「此の踊は、成人した男女のみがやるのであつて、それには一定の規則があり、順序も決まつてゐる。踊の列の脇には、囃子が居て、それが二個のブーメング (Boomenang) (譯者註—濠州土人の武器である。) をかたく敲いて調子をとる。それにつれて男女は彼等の股間で手を拍ちながら踊る。踊が終つた後、男女混淆して………が行はれる。この場合、嫉妬は絶対に禁ぜられてゐる。其の外モビエリーといふ收穫を祝する祭がある。その祭の前には、幾週間も前からその祭に踊る踊りの準備をする。そして、その間は絶対に喧嘩をする事が禁ぜられてゐる。愈々祭の儀式の際には、男女混淆の………が行はれる。」と。斯うした祭の時に、嫉妬が嚴禁せられてゐるといふ事實は、明かに性的行爲が此の儀式に本質的の一要素であるといふ事、及びそれが一般に承認されてゐるといふ事を證明するものである。尙その事は、他の祭の場合にはさうしたおつびらな行爲が許されてゐないので解かる。

月夜の平和祭と舞踊

ミンダー (Mindari) と唱へられてゐる平和祭の折には、各部落の

土人が集まつて来る。此の祭は満月の夜に行はれ徹宵の騒がつゞけられる。土人は此の祭に近づくとつれて、大騒ぎをして悦ぶ。祭の當夜には、男は彼等の、からとつた血で彩つた綿花乃至翅毛等を軀につけ、美術的に意匠を凝した裝飾をする、また繪具を以て奇麗に全身を彩るそして踊につれて音のするやうに小枝をとつて足首に括り付ける。此の祭の夜にも男女のブロミシヤスな行爲が盛んに行はれる。けれども、それは公然と許されたものでなく秘密に行はれるのであつて、勢ひ到る所で喧嘩が惹起される。(「人類學協會雜誌」二十四號 Journal of the

Anthropological Institute 一八九四年十一月刊行、一七四頁)

濠州土人の性的舞踊

濠州人の舞踊は、男女混淆の踊が多いが、しかし時としては男は男連れ女は女連れと別々に踊る事もある。エーア氏 (E. A. H.) は、その内の一つに就て次の様に書いてゐる。「此の踊は、女の方が主となつた踊である。女達は、繪具で白い條を軀に描き、頭には鸚鵡の翅をつけ、てんでに大きなステッキを持つて正面に居並ぶ。すると、男達は槍を携へて女の列の後に一列を作つて並ぶ、斯くして一齊に踊がはじめられる。踊の間に於ても男女は混淆する様な事はない。兩性の組は別々になつて踊る。此の場合、まゝ非常に奇異な踊りが女

達によつて演ぜられる事がある。それには、先づ女達は両手を頭上にさし上げて、頭の上でそれを組む。それと同時に兩足を揃へて固く密着させ、膝と膝とを合せて真直ぐに立つ。斯うして用意が整ふと、彼等は足と手とを其儘にしたなり、膝を折つて左右へ開く。開くと共にそれを急に元の位置に引き戻す。この時兩股が烈しくぶつ衝かつて大きな音を立てる。恚うした運動を繰返し／＼反復する。この奇異な踊は普通は、若い娘が一人でやつて遊ぶ事もあればまた大勢でやる時もある。偶には、男の踊子が踊つてゐる時、彼等の情を咬るために、一人の女がその列の正面に現はれて演ずる事もある。(E. J. Eyre 『中部濠太利檢險旅行記』 Journals of Expeditions into Central Australia 第二卷二三三五頁)

濠州土人のお伽噺

濠州の家庭に行はれてゐるお伽噺の一つに、男嫌ひで、また男に媚を呈せられることも避けてゐた翼を有つた二人の姉妹の話があるが、その物語によつて見ても、濠州人の間に於てさへ——濠州土人とし言へば男女の求愛が酷く野蠻的で粗野であるとい般に想像されてゐるが——矢張り男性の美貌や、魅力や、求愛が女を誘ふ力をもつてゐるといふ事を、明かに自覺してゐる事が知られる。その物語りといふのは恚うである。

ウナハナー (Unahamach) といふ男がこの姉妹に戀し、二人が河に浴をしてゐる所へコソツリと忍び寄つて、そのかたへの高い樹に攀じ登り、それとなく、二人の眼に惹く様な素振りをする姉妹は男に氣付いてはじめは酷く驚くが、しかし、この闖入者を見て自分達の心を慰める丈けならば、何も差支はないと考へる。『所が、その男は年も若く、また、非常に立派な體格をもち、力は飽迄強く、濠州産の最強の鴛鳥にも負けない様な臂力と豪勇と、屈強のカンガルにさへ抵抗する事の出来る様な臂力とをもつてゐる、動物を追つ蒐ける事に於ては、國中儔ひない手練をもつてゐるといふ深かい自信が、その容貌態度に現はれて、自ら一種の威嚴を具へ一眼見ても二人の女の恐怖心を和けるに十分な力を有してゐた。柔かい黒い睫毛に縁取られ圓らに輝く瞳が、ジツト優しく娘を見おろしてゐる。彼の豊かな漆黒の髪の毛は、美しい額に垂れ、顔には鴛鳥の脂が奇麗に塗られて、美しく陽に輝いてゐる。』遂に彼は、姉妹が彼から話かけられる事を好む様に娘の心を奪ひながら、自分を夫と呼ばせるまでにしてしまふ。そして、二人の姉妹には何等の恐れも感じないで、その男とともに其の場を飛び去つて了ふといふが、此の物語の筋である。(『人類學協會雜誌』 Journal of the Anthropological Institute 第一卷一八九八

年、三三頁、ダブルユー・ダンロップ氏編著『濠太利童話集』 W. Dunlop, Australian Folklore (Stories)

舞踊的熟練と求愛

トレス海峡 (Torres Straits) 譯者註——濠太利とバブアとを分ち、太平洋とアラフラ海とを分つ海峡である。木曜島がその
あに) 土人の事に就ては、ハッドン氏 (Haddon) が次の様に報告してゐる。(同氏「トレス海峡への人類學的探検報告」 Reports Anthropological Expedition to Torres Straits 第五卷二二二頁) 『普通若い娘が若い男に迷ふのは、カップ (Kap) といふ踊り行はれる季節に於てである。この時には、踊りに巧な若い男は、若い娘の氣を牽くに十分である様に見える。この事は、若い男達の熟練な活潑な、而かも手の込んだ骨の折れる踊りを巧妙に踊り抜く踊り男の踊を見た人は、誰しも異論のない所であると思ふ。斯うしたダンスに於て巧に踊り抜く男は、何れも體力のすぐれた、強健な且つ頗る敏捷な男子であつて、何處にも異性を惹き付ける力を十分に備へた男である。その上、彼等はその部落々々の風習に従つて、見物人の眼にとまる様な種々の裝飾をしてゐる。其時マビユイエー (Mabuiag) の酋長は、恠う言つた。「英國では、娘は金を澤山持つてゐる男の所へは、お嫁に行きたがるといふ事であるが、然し此の土地では、娘は一番踊りの巧な男と結婚

したがつてゐる」と。

戦捷の舞踊

此處には、昔は戦捷の舞踊といふものがあつた。それは他部落と戦つて勝利を得た時に行はれるダンスであつて、非常に盛大に行はれた。年頃の娘が若い男に心を動かすのは、主としてこの祭の時であつた。殊にその若者が敵の首級でも取つたといふと、若い娘にヤンヤと耽美される」と。

ワニンゲラ種族の「愛の招待」

また、ワニンゲラ河口 (Wanigela River) に住んでゐる種族にあつては、『年若い男が娘を慕ふ時には、決してその娘と逢はうとはしない。話は勿論見ようともしないのである。けれども、彼等は、その代り娘の注意を牽くために、體力的遊戯とか、運動とか、驅けつことか、敵を追撃する真似などをして、彼自らの愛情を表白する。若し此の場合、娘が男の愛に應じた場合には、娘は自己の知己である娘に頼んで *wanigela* *sauna* を男に贈る。その意味は「愛の招待」といふ意味であつて、檳榔樹の實の外殻に種々の意匠を彫り付け、自分の愛を表明する意味としてこれを用ひる。夜の幕が閉じると、少年は、愛人の待つてゐる指定の場所へと出蒐けて行く。其處に二人は出来るだけ側近くくつき合つて、その檳

椰樹の實を頰ち合つて食べる。これが即ち婚約成立のしるしである。この種類に行はれる求愛は實にエキゾチックである。其後少年は娘の家に自由に寝泊りに行くのが許される。そして結婚は大抵一年中の最も重大なお祭——その祭は非常に盛大であつて、その準備は三ヶ月も前から行はれる——の時に擧げられる事となつてゐる。此の重大な祭は、カバ (Kapa) と呼ばれてゐる祭であつて、其の祭には未婚の少女が踊ることゝなつてゐる。祭には澤山のバナ、が用意される。未婚の少女が、何れも身體の前面一帯に入墨されるのは此の祭の時である。特に身體の下半部には入念に入墨が施される。娘の入墨が拙劣である場合には、男子の愛を買ふ事が不十分であると謂はれてゐる。結婚した婦人、寡婦乃至離婚された婦人は、その仲間に這入つて踊る事を禁じられてゐる。若しそれにも拘はらず、仲間に這入つて踊りでもするならば、みな指彈を受け、物笑ひの種となる。〔人類學協會雜誌〕Journal of the Anthropological Institute 第一卷一八九九年出版、二〇九頁所載「ワニンゲラ河口の種族に就て」F. E. Guise On the Tribes of the Wanigula River)

馬來土人の結婚の夜の舞踊

マレー群島のネイアース島 (Nias 譯者註——スマトラの西) に位する和蘭領の一島嶼)

の土人に關する風習に就ては、モデイリアニー氏 (Modigliani) が、宣教師サダーマン (Sudermann) 氏の典據ある報告を基礎として、次の様に述べてゐる。『婚禮の席に於ては、舞踊と歌とか日ねもす續けられる。二三人の女が、聲となる人の前に出て一齊に奇異なダンスをはじめ。その踊は、脇腹と胸の筋肉との曲線的運動を見せる踊である。この種の踊の中、最も優美な踊と言はれてゐる踊は、脇腹を波立つ様にうねらせ、手にしたサロング (Salong) ——スカートの一種——を以て、顔と胸とに翳しては取り、翳してはとる踊である。この爲めに、脚の姿勢が頗る不恰好とならざるを得ないが、さうした事は顧みられない様に脇腹の起伏が賞美されてゐる。このダンスの行はれる場合には、囃子は打ち揃ふて少しお道化た歌をうたふ。このダンスは、はたから見て餘り見いゝ踊とは言へないが、しかし、土人の眼からすれば十分の喝采に値するものと見えて、囃子は一齊に次の様な意味の歌をうたひ出す。『鳥の飛ぶよな美しい踊・鷹の舞ふよな美しい手振り、見る眼も綾に美しや』と。このダンスは、結婚の席の外お祭の際にも行はれる。(エリオ・モデリアニー Elio Modigliani 『ネアース旅行』Un Viaggio a Nias 一八九〇年出版、五四九頁)

スマトラ土人の貞操観念と結婚風習

スマトラの風習に關しては、ウキリアム・マー

ズデン氏 (William Marsden)

譯者註——英の東洋學者、古錢學者、一七五四—一八三六

恚う書いてゐる。此の島の夫にあつて

は、他の何れの土人よりも貞操観念が最も重ぜられてゐる様である。結婚前に男女の求愛といふ事は、極めて冗である。それは彼等の習慣がこれを允さないからである。男女何れたるを問はず、年頃に至れば注意深くお互に引き離されてゐる。殊に年頃の娘にあつては、母親の監視を離れて外出するといふ様な事は絶対に許されてゐない。……………若い男女同志がお互に顔を合せたり、話をしたりする唯一の機會は、たゞバーンバングス (Barnabas) といふお祝の時だけである。此の祝の日には、男女が入り亂れて踊つたり、歌つたりする。若しその場合自分の氣に入つた娘があつた場合には、仲介人として普通年とつた婦人を介して、贈物を送り娘の意向をたゞして貰ふ。愈々それが成立した場合には、はじめて兩親立會の上結婚の日取りが定められ、こゝにバーンバングスがはじまるのである。若い娘の一族は大廣間 (Baini—土語) の上手寄りに進んで行く。そこには幕が垂れ下がつてゐて、外から見えない様にされ、娘達は宴會のはじまる迄は、減多に姿を見せない。宴會の席上では、鬮鷄其他男女に適した種々の催

があり、第二回、三回と種々の御馳走が出され、夜に入ると共に、再び種々の催が行はれる。夜の催は、ダンスがその主なるものであるが、それは一人で踊る場合もあり、又二人一組となつて踊る場合もあり、或は男女凡てが混淆して踊り廻る場合もある。それ等の舞踊はその運動、振りが概して甚だ緩慢であり、また時としては甚しく淫らな種類のダンスが演ぜられる事になる。彼等はみな扇をもつてゐるが、踊の最中時々軀を前かゞみにし、手にした扇を鎖し、拍子につれて、てんでの腕を酷く撃つ。……………この集りは夜明け迄続けられ、時としては數日に涉つて続けられる。若い男は妻を物色の爲めに、そして娘の方もその意向を以て出席する。娘は手づから織つた絹の晴衣を着飾り、針金細工の髪飾りをつけ、腕や足には銀の輪を嵌め、一種特異な形の耳輪をつける。頭髮は種々の美しい花で裝飾し、安息香油を馥郁として匂はせる。偶には麝香も用ひられるが、それは主として男子によつて用ひられる。皮膚は、軟かに滑らかにする爲めにブープラー (Popon) と呼ばれる白色のコスメチック (それは、白米の粉に薑、玉蜀黍、白檀油、マッシュ (穀類の粉を水、牛乳等にてドロくに煮つめたる液) とを煉り合したものである) を塗る。(マーズデン氏「スマトラの歴史」W. Marsden, History of Sumatra 一七八三年、一三〇頁)

モラツカ土人の奇習とマクウ踊

モラツカ群島中のセラム (Seram) に住するアルフユ

ーラス族 (Alifans) は、未だ外國の影響を受けてゐない種族であつて、音楽と踊りに特殊の趣味を有してゐる。この種族には、マクウダンス (Maku Dance) といふ舞踊がある。此のダンスに就て、ヨエースト氏 (Joest) は恠う書いてゐる。——『此の舞踊は夜間の踊であるが、乾いた竹筒と樹脂とで大仕掛な松火を澤山にしつらへる。それがあたりの巨木を照し、少し離れた處女林の中の彼等の草葺の小屋までが見られる。篝火の側には虐殺した人の骸骨が飾られてゐる。女達は火の前に屈まつて、銅鑼や太鼓を喧ましく打ちつゞける。娘達は、眞珠や香りの高い草花で身を飾り、踊の始まるのを待つてゐる。次には、若い一隊が武器に身を堅めて現はれる。然し、彼等は何等武器を携へてはゐない。その帯には敵の首級を取つた数だけの彫刻が刻まれてゐる。(アルフユーラス種族にあつては、殺した人の骸骨を最も多く所有してゐる男が、妻を求め事にて最上の機會と勝利とを得る) 彼等は、互に手と手を繋ぎ合はせて輪をつくる。しかし、その輪の一端は、僅かの距離を保つて開かれてゐる。歌がはじまるとともに、この人間の輪がノロノロと宛る。恰も宛りノロノロと行く蛇の様に——。そのたびに、輪の一端の口は

開いたり閉ぢたりする。次第に足どりが急になると、それにつれ歌も太鼓も高く響き出す。その時、娘達はバラノと輪の中に這入つて行つて、目をつぶつたまゝ豫め見定めて置いた若者の帯を手探りで掴まへる。若者達は、てんでに攫まつて來た娘達の尻と首とをとつて抱き上げる。輪は段々と長く、踊も歌も太鼓も一層激しくなる。踊子は悉かり疲れ果て、そして森の暗闇に消えて行く。(ヱイ・ヨエースト 『世界旅行』 W. Joest Welt-Fahrt 一八九五年出版、第二卷 一五九頁)

ニューヘブライデー土人の原始的舞踊

ニュー・ヘブライデーズ (New Hebrides)

譯者註——フイッー群島の西の婦人のダンスは、踊といふよりも寧ろ男子がこさへた輪の中で、遊び廻ると言つた方がいゝかも知れない。それ程彼等の踊は原始的である。けれども、其處で男女が直接……ふのではない。女達は男子の方に……示し、……素振りをする。すると男子達は、一方の手を以て……の振事をする。時としては、男子側の子踊が踊の列の中で……を行ふ。その高い喚きと呼び聲とが、響へるが如き踊の歌に入り亂れて起ると謂はれてゐる。(一佛蘭西軍醫者『人類學上人跡未踏の地』一八

九八年刊、第二卷、三四一頁 *Untrodden Fields of Anthropology* 1898 vol. II, pp. 341)

中央印度高原種族の樹踊と樹靈との交通

中央印度山岳地方に住む高原種族の間に

は、植物の中に潜む受胎、生殖の精と交流しようとする願をもつてゐる様に思はれる踊がある。例へば、其處に行はれる樹踊 (Tree-dance) の如きがその一つである。此の踊は、穀物の植付乃至收穫と關係した季節ばかりでなく、また結婚及びサツルヌスの祭(譯者註——例年行はれる一種の禮講)の季節に行はれるからである。(人類學協會雜誌) 第一卷 *Journal of the Anthropological Institute* クックス『高原種族』一八九九年刊、二四三頁、W. Cooke, *The Hill tribes* 1899. pp. 243) 舞踊と生殖乃至性慾的季節に行はれる種々の祭とを關聯して考察する事は、私か本書第一卷に、週期的律的現象の章下で論じた問題から考へて見ても、確かに深かい意義ある問題である。

タヒチ島土人の性的慣習

タヒチ島(譯者註——南太平洋中のソサヘテイ群島中の一)の住民は、はじめて歐羅巴人が發見した當時に於ては、性的方面に於て非常な發達があり、且つ甚しく淫蕩の風が漲つてゐる様に歐州人の眼に映つたのであつた。クック(譯者註——イギリスの有名なる航海家一七二八—一七七九)がはじめて

タヒチ島を訪ふた時に於てさへ、彼等土人間に舞踊と求愛との間に密接な原始的關係のある事の證據か歴然として残つてゐたと謂はれてゐる。クックは、これに就て次の様に書いてゐる。

『私はチモロデー (Timorée) といふ踊を見た。それは、若い男女の八人乃至十人が集まれば、

何時でも行はれる種類の踊である。此の踊は、非常に淫らな態度及び振事で出来てゐる。これは、極く幼ない子供の時から稽古させられるものであるが、踊に伴ふ歌詞も非常に猥褻なものである。それ故、娘の子がその振事なり、歌の詞なりの意味を諒解し得る年頃になれば、さうした踊はしてはならないものとされてゐる』と。然し、クックは更に附言して、此の部族中アレオイ族といふ特別な階級間だけには、この制限法は守られてゐない。彼等は……前にその豫備行爲として此の踊を踊るのが常であると言つてゐる。(ホークスウオース「航海記」一七七五年刊、第二卷五七頁、Hawkesworth, An Account of the Voyage 1775 vol II pp. 57)

南太平洋火山列島住民の結婚慣習

マルケーサンス(譯者註——一八四二年以來佛蘭西の保護下にある

南太平洋中の火山群島の住民)の間には、結婚の席上では、如何に身分の高い花嫁でも、新夫の膝を枕として横になつてゐる。其處へ男の來客の凡てが一行をなして進み來り、歌ひ且つ踊る。そして順次に新婦と……のである。それには身分の低いものが先に行ひ、順次酋長の如き身分の高い

ものに至る。此の場合、客の数が多き時には、新婦は疲憊の極に達し、数日の間床を離れる事が出来ない。

ポリネシア土人のフラク踊

これに關聯して最も興味ある點は、こゝにも歌と舞踊

とが性的行爲の豫備行爲として認められてゐる點である。ポリネシア人

(譯者註——濠太利バア島の殆ど全部を含む及びフィリッピン群

島の殆ど全部を含む)が、初めて歐羅巴人に發見せられた時には、性的現象は原始的狀態から適かに進歩し、且つ舞踊に於ても著しい進歩が認められた。ポリネシア土人の舞踊には、所謂フラ

ク踊 (hula-hula dance) と稱せられる踊がある。この踊の發生當時は、極めて多分に原始的要素を含んだものであつたのは疑ないこの事であるが、今日では非常に發達し、最早原始的舞踊

と言ふよりも、寧ろ文化的舞踊と言はるべきものとなつてゐる。何となれば、此の踊は既に實

際生活の直接目的から離れて、全くの美術娛樂の對象となつてゐるからである。(トータン氏

『ポリネシア人の結婚研究』Tautain, Etude sur le Mariage chez les Polynesiens 「人類學雜誌」一

八九五年、刊六四二頁、L Anthropologie 1895 pp 642)

舞踊の起原と性的衝動

中央亞弗利加に住むアジムバ (Azimba) といふ種族に於て行はれ

てゐる娘達の舞踊は、まだ實際生活の要求と直接關係を有した性的無言舞踊であるが、北亞弗利加のハミチック族 (Hamitic) に行はれてゐる舞踊は、多少性的本能に基づく所はあるが、しかし、怡樂乃至娛樂の爲めの舞踊であると言ひ得る。けれども、われわれは原始的舞踊と、開化した文明的舞踊との間には、何等嚴格な區別がないと言ふ事を知る必要がある。舞踊の研究に於て、種々價值ある立派な研究をしてゐるハットン氏の著「首狩り」Head Hunters にも言つてゐる如く、舞踊の起原と發達とを闡明する事は、野蠻人の舞踊に就てさへも困難する事業だからである。ハットン氏は、これに就て恚う言つてゐる。「トールレス海峡の土人に就て見ても、其處には原始的な一種の遊戯乃至季節的の舞踊があるが、しかし、それさへも娛樂といふ事が主となつてゐて、その外に何等の目的も認められない様に思はれる」と。吾々にして、若し舞踊なるものは、人類が人間としし發達する前既に相當の發達を遂げてゐたといふ事を考へたならば、その起原乃至發達過程を知る事の如何に困難な事業であるかは、思ひ半ばに過ぐるものがあると思ふ。

原始的土人の舞踊と歌詞

スピックス氏 (Spink) 及びマーシユース氏 (Martins) は、ブラ

ジル(Brazil)のムーラス種族(Mulaa)の踊に就て、恠う書いてゐる。彼等は、月の夜大きな輪を作つて踊る。男子は一方に一種の輪をつくり、女子はその側に同じく一種の輪をつくり、互に歌ひ交はす。先づ男子の方から「誰か自分と結婚して呉れる娘はないか？」といふ意味の歌が歌はれる。すると、女の方からこれにこたへて、「お前は非常に奇麗だから、どんな女でも結婚したいと思つてゐる」といふ意味の歌をうたふ。また、ブラシブルのプーリス種族(Puris)の舞踊は、男女ともに素裸になり、一列となつた男子の後ろに、女子が同様の列をつくつてゐる。そして前に進み、後ろに退き、地を踏み歌ひ且つ踊る。この踊は、はじめは極めてゆつくり踊るのであるが、次第に勢が加はり、そして踊り子の凡てが亢奮の絶頂に達して来る。その時に女子は骨盤を……動かし、男子はこれにつれて軀を前方に突き出しつゝ、奇異な合の手の踊を演ずる。これは一種の無言の性的模倣である。(スピックス氏、マーシユース氏共著『ブラジル旅行』一八三二年、第一巻、一一一七頁、Spin and Martius, Reise in Brasilien 1831 vol. III, pp. 1117)

ブラジルのアピネーグス種族(Apinages)の舞踊は、婦人は殆んどジツとしたまゝ一列に駢ん

で立つてゐるだけであるが、その前をば、男子が踊りまはるのである。(ブスカリオニー「アピネーグスに於ける旅行」Buscalioni Reise ne den Apinages「人類叢雜誌」一八九九年刊、六五〇頁、Zeitschrift für Ethnologie, may. 1899 pp. 650)

ニューメキシコ土人の求愛慣習

ニューメキシコのヒラー種族(Gila 譯者註——ニユン

びアリヤナ

に住む種族)は、若い男が自分の妻にしたいと思ふ娘を見つけた時には、第一に娘の両親の歡

心を得る事を努める。そしてこれが成功した時には、男子は、月夜女の家の窓下に行つて、戀の歌をうたつて笛を吹く。それが夜毎數時間に涉つて行はれる。その時、若し娘が窓から顔を見せなかつたならば、その戀は拒絶せられた事を意味する。もし娘がこれに應じて男に逢ふ爲めに、窓際に立ち現はれる時は、その戀は愜つたものであつて、男は直ちに娘を自分の家に連れ歸る。其處には、何等婚姻の儀式は行はれない。(エッチ・バンクラフト「太平洋諸島中の原始民族」第一巻、五四六頁、H. Bancroft, Native Races of the Pacific vol. I, p. 546)

結婚儀式と求愛

こゝに注意すべきは、結婚儀式といふ事は、それ自身が既に求愛的性質を有してゐるといふ事である。換言すれば、結婚式はチューメツセンスを得る手段方法とし

て用ひられる所の求愛の象徴であるといふ事これである。

クローレイ氏(Crawley)が言つてゐる如く、「結婚の儀式は、その本質的意味からすれば、戀愛上の種々の魅惑と同じ」である。氏は、濠州のアランタ種族(Arunta)に行はれてゐる風習を説明して、彼等は結婚の席上儀式として、大勢の男女が集會し淫らな歌をうたひ、花嫁花婿のお互の求愛感情を促がし、斯くして結婚式が閉ぢられると言つてゐる。(クローレイ氏著「神秘の薔薇」三二八頁、E. Crawley The Mystic Rose, P. 318)

ミンネタリー種族の求愛象徴

ミンネタリー種族(Minnearee)の間には、奇異な踊が行はれると言はれてゐる。此の催の中に於て、女は自分の愛人を選む機會を與へられる。若しその男子の器量がいゝとか、武器を執つては後れを取らぬ強者であるとかいふ評判のある時には、女からの求愛が特に盛んに行はれる。娘達は踊の最中に自分の目ざした男の傍に進んで、彼の肩を敲く。若し男がこれに應じて女に蹤いて行く時は、彼女は走りつゝ草叢の中に姿を隠す。けれども、若し男の方に於て、他の娘に誼があるとか、或は別の女を望んでゐるとか、乃至は、その際十分の性的満足を得た後であるかとする場合には、男は自分の手を女の肩に置いて、拒絶

の印とする。(ロンゲ氏「ロッキーマン脈探検記」一八二三年刊、第一卷、三三七頁、B. H. Long, Expedition to the Rocky mountains, 1823, vol. I, P. 337) 茲に注意すべきは、オーマハ種族(Omaha)の言葉に *Wahé* といふ言葉があるが、これが舞踊といふ事を性的行爲といふ事に通じて用ひられる言葉であるといふ事である。

カツファー種族の性的舞踊

カツファー種族(Kaffir 譯者註——南阿Bantu 種族の一部の土人)の結婚に於

ては、歌と踊とが夜中まで續けられる。それは、新婦の方の客と、婚の方の客とが向ひ合つて踊るのであるが、二つの組が混淆はしない。夜が更けるに従つて、彼等の精神と情慾とか非常に亢奮して来る。歌の聲を歌詞と筋肉の運動が、不思議な程異常的に精神の亢奮を誘ふ。男女の中、他の人よりも異常に亢奮したものは、遂には其の列から飛び出して種々雑多の猥褻な踊をやる。斯うした騒ぎが夜中まで續いて解散されるが、その際、通例は男子が一人宛自分の好む女を選んで、性慾を逞しうする事夜明けに迄も及ぶのである。(ホルデン氏「カツファー種族」一八六六年刊、一九二頁、W. C. Holden The Kaffir Race 1866 P. 192)

カツファー種族の割禮式

カツファー族の男子が、初めて大人になる時には、ホール

デン氏 (Holden) が指摘してゐる通り、割禮を施される。此の時には、両親は家畜を殺し、子供に鮮肉を鱈腹食べさせる。その儀式の間盛大な踊が催される。思春期に達した若者は、棗椰子の葉で奇想天外的な假装をする。そして、彼等の部族の一軒々々を訪問して踊るのである。その踊は殆ど想像もつかない程に猥らなものである。踊に於ては、婦人が重大な役割を演ずる。婦人は有らん限りの猥らな素振りを演じて、少年の情慾を刺戟する事に努める。

割禮の手術によつて與へられた疼痛が治癒するや否や、少年達は直ちに社會に送り出される。そして、殆ど總ての法律の束縛から解放される。それ故、隣家の家畜を盗んでも、殺しても罰せられもしない。また彼等の情慾を満足させる爲めには、未婚の婦人でありさへすれば、どんな女でも力づくで捉へていゝといふ特權を與へられてゐる。男子の割禮と同じ様な儀式は少女の成人式の場合にも行はれてゐる。(ネルデン著『カツファア種族』W. C. Holden, 一八六六年刊、一八五頁・The Kafir Race 1866 P. 185)

ズールー種族の性的慣習と女子成年式の舞踊

牧師マクドナルド (J. Macdonald) は、
 チューゲラ (Tugela) とテラゴア灣 (Delagoa) あたりに棲むズールー種族 (Zulus) 譯者註——南アフリカ種族中の一

派) に於ける少女の初潮の儀式に行はれる種々の風習を記述してゐる。初潮を見た少女は土語でイントンジャネ (intjane) と呼ばれる。祖先の靈に捧げる爲めに獸を殺して贅えとし、非常に盛大な饗應が数日の間續けられる。そして、會衆が疲れ果て、黍明が近づく頃まで踊や歌や音楽が毎晩行はれる。數日を経つて踊が終ると若い娘や青年がぞろ／＼と小屋の外庭に集まり、其處で手を拍つて歌ひ出す。そして大騒ぎをしながら、彼等の悦びを示す。夜の幕が閉ぢるとイントンジャネに附添つてゐる若い娘達は、てんでに自身のうちへ歸つて行く。そして彼等は、翌朝またイントンジャネを訪ねて來るのである。附添の若い娘達が歸つて行くと、青年と、イントンジャネとは、それ／＼ in Paris naturibus で其處に泊まる。これは慣習上嚴密に定められてゐるので是非さうしななければならないのである。けれども、此の際性的交渉は禁じられてゐるが、此處にメツシヤ (Metsi) 或はウクメツシヤ (ukumetsi) と言はれてゐる稀らしい交渉が行はれる。ウクメツシヤとは一言にすれば部分的性的交渉とでも定義したならよからう。娘と斯うして夜を過ごした青年達は、各々アツセデー (atsedee) 譯者註——南アフリカ人の槍一種の槍 をイントンジャネの父に贈らなければならぬ。若し、青年にして其の夜の附添の相手が氣に入つて、

結婚したいと考へた場合には二本のアツセチーを贈る事となつてゐる。(ジエー・マクドナルド『南アフリカ諸部族の風習其他』——「人類學協會雜誌」第二十卷、一八九〇年刊、一八九〇頁、一一七頁、Manner etc of South African Tribes, Journal of the Anthropological Institute, v. 1. xk, November, 1890, p. 117)

セネガルの性的模倣ダンス

ゴンクール氏 (Goncourt) は、セネガル (Senegal) 譯者註——カの佛領) 植民地) 駐在の一佛國士官からの同地の舞踏に就ての報告を引用して恚う書いてゐる。『此の踊は、はじめは軀を左右に靜かに振搖させるだけであるが、それが次第に烈しくなり、時々その一團の中から婦人が飛び出して來て、自分の戀人の前に立ち、恰も情熱的の抱擁をしてゐるかの如く軀を振り搖かす。そして自分の肢間に手を置き。……………つてゐる事を示す素振りをするのである。(Journal, v. 1. ix, p. 79所載)

ピエール・ロチの「アルゼリアの一騎士の話」

上掲の舞踏は、恐らくピエール・ロチ (Pierre Loti 1850——我國にも「お菊さん」。「日本印象記」の著を以て知られてゐる佛小説) が『アルジェリアの一騎士の話』 Roman du Spahi 中に描寫してゐるヴォロツス (Volofs) の所謂大鼓踊 (Bamboula dance) と同じもの

であらうと思ふ。此の踊に就ての委しい記事は、前にたびく引用した佛國一軍醫の著「人類學上人跡未踏の地」Untrouder Fields of Anthropology の中に見られる。『此の踊は満月の夜に於て行はれる。だんく倦意を覺えて來た男女の踊子達は、太鼓の音と見物人の激勵とに勵まされて、再び踊りの手が猛烈になつて來る。此の踊は土語でアナマリス、フォービルと呼ばれてゐるが、その意は太鼓踊りといふ事である。』(人類學上人跡未踏の地) 一八九八年、第二卷、一一二頁、Untrouder Fields of Anthropology, Paris 1893 vol. II p. 112)

ギユーラス種族の葬式に伴ふの舞踊

象牙海岸 (Ivory Coast) 譯者註——西アフリカ黄金海岸の西に位するギニア灣の海) のギユーラス種族 (Gurusi) 間に於ける踊に就てエーセリック氏 (Eysseric) は恚う書いてゐる。踊は普通夜行はれる。而して殆ど凡ての踊が男子だけで行はれ、或る二三の踊に於ては、絶対に婦人が現はれてはならない事となつてゐる。それと言ふのは、彼等の間にあつては、若し婦人がその仲間に這入つたならば、踊に加つた男達は皆死ぬるといふ迷信が行はれてゐるからである。けれども、他の踊に於ては、男と女と混交して熱心に踊る。彼等の踊は非常に猥褻であつて、葬式に關係した踊までが時としては性的の踊に變つて行く傾さへもある程である。

例へば、酋長の息子の葬式に列た會葬者の凡てが、葬儀が済むと直ぐに踊をはじめ。而かもそれが段々と熱心になり、夢中になつて騒ぎ出す。それには、葬式の儀式的な要素は何物も見出されない。全然性的な猥褻な踊である。老若男女の區別なく、各自競つて踊の相手を求めて踊り狂ひ、葬式の踊は、恰も結婚か戦捷の祝の時の踊と思はれる位に愉快に騒ぐ。(アイセリー「象牙海岸」——「科學協會會報」一八九九年、二四一頁—二四九頁、Eyseric, La Côte d'Ivoire Nouvelles Archives des Missions Scientifiques, tom IX, 1899, pp. 241-49)

タベタ土人の結婚儀式の舞踊

フレンチ・セルドン夫人 (Mrs. French Sheldon) は、東アフリカのタベタに於て觀た結婚式の事を記述してゐる。

「此の期間、若い男女が誰彼の差別なく強たか酒に酔つ拂つて踊り廻り、時としては癡癡的發作を起して打ち倒れる迄に踊り狂ふ。」此の種族は、男女共に「非常な舞踏好きで且つ底抜け騒ぎをやる。若い男女は、別々に二組のグループを作り、互に向ひあつて踊る。踊りが烈しくなると、一人の若者が自分のグループの踊の列から二つの列の中間に飛び出し、そして、ウー、ウーと呼び出す。すると、次の若者がこれに續き、第三の若者がそれについて現はれ、同じく

ウー、ウーとうなる。若い男達は、膝を曲げないで真直ぐに伸ばした儘、飛び上る。そして彼等の亢奮が極點に達し、その精力が消盡され、痙攣を引き起こす迄つゞける。これが彼等の踊である。時としては斯うして地上三呎までも飛び上がる私は、或る祭の儀式の時、斯うした踊が非常に猛烈になり、若い一人の男が飛び上るたびに頭の前から足の先までブル／＼と顫はし自からの力で制御しようとしても制し切れないで顎をガツ／＼と音をさせながら踊つてゐたが、遂に眼を眩はして口から泡を吹きながら病的發作によつて地上に打ち倒れたのを見た」と。夫人は尙これに附け加へて「此の踊は、淫慾の一種の現はれとして解釋出来る様に思はれる」と言つてゐる。(フレンチ・セルドン夫人「東アフリカ土人間に於ける慣習」——「人類學協會會報」第二十一卷、一八九二年五月號、三六六頁—三六七頁、Customs among the Natives of East Africa Journal of the Anthropological Institute, vol XXI May, 1892, pp. 366—67) これに附隨して一言スワエリー部族(Suaheli)間に行はれてゐる踊が、結婚と密接に係合してゐるといふ事を言つて置く必要がある。スワエリー部族の踊に就ては、フェルテン氏(Velen)が、「スワエリーの風俗及び習慣」自一四四頁至一七五頁、sitte und Gebräuche der Suaheli pp. 144—175 中に委し

く説いてゐる。東アフリカ英領アカムバ (Akamba) の土人に於てもまた、若い男女の結合の成立後踊が行はれるといふ事をテイト氏が説いてゐる。(ローソン・テイト——「人類學協會雜誌」、一九〇四年一月號——七月號、一三七頁、Journal of the Anthropological Institute, Jan Jun, 1904, p. 137 所載)

フエーローエー島土人の擬似的舞踊

フエーローエー島土人 (Faroe Islander) の踊に就ては、レーモン・ピレー氏 (Raymond Pilet) が次の様に報告してゐる。是れ等の踊は、非常に精巧なものであつて、詩・音楽及び澤山の物真似特に戦争の擬似を含んでゐる。斯うした踊は、二晝夜ぶつ通して行はれる事さへもある。「けれども、要するに是れ等の踊は、たと若い男が若い女に求愛する爲めの踊である。島の青年は、自分が愛を示さうと希つてゐる娘の傍に行つて、踊の輪に加はる。若しその青年がその娘の意に慥つた場合には、娘は青年の脇でそのまゝ踊りをつゞける。若しさうでない場合には、娘はすぐ踊の輪から抜け、姑くしてから他の場所に這入つて踊りに加はる (Raymond Pilet, 『フエーローエー島に派遣に就ての報告書』——「科學協會々報」第七卷、一八九七年年刊、二八五頁、Report sur une Mission en Islande et aux Iles Féroé

Novvelles Archives des Mission Scientifiques, tome VII, 1897 P. 285)

シ、リー嶋人の慣習と成年式の試練

ヒートレー氏 (Pitre) は、シシリ島 (Sidiy)

に於ける青年の事に就て恠う書いてゐる。これはマルロー氏が、その著『春情期』(Puberté)にも引用してゐる所であるが、彼等は、結婚式の前、まづ自分の勇氣を公衆から認められる爲めに、種々の方法を以て自己の力を示さなければならぬ。キアラモンテに於ては、花髻は彼の肉體の力を示す爲めに、重い旗竿を擔がなければならない。その旗竿は澤山の美しい飾りを附けてゐる爲め、その重みで半圓にしなへて非常に重い。花髻はこの重い飾りの竿を擔ぐ爲めに、頭を極度に後ろに引き縮め、脊を圓くして、痛ましい程變な姿勢をして練り出す。所がそれだけでは濟まない。彼が花嫁の家の前に到達すると、彼の勇氣と熟練とを示す爲めに、此の極度に重い竿をば、恰も掌中の玩具の様に振り廻す。けれども、これは言語に絶した困難な事で、これが爲めに腰骨を折るとか、軀の諸部を傷めるかして、時には致命的な害を及ぼす事がある。(ピートレー氏『シシリ人の習慣』第二卷、二四頁、Pitre Usi, etc, del Popolo Sutiliano, vol II, p. 24)

性的誘示と求愛

これと同じ傾向は、餘程進化した諸動物及び原始人の間に於ても見られる所であるが、また同時に、文明人に於ける少年の間に於ても——尤もそれは明瞭に組織立つて現はれないにしても——現はれてゐる。それは俗に言ふ「これ見よかしの見せかけ」に現はれてゐる。スタンフォード・ベル氏 (Stanford Bell) は、兒童に於ける戀愛的情緒の研究に於て、「これ見よかしの誘示 (Showing-off)」は、兒童の戀愛に於ては必然の本質的要素である事を見出している。氏はこの現はれを呼んで戀愛の第二階級と言つてゐる。(女兒にあつては八歳から十二歳に、男兒にあつては十四歳に現はれる)。「斯うした誘示は、男の兒の戀愛的魅惑の目錄中の最も重要な要素の一つである。しかし、女兒の戀愛的魅力の一要素としても、多少の差こそあれ、それがある。吾々は、普通よく子供が、自分の卓越した力を見てゐる人々に見せようと、いろいろ手段を盡し、その極、偶には酷く馬鹿げた真似や突飛な行までやるのを見る。疾走したり、飛び上つたり、踊つたり、跳ねたり、蹴つたり、口笛を吹いたり、蜻蛉返りをし、逆か立ちをしたり、匍つたり、危なつかしい崖端を渡つたり、遊いだり、動物の真似をしたり、する様な事は、この戀愛的魅惑の要素から來る誘示の普通の形式である。……………小兒に

於て見られる斯うした誘示は、成年男子の自己廣告といふ巧妙にして明かな目的をもつた精緻な手段の前表であり、成年婦人に於ける魅惑的媚態の前驅的現はれである」(スタンフォード・ベル氏『兩性間の戀愛的情緒』——「亞米利加心理學雜誌」一九〇二年七月號・The Eriction of Love between the Sexes, American Journal Psychology, July, 1902.)

性的行爲の豫備としての求愛

若し吾々にして、上の如き論議の光に照して、曩に集録し來つた諸事實を見るならば、吾々は、其處には絶えずこれと同一の本能が働いてゐるといふ事を容易く覺る事が出来る。求愛の場合に於て受身的になる事は殆どないと見ていゝ所の男性の本能的目的は、求愛の如何なる場合に於ても、誘示を行ふ事、精力、熟練乃至美を示す事によつて、自らの情熱及び相手の婦人の情熱の兩方を確保しようとする。自然界全體を通過しても性的結合は非常な精力を費して後初めて得られる事が解かる。贅澤に飼養された家畜や、人間社會に於ける遊民階級の人々にあつては、

けれども、吾々はたゞ此の事實をのみ見て、

直ちに射精本能は常に正當な満足を要求してゐると速断する事も、自然界を通じて、總ての動

物が一寸の性的刺戟を與へられたならば、忽ちに射精衝動の高調に達するものであると速断する事も謬りである。充血本能は、それ自身の性質としてひたすら打破られる事を要求してゐるものであると考へる事は、非常な謬りである。それと反對に、

充血の状

態は、常態的に言へば、絶えず存在してゐないのが本當である。これは、たゞ射精が可能である場合、その豫備として起るのが本當である。求愛といふ事の全目的、換言すれば異性間相互の接觸愛撫といふ事の全目的は、性的充血の状態をつくり出す事にある。

チューメツセンスと舞踊との關係

昆虫類をはじめ、諸鳥類及び人類に到る迄、有らゆる動物に於て見るに性的充血を得る最も普通の手段は、或る形式の舞踏であるといふ事が解かる。エー・ビー・マイヤー氏 (A. B. Meyer) の記する所に従へば、フィリッピン群島に棲む黒人間に行はれる舞踏は「一人の若い女を輪形に取り捲き、足踏みをするだけであると言ふ事である。私が曩に屢々説いた様に、さうした形式のダンスは、廣く種々の動物の間に行はれてゐ

る所のものであつて、本質的に見れば、これ一種の求愛表示である。スタンレーホール (Stanley Hall) も亦「アメリカ南部に於て見られる様な眞の圓形踊りは、恐らく人類に於て見られる求愛的道化の最も純粹な表現であらう」と言つてゐる。筋肉運動中、舞踏はその最も高尚な、最も複雑な表現であるが、一體に筋肉運動そのものは、自己のもつてゐる最大の潜精力を働かし、自己陶醉に浸る一方法である事は疑はれない。凡て烈しい運動は積極的充血を起す傾がある。斯うした充血が、脳髓に及ぼす影響から言へば、肉體の猛烈な運動は、狂氣に似る程の陶醉状態を起こさしめるものであると言ふ事が出来る。ラグランジ (Lagrange) も言つてゐる如く、運動から引き起こされる結果中、眼に見える結果——例へば血色のよくなる事、生々とした眼、ときばきとした態度歩調——は、ほろ酔ひの状態と同じである。十五分間ワルツを踊つた少女は、彼女がシヤムペンを飲んだのと同じ状態になる。(ラグランジ氏「肉體的運動の生理學」第二章参照。Lagrange, Physiology of Poultry Exercise, chapter II)

舞踊の麻酔的効果

グロース氏 (Groos) は、特に此の事實を力調し、舞踏をば他の諸々の麻酔的方法と同じ効果を齎らす所の洵酔的運動遊戯と見做してゐる。そして、舞踏を闘争及び

戀愛と關聯させて考へないにしても、舞踏は確かに吾々を日常生活から拉し去つて、吾々自身の拵へた夢の世界に導く事の出来る魅力をもつてゐると言つてゐる。(Groop, 『人間の遊戯』 Spiele der Menschen, P. 112 及びツミグロツキー『アリ人種の母』四二〇頁以下、Die Mutter bei den Volkern des Arischen Stammes, Pp. 420 et seq.)

舞踊の刺戟的效果

舞踊は單に麻酔的效果をもつてゐるばかりでなく、有力な刺戟的效果をもつてゐるといふ事は、實驗によつて明かに證明する事が出来る。實驗によれば、舞踊の肉體及び精神に及ぼす刺戟的結果は、さ程複雑でない、種類の舞踏によつても起されてゐる事が解かる。これは、明かに決定的事實である。例へば、フェーレー(Frae)が、永い間の苦心と精密の實驗とを以て、モツソーの『筋力計』Mosso, Ergog. zuh. に感づる力の變化を測定した事によつても、明かに證明されてゐる。氏は、筋肉運動は筋肉の活力を高める上に於て、他の如何なる刺戟よりも、最も有力であるといふ事を発見した。癡醉と亢奮とを結合した結果を得る様な動作は、日常生活の中にも容易に探す事が出来るが、しかし、此處に一々それを數へ上げる必要はない。

筋肉運動の最も高尚な且つ最も複雑した様式である所の舞踏は、筋肉運動が諸器官に與へる刺戟中、最も有力な刺戟を與へる方法である。斯くして、吾々は何故に舞踏が最も下等の動物から人間に至る迄、性的充血を得る一様式として性的本能に役立つてゐるかを容易に理解する事が出来る。野蠻人間に於ては、舞踏は性的充血を得る事と、舞踏が原始人間にもつてゐる其地種々の用途と調和して働いてゐる。従つて原始時代にあつては、舞踏は彼等の生活の非常に廣汎な有力な部分を占め、骨格の形をも變形せしめる程までに身體に深かい影響を齎らしてゐる。それ故、或る學者達は、舞踏とPlatyvenemiaとを關聯させて考へてゐる。文明が進歩するにつれて、舞踏の種々の用途は消滅する。けれども、それが性的刺戟として役立つ事は依然として變らない。バルトン(Burton)は、その著『鬱憂の解剖』Anatomy of Melancholyに於て、舞踏は戀愛に對する刺戟であると主張した昔の諸學者の説を澤山に引用してゐる。

舞踊と宗教

舊教の神學者達は、大抵舞踊と痛く非難し、排斥してゐる(デブレーネ氏)著『姦淫論』一九〇頁——一九九頁、Debrethe, Nachalogie Pp. 190—199——拉丁——)新教國である獨逸でさへも、舞踏會とか音樂會とかいふものは貞操を破る機會を與へるものであると

言つて非難する牧師が少くない。獨逸國の一報告によれば、「ライブチと地方に於ける墮落した娘に、「怎うした動機から墮落したか？」と問ひを發すると、その中の十中八九は、「舞踏から」と答へる」と述べてゐる。「獨逸の性慾的慣例事情」第一卷一九六頁、Die Geschle. ethlich. Sittliche Verhältnisse in Deutschen Reiche, vol. I, P. 196) けれども、また他方よりこれを見れば、舞踏會乃至音樂會の如きは、結婚の相手を求める機會を與へるといふ事も事實である。ルソーは、此の見地から舞踏を辨護して慫う言つてゐる。舞踏は、男女の求愛に絶好の機會を與へ、結婚の相手を得るための最上の方法である。若い男女にとつて最も必要なるは、お互に自己を知らせ合ふといふ事である。即ち、自分達の美點と同時に弱點をも、長所と同時に弱點をも、またその品性なり、行狀なりを相互に理解し合ふ事でなければならぬ。所が、舞踏は公會の席上に於て行はれるものであるからして、十分な保護の下にこれを遂行する事が出来る」(「新勇者」第四卷。第十章 Nouvelle Heloise, bk. IV, let. x)

舞踊と求婚との關係

普て、一九〇七年ベルセロナ (Barcelona 譯者註——西班牙の 都市) に、萬國舞踏教師大會が催された際、此の會議の議事項目に關する一として、萬國舞踏教師組合の

會長ジローティ氏 (Giraudet) は、世界各國から集まつた三千人の舞踏教師に對し、舞踏と結婚との關係比率を調査する事の議案を提出した。此の調査報告の結果に據れば、既婚乃至婚約にある百萬人の舞踏の弟子中、五割以上は踊を機縁としてその配偶者を得たものであることが解る。その比率は、諾威が最低であつて、三割九分、獨逸が最高率であつて九割七分を示し、佛蘭西は八割三分、米國は八割、伊太利は七割、スペインは六割八分、和蘭、ブルガリア及び英國は何れも六割五分、濠州及びルーマニアは六割の比を示してゐる。教師自らを統計せるものによれば、九割二分の高率を示してゐる。

舞踊と戀愛の満足

けれども、概括すれば文明社會に於ては、舞踏は戀愛の刺戟及び求愛の豫備行爲となるばかりでなく、また屢戀愛の満足と快感とを買ふ代償物となる場合が少なくない。この事は戀態性慾の場合に一層顯著である。サードゲル氏 (Sardou) は、舞踏の樂をば「筋肉的戀愛」だと見てゐるが、氏は、その例として二十一歳になる、ヒステリックな婦人を擧げてゐる。『此の婦人は性的不感症に罹つてゐるが、他の點に於ては肉體上何等の異常もない。たゞ非常に舞踏が好きである。この婦人自らの言ふ所によると、舞踏をしてゐる間は、

と言つてゐる』と。(サー

トゲル氏『皮膚・粘膜及び筋肉的戀愛』Haut, Schleimhaut—und Muskel. erotik「心意分解研究年鑑」一九一二年、第三卷、五五六頁、Jahrbuch Für Psychoanalytische Forschungen, 1912 Pa. III P. 556)斯かる例は、極端なる戀慾性慾の場合であるが、しかし、程度の差こそあれ、普通の女性に於ても稍これに類似した感情をもつてゐる。その證據には、極度に筋肉の運動を要する舞蹈に於てさへも、一般の婦人は疲勞を感じないばかりでなく、却つて愉快を感じ心身の爽快を覺える。マルロー氏(Marro)もこれと同じ觀察をして、十八世紀の西班牙の僧侶達が道德と舞蹈との關係を説いて、舞蹈に對する國民的熱心を高調したのも、此の處にあるといふ事を洞察してゐる。(Marro, Paleria, p. 357 et seq.)處女が一とたび性慾的關係をはじた後には、舞蹈に對する熱が以前程旺盛でなくなつて來るのが普通であるといふ事は、これ又意味深かい事ではなればならぬ。また現代の舞蹈が、性慾的要素を多分にもつてゐるといふ事も注意しなければならぬ。

戀愛生活の縮圖としての舞蹈

シルレル氏(Scholler)も指摘してゐる如く、その最も

代表的のものは、ウォルツ(Waltz)である。此の踊は、恰ど戀愛の物語ゴッテスを代表してゐる。戀愛生活の縮圖である。即ち女を追ひ蒐け、女はそれを避けて逃げ廻り、互に追ひつ追はれつ、或は故らに聲め顔をして見たり、或は身をかはし、ためつしがめつ、遂には結婚の喜びの表情に、終るのがウォルツである。言ふ迄もなく、舞蹈が戀愛と關聯してゐる原始時代に於てさへも、それが必ずしも性的無言劇ではなかつた事は明かである。ウォラスチエック氏(Wallaschek)も、その原始人の舞蹈に關する精緻な研究の中に指摘してゐる如く、原始人の舞蹈にしても、性的本能と密接な關係を有してこそおれ、性慾そのものとは獨立して存在する價值を有し、且つ一般に動物の舞蹈に見るか如き無言劇ではない。(ウォーラスチエック「原始的音樂」二二二頁—二二三頁、Wallaschek, Primitive Music, p. 211—13)ゲローセ氏(Groese)も「最も巧妙なダンスーは、同時に最上の戰士であり、最上の狩獵家でもあり、斯くして性的淘汰と自然淘汰とは、調和を保つてゐる」といふ事を指摘してゐる。(ゲローセ「藝術の初歩」二二八頁、Anfänge der Kunst, English translation p. 228)

運動の傍觀もチューメツセス惹起の効果を有す——フエーレーの實驗

軀を

動かす事それ自身が、チューメツセンスの源泉となるのでなく、他の人の運動を見てゐる事もまたそれと同じ結果を生ずる。他の人の運動を目撃してゐる場合、それが自己の筋肉組織を刺戟する結果を與へるといふ事は、既にフェレー氏(Feré)が精密なる心理的實驗によつて確かめた所である。氏は、色彩を施した圓板を回轉するのを凝視してゐる場合は、それが靜止してゐるのを見てゐる場合よりも強い刺戟を筋肉組織に及ぼし、その結果が明かに測力量に現はれる。といふ事を證明した。此の事實は、彩色を施さない事物に就ても同様であつて、たゞその事物の運動だけに就て見ても、その律動を見ないで握力計を握る場合よりも、それを見ながら握る場合の方が、握力が高まるのを見る。(フェレー氏「運動凝視の快感」Le Plaisir de la Vue du Mouvement「生物學會議事録」一九〇一年十一月號・Comptes rendus de la Société de Biologie, November 2, 1901及び「動物と快感」第二十九章[Travail et Plaisir ch, xxix])

グロース氏の説

上述の心理的現象は、また廣告専門家によつて、發見せられてゐる事實である。廣告業者は、廣告に對し公衆の注意を喚び起し、これに強い印象を與へんが爲めに、色彩ある光線を用ひ、且つそれを動搖旋回する様に工夫してゐる。グロース氏(Groos)も反復

力調してゐる如く、踊それ自身が亢奮を齎らすのは言ふまでもないが踊を見てゐるといふ事もまた同様、程度の差こそあれ、ある程度の亢奮を促がすそれ故、野蠻人間にあつて舞踊により男女のチューメツセンスを刺戟しようとしてゐるばかりでなく、凡ゆる動物が、踊乃至これに類する運動によつて性的亢奮を促さうとしてゐるのは、如何にも自然である。(グロース氏「人間の遊戯」、八一頁より八九頁・Groos, Spiele der Menschen, Pp. 81—9, 460 et Seg. 及び「藝術の起源」二二五頁、Anfänge der Kunst, P. 215参照)踊には、必ずしも男女揃つて踊る必要はない。只何れかの一方——普通男性であるが——さへ踊れば、女性はそれを見物してゐるだけで、男性と同じ種類の亢奮を受ける。この現象は、夙にクーリツセル氏(Kulischer)の注意を牽いた問題である。氏は野蠻人間に於て、男性の舞踊が如何に深く女性亢奮を刺戟するものであるかといふ事を例證してゐる。「女子は謹まし氣ではあるが、熱心に男子の舞踊を見まもり、自分の愛人を選ぶ。恐らく彼等の性的淘汰は、舞踊、遊戯乃至祭禮等の間に於て行はれるであらう」(M, Kulischer「古代人の性的淘汰」——「人類學雜誌」一八七六年刊、一四〇頁以下 Die Geschlechtliche Zuchtwahl bei den Menschen in der Urzeit, Zeitschrift für Ethnologie, 1876, P. 140 et Seg.)

第五章 結 論

性的衝動と排泄衝動との類似點——デチューメツセンスと膀胱の排泄的エネルギー——性的亢奮と排泄との關係——膀胱の充満と遺精——フェーレーの觀察——笑の性的中樞に及ぼす影響——排尿とデチューメツセンスの轉換——性的行爲と癲癇の比喩——性的衝動の分解の究極點——性慾と飢餓——性的衝動の二要素——チューメツセンスとデチューメツセンス

求愛の事實は何事を證明するか

上來述べ來つた求愛の實際的事實によつて、何故に

性的衝動對排泄の原理が單なる部分的真理でありまた不完全な説であるかが明かになつた事と思ふ。排泄の理論は、性的衝動の本質的要素をなす所のチューメツセンスの現象を全部見通してゐる。チューメツセンスの現象は、實に性的過程に於ける最も廣汎な、而かも最も重大な段階を形づくつてゐる要素である。實に性的衝動の心理的過程の全部に涉つて、これを建き上げるものは、チューメツセンスである。チューメツセンスの段階の次に起る現象は、デイチュー

メツセンスであるが、排泄衝動と性的衝動との類似關係が比較されるのは、性的衝動がデチューメツセンスの段階に至つてから、はじめて可能である。チューメツセンスの段階に於ては、排泄衝動との比較は意味をなさない。性的衝動の第二段階たるデイチエーメツセンスの期間に於てすら、排泄の譬は完全とは言はれない、何となれば、デイチューメツセンスの衝動は、排泄衝動とは到底比較にならない程に激烈であり、且つマツシブである。けれども、排泄の代表的作用は、神経作用によるものであり、性的衝動も勿論それである。若し吾々にして此の點を念頭に置いたならば、排泄の理論が性的衝動と密接な類似を有してゐる事の真理なる事を知る事が出来る。

性的衝動と排泄衝動との類似點

ボーニス氏 (Painis) は、性的衝動を「活動に對

する要求」Need of activity と同じものと認めてゐるが、氏は尙進んで、排泄と性的衝動とが共に神経的爆破であるといふ根據から、小便の要求と性的衝動とを同じ作用であると論じてゐる。即ち氏を以て見れば、小用の衝動と、デイチューメツセンスの衝動とは、同じく痙攣的不可抗的作用であつて、大腦の作用に深い關係を有してゐる。ギューヨン氏 (Guyon) も言つてゐる

如く、癲癇の場合には遺尿が伴ふが、此の作用も以上と同じ不可抗的作用の一例である。その證據には、軽い癲癇の場合には、當人自らに意識してゐながら遺尿を制する事が出来ない。(ギューヨン『尿道病臨床治療講義』第三版、一八九六年刊第二卷、三九七頁、Guyon Leon, Clinique sur les Maladies des voies Urinaires, 3^e ed., 1896, vol. II, P. 397.)

デチユーメツセンスと膀胱の爆發的エネルギー

實に性的デチユーメツセンスと膀胱の爆發的エネルギーとの間には、特別なる而かも密接な關係がある様に見える。兩者は互に或る程度迄、其の緊張を緩和し、互に相補ひ合ふ作用がある。遺尿が、發情期に至ると共に歇み、或は却つてこの時からはじまる事があるのは、兩者に相通する何等かの關係がある事を暗示するものであつて、特に注目し得る現象である。大人と子供の區別なく、膀胱の膨張は静脈の充血を促がし、延いてデチユーメツセンスを得るに好都合の状態をつくる。尤もそれは、性的デチユーメツセンスにとつて、物理的障壁となるけれども、デチユーメツセンスにとつては有利である事は疑ない。女子の場合にあつては、膀胱の膨張は、性的亢奮と性的快感とを昂める。それは恐らく膨張の齎らす壓力の結果であるばかりでなく、神經作用の反射からも來る。

様に思はれる。(ギューヨン同上書、Guyon, Leon, Clinique sur les Maladies des voies Urinaires, 3^e ed., 1896, vol. II, P. 397.) 私は、幾多の婦人から斯ういふ話を聞いた。彼等はその理由は解らないが、兎に角經驗上上述の様な事を發見したので、常に性的行爲の場合それを實行してゐると。斯くの如く排泄衝動が高まると共に、デチユーメツセンスも旺盛になつて來るが、これと反對に、性的亢奮が高まつて來る場合にも、それが膀胱の爆發的エネルギーに影響し、排泄衝動を高め排尿を催して來る。殊に女子に於ては排尿機能が非常に敏活であつて、文明人・野蠻人の區別なく、膀胱の充滿してゐる時には時として性的行爲に對し遺尿が不可抗的に同時に伴ふ事さへもある。(フェーレー氏『性的本能』二二二頁——二二三頁 *Ere Instinct Sexuel*, pp. 222—223. 氏 (Brantome) であらうと思はれる。マックジリカデー氏 (Macgillivray) は、

例を擧げ

てゐる。キューバリー氏 (Kuhary) も、ボナベの男子達は、

而して此の土地に於ては、これが性的行

爲の普通一般の慣はしとなつてゐるといふ事を説いてゐる。

排尿の衝動は前にも言つた通り婦人に於ては、性的興奮に伴ふ普通の現象である様に思はれる。アラビヤ人は、牝馬が雄の嘶を聞いて盛んな排尿をするのは、交尾の前知らせであるといふ事を認めてゐる。性的刺戟にはこの二つが關聯してゐる様である。ピートル氏 (Pitro) 及びレージー氏 (Regis) は、
.. 杞憂に悩されてゐた處女の例を擧げてゐる。この處女が恚うした觀念を抱くに至つたのは、曾てその少女が、ある劇場で一人の青年に出會つて

爲めにその場を中座しなければなくなかつたといふ經驗があつたからであつた。(ピトレス氏 レヂス氏 『モスコ—萬國醫學協會々報』第四卷、一九頁 PETERS and REGIS, Transaction: of the International medical Congress, MOSCOW, vol IVP. 19) これと全く同様な例を、フロイド氏 (Freud) 非常に性慾的な性質をもつた、然し非常に温和なある一婦人にある事を述べてゐる。(フロイド氏 『神經病に就て第一卷、五四頁』 Zur Neurosenlehre, Bd. I, P. 54) また、私が別の所で指摘した通り、膀胱の排泄力を増加する力の内で、性的興奮が最も有力であるのは疑は

れない。(エリス 『測度計としての膀胱』—「亞米利加皮膚病學雜誌」、一九〇二年、五月號 The B leader as a Dynamometer, American Journal of Dermatolog., May, 1902)

膀胱の充満と遺精

けれども、性的興奮がまたそれと反對に、膀胱の排泄力を妨げる事も少くない。それは時として羞耻の念の爲めにさうした結果を牽き起す事もある。即ち性的器官の緊張に向つて、神經的努力が傾注せられる事のために、膀胱の排泄的衝動が忘却せられるが如き場合がそれである。膀胱が詰まつてゐる事が、睡眠時の遺精原因の一要素となるといふ事は、よく知れ渡つてゐる事實である。それは、膀胱の排泄衝動が強いて抑壓されてゐるが爲め、その衝動が性的方面に移されて行つた結果である。これと同じ様に小便の排泄は、性的緊張を救ふ事が屢々ある。凡て、膀胱の收縮と關聯してゐる神經中樞の爆發は、一般に見ての精神上の緊張を救ふ様である。癲癇の種類によつては、その發作のクライマックスに遺尿するものがあるが、ガワース氏 (Gowers) は、輕微なる癲癇を治療するには、再々便通を計らなければならぬといふ事を力調してゐる。輕い癲癇は、よく輕微な何等かの緊張につれて、痙攣的力から起らものであつて、さうして現象は、特に婦人に多い。(サー・ダブルユー・ゴワース 『輕

微なる癲癇』——「英醫學雜誌」一九〇〇年一月六日載。發行所 Sir W. Gowers, minor Epilepsy, British Medical Journal, January 6, 1900, 同『癲癇』第二版一九〇一年、一〇六頁。ib, Epilepsy, 2d ed, 1901. P, 106, 及び「チューク心理的醫學辭書」中、エリス執筆にかゝる「膀胱及びそれに及ぼす精神的影響」Urinary Bladder, Influence of the mind, Tokes Dictionary of Psychological Medicine.) ガワース氏は、またある少女の癲癇に關する症狀を述べて、その少女の發作が主として排尿を抑壓する場合に起る事を説明してゐる。

若し斯くの如く、排尿が神経の緊張を救ふものとすれば、一般に排尿と直接の連絡を有する神経中樞の緊張を救ふことは決して怪しむに足らない。セイリエー氏 (Serioux) は、十二歳の少女の一例を擧げてゐる。

(セイリエー氏『性慾本能の異常に關する臨床的治療研究』Recherches Cliniques Sur les Anomalies de l'Instinct Sexuel P. 22.) 私も、これに類した或る一婦人を知つてゐるが、此の

婦人の言ふ所によれば、子供の時には特に前記の少女に見る様な傾向が激しかつたと言つてゐる。排尿は、性的快樂の極點に満足を得ると同様の動作である。即ちデイチュエーメツセンスの類似表象である。斯かる見地からして、シュルツエ・マルコウスキー氏 (Schultze—Malkowsky) は、七歳になる女兒の例を擧げてゐる。この小兒は、自分の遊び友達に種々の品物を褒美として與へ、四つ這ひに匍はせ。

(シュルツエ・マルコウスキー)

兒期に於ける性慾本能』第二卷、第八篇、三七二頁、Der Sexuelle Trieb in Kindesalter Ge schlecht und Gesellschaft voll. II, Part. 8, P. 372)

フェーレーの觀察

また、フェーレー氏 (Fere) は、同じく此の問題に就て非常に興味ある例を擧げてゐる。それによれば、ある一人の男の如きは發情期に達して以來、毎月一定の期間を置いて周期的に、非常に熾烈な性的興奮を感じたのであるが、四十五歳に達した時、此の

徴候はバツタリと止まると共に、これに代つて毎月同様の期間を置いて幾度となく排尿の衝動に襲はれる。爲めに其の期間にあつては、その男は日中にさへも遺尿する程であるが、性的衝動は少しも起らない。(フエーレー氏「男子に於ける性慾の定期性の状態に關する研究」Noter sur un Cas de Periodicite Sexuelle chez l'Homme 「生物學會誌事録」一九〇一年刊 Compendus de la Société de Biologie 2. 1901 及び「動作及び愉快」第二十九章 Travail et Plaisir, ch. xxx) 上述の數例は、性的興奮と膀胱の興奮との間に、互に相代償し合ふ關係のある事を、立派に證據立てゝるものである。恚うした、相互に相補ひ合ひ、代り合ふ性質のあることは、性生殖器と膀胱との間に密接なる神経系統上の連絡のある事に思ひ到つたならば、容易に諒解される得る所である。

笑の性的中樞に及ぼす影響

所が、恚うした關係は、單に是等二つの中樞にのみ限られてゐない。程度上の差こそあれ、もつと懸け離れた爆破的中樞とも矢張り關係がある。例へば、笑ひの痙攣の如きも、性中樞と或る關係を有してゐる様に見えるが如きそれである。グロース氏 (Groos) も指摘してゐる様に、笑の中に於ても特に性的意味を含んだ笑は、それが直ち

に性的方面に或る種の連絡を起して来る。即ち笑といふ努力を以て、性的亢奮の爆破を他の方面の爆發に轉ずる事となるのである。婦人にあつては、偶々哄笑を永く續けると排尿の衝動を催すといふ事は、一般に知られてゐる所である。或る所で、私はある婦人が「小便が出る程大笑ひをした」と言つたのを聞いた事があるが、勿論これは明かに笑と排尿との生理的關係を考へて言つた言葉ではないが、只實感からしてその密接な關係を言ひ現はしたものである。ベツヒテリユー教授 (Professor Bechterew) も、これに就て或る一適例を擧げてゐる。それは一人の若い婦人であるが、此の婦人は子供の時から笑ふ度びに必ず——友達の家にゐる場合であらうが、町中であらうが——場所を擇ばず自分でも制する事の出来ない排尿の衝動を感じて遺尿する。しかし、泌尿的器官には何等の故障なく、常人以上に健全である。(ベツヒテリユー「神経中樞」一八九九年刊 W. Bechterew, Neurologisches Centralblatt, 1899) 凡て神経の激動は、身體の全部に擴がり、且つ代り合ふて働らく傾をもつてゐる。それは各神経中樞は、皆多少とも相連絡してゐるからである。

排尿とテチウウメツセンスの轉換

マリー・ド・マナセイン氏 (Marie de Mancsine)

は次の様に言つてゐる。『凡ゆる苦痛は、外見上その苦痛とは無關係な種々の動作を起さしめる。吾々は、或る一個所の堪え難き痛みに對し、叫び、喚めき、四肢を動かし、軀を轉展せしめるが、しかし、これは吾々の苦痛をさうした動作によつて紛らし、その痛さの感覺を少なくしようとする爲めであるからして、その動作の根柢には十分の理由がある譯である。』（マリー・ド・マナセイン『伊太利生物學研究記録』一八九四年、二五〇頁、Marie de Manaceni Archive, Italianes de Biologie, 1894, P. 250）總ての生理學的動力の爆破の中に於ても、性的激情の爆破、即ちデチューメツセンスが最も強力であり且つマツシブであり、恰ど他の凡ての力を壓倒する程である。それ故、往昔の希臘の哲學者は、此の性的爆發を一種の輕微な癲癇の發作であると見てゐるが、この力が如何に強力であるかを考へ合はせる時、この説の立てられた事も、強ちに突飛の議論とは思はれぬ程である。デイチューメツセンスによつて、精神上の束縛が救はれるのは、到底排泄に比較する事の出来ない程に強い。それは、チューメツセンスによつて除々と長い間かゝつて蓄へた精力をば、神經的爆破中の最も強力なデイチューメツセンスの作用によつて、一時に發射するからであり、その發射は有機的組織中の凡ての神經中樞に反響するか

らである。

性的行爲癲癇と比喩

「アプテイラ (Addera 譯者註往昔希臘「Franceの都市」愚民の蠢集を以て有名なり) の詭辯者達は、性交は輕微な癲癇の發作であつて、救治することの出来ない病氣にひとしい」とアレキサンドリアのクレメント (Clement of Alexandria) は言つてゐる。『教師』第二卷第十章ペダゴグス Pedagogus bk. II, chapitre x) また、往昔の有名な醫學者セリウス・オーレリアヌス (Caelius Aurelianus) も『性的行爲は短期間の癲癇である』と言つてゐる。フェーレー氏 (Fere) は、性的行爲と癲癇とを比較し、此の二つの神經的嵐の形式が、何れも同じ様な現象を伴つて來る事があるといふ事を指摘してゐる。氏は、例へばこの何れもが視覺乃至嗅覺の主觀的感覺によつて起る事を説いてゐる。(フェーレー『癲癇』二八三頁——二八四頁 Les Epileptiques, PP. 283—284. 及び『交接過多及び癲癇』Exces Vénériens et Epilepsie 「生物學議事録」一八九七年刊。Comptes—rendus de la Société de Biologie, April 3, 1897. 及び同氏著『性的本能』二〇九頁、二一一頁、L'Instinct Sexuel, PP. 209, 221, 及び『癲癇的陰莖勃起症』Priapism Epileptique 「近世醫術」一八九九年二月四日刊行。La Médecine Moderne February 4, 1899) 癲癇の痙攣は、時としては性的

器官に影響する。癲癇が春情發動期に於て起り易い傾のある事は注目する價值がある。それ故、現代に於てもホールハアブ氏 (Ponhave) の如き醫學の大家さへも、性的行爲は「眞症の癲癇」であると唱へてゐる程である。最近に於ても、ルーボウ氏 (Rouland) ハンモンド氏 (Hammond) 及びコヴァレヴスキイ氏 (Kovalovsky) の如き人々も、性交と癲癇との比較研究をなし、二つの現象が非常に類似してゐる事を力説してゐる。又或る學者は、交接は癲癇の原因をなすものであるといふ事を主張してゐるが、然し、此の説はクリステイアン氏 (Christian) ストリュンベル氏 (Strimpell) 及びローウエンフェルト氏 (Lowenfeld) 氏の如き最近の醫學者によつて否定せられてゐる。(ローウエンフェルト「性的生活と神經病」一八九九年、六八頁 Lowenfeld, Sexu alleben und Nervenleiden, 1899, P. 68) フェーレー氏 (Féré) は、青年時代に手淫の發作に襲はれ、一日に數回の遂行をなした人の例を擧げて、それが癲癇の原因となつてゐるといふ事を説いてゐる。氏は、此の人が事實手淫を行はなくなると共に癲癇の發作に襲はれなかつた事を證明してゐる。(フェーレー「生物學協會報告」一八九七年四月三日發行 Féré, Complex—rendus de la Societ de Biologie Aprle 3, 1897)

性的衝動の分解の究極點

今日の所では、性的衝動の根本的分解を、上述の研究以上立入つて行く事は不可能の様に思はれる。ビューニス氏 (Beunis) は、彼の著書の中に於て、男性をして女性を覚めしめる所の性的刺激をは化學的作用と結び付けて研究しなければならぬといふ事を、漠然と提示してゐる。勿論氏の所謂化學的作用なるものも、直接に有機體の原子に働き懸ける力であるか、それとも間接に神經系統の媒介を経て有機體の原子に働き懸ける力であるか、氏自身にでも明瞭に説明してゐない。クレベンジャー (Clevenjer) スピツカー氏 (Spitzer) キイルナン氏 (Kilian) 其他の人々も、亦、性的衝動を以て、原形質の飢餓と見てゐる。ジョンニー・ルー氏 (Joanny Roux) は、性的要求は、有機體全體の必要であつて、『吾々は吾々の全身を以て全我的に變愛を求めるのである』と主張してゐる。

性慾と飢餓

氏は、「性慾」と「性的飢餓」との間に區別を設け、性的飢餓は有機體の全部を振撼する力であり、性慾はそれに比べるとズツとその範圍を局限せられた一局部に關係を有するものであると主張してゐる。氏は、その結論として、性慾的要求は、一種の營養的必要であると力調してゐる。(ジョンニー・ルー「性的本能の心理」、一八九九年刊、二二頁——二三頁、

Joanny Roux, *Psychologie de L'instinct, Sexuel*, 1899, Pd, 22—23) 然し、これに就ては、種々の學者から異論の提出された所であつて、カンノン氏の如きは一體に飢餓なるものが、有機體の全體を動かすものか否かさへ問題であると言つてゐる(カンノン『飢餓の本質』——通俗科學月刊雜誌「一九二二年九月刊・W, Cannon, The Nature of Hunger, popular Science Monthly, Sep., 1912) 尤もジョンニー・ルー氏の如き學説は、性的衝動を極めて局限し、單に一局部的の衝動と見る見解に反對するものとしては、確かに有効である。けれども、其の學説は所謂一種の投機的學説であつて、到底十分根據ある證明を與へる事は困難である。

性的衝動の二要素

けれども、兎に角われわれは、今や茲に性的衝動の内容を闡明するに好適の位置に來つた事を感じる。既にモル氏 (Moll) も指摘してゐる様に、吾々は、確かに性的衝動の中に二つの重大な要素のある事を發見する。こゝに二つの要素とは言ふものゝ、實は此の二要素は決して相互に無關係なものでもなく、又疎隔した關係のものでもなく、同一機能の發現する際に於ける二階段であつて、其の關係は密接不可離である。即ち第一階段は、普通の外的刺戟及び内的刺戟の影響を受け、その刺戟につれて種々の心象や慾求や觀念が心象に形

成せられ、それと共に有機的機關は活力を以て充たされ、生殖諸器官は血液を以て満たされる。斯くして第二の段階に移るのであるが、第二の舞臺にあつては、斯くして昂まつた生殖諸器官が強烈な性的刺戟によつて解放せられ、これと共に深かい慰藉と解放感とを伴ふ。第一段の過程に於ては緊張を、第二段の過程に於ては其の緊張の解放をする。

チユウメツセンスとデチユウメツセンス

それ故、われわれは、第一の衝動を腫脹の

過程 *Process of tumescence* と呼び、第二の衝動を除腫脹の過程 *Process of detumescence* と稱するものが、最も妥當な言葉であると思ふ。けれども、若しこの用語に何等かの非難があるならば、それは主として、チユウメツセンス及びデチユウメツセンスと同様に性的衝動の根本をなす所の精神上の負擔及びその解放よりも、上述の二機能を一層重視してゐるといふ事にあると思ふ。この精神上の負擔とそれの解放は、特に男子の場合にあつては、腫脹機能及び除腫脹機能の如き脈管上の現象よりも、一層強力である。第一の機能、即ち腫脹衝動は、通例男子の場合にあつては、女子の場合に於けるよりも一層積極的であつて、その力は、勢ひ第二階段たるデチユウメツセンスを命令的に強力を以て強むる程に昂まり、同時に相手の女性に對してこ

れと同様の熱烈な情緒的刺戟と性的緊張とを喚起せしめる二重の力をもつてゐる。第二の機能は、直接的には、新しくして生じた緊張を解放し、間接的にはこれによつて種族繁殖の作用を遂行せしめる所の二重の目的をもつてゐる。

吾人の見る所をもつてすれば、上述の如き解釋が、現在の所性的衝動を定義し、説明する企として、最も満足なる方法であると思ふ。

求愛の研究(完)

大正拾貳年六月十二日印刷
大正拾貳年六月二十日發行

定價金壹圓四十錢



(究研の愛求)

著 者 奧 平 利 成
 東京市麻布區新網町一丁目廿二番地

發 行 者 竹 内 猷 郎
 東京市麻布區飯倉町三丁目廿五番地

印 刷 所 洋 文 社
 東京市麻布區飯倉町三丁目廿五番地

印 刷 者 高 橋 芳 次 郎

發行所

東京市麻布區新網町一丁目廿二番地
振替東京五一七四四番

竹内書店

—(取次賣捌全國書店)—

ハートレー著 奥平利成譯

新刊

學校と性教育

四六判總クロス箱入
定價金壹圓五拾錢
送料八錢

無水 遠藤友四郎著

新刊

露西亞史實 拷問と虐殺

四六判紙裝
定價金壹圓三十錢
送料六錢

ロビンソン博士著 奥俊郎譯

好評

結婚と優生學

四六判上製
定價金壹圓貳拾錢
送料六錢

發兌 東京區新網町一廿二番 振替東京區布區新網町一廿二番 竹內書店

503
258

終